日 本 独 文 学 会 研 究 叢 書　129

ポスト・ハプスブルク神話

グローバリゼーションとローカルな土着性の狭間に動くオーストリア現代文学

土屋　勝彦　編

日本独文学会

Studienreihe der Japanischen Gesellschaft für Germanistik 129

Nach dem Habsburgischen Mythos

Zeitgenössische österreichische Literatur zwischen

Globalisierung und lokaler Verwurzelung

Herausgegeben
von
Masahiko TSUCHIYA

JGG Tokyo

目次（Index）

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・土屋勝彦　1
（Vorwort ・・・・・・・・・・・・・・・・・Masahiko Tsuchiya　1）

オーストリア現代文学ゼミナールと日本におけるオーストリア文学研究
・・・・・・・・・・・・・真道　杉　3
（Das „Seminar zur österreichischen Gegenwartsliteratur“ und die Erforschung
der österreichischen Literatur in Japan ・・・・Sugi Shindo　3）

Zurück in den Habsburger Mythos? Über den komplexen Zusammenhang von
Schreiben und Reisen im Werk von Peter Rosei ・・・・・・・・・・Walter Vogl　20
（ハプスブルク神話への後退か？　―ペーター・ローザイ作品における
創作と旅の錯綜した関係―・・・・・・・・ヴァルター・フォーグル　20）

現代オーストリア文学における周縁からの世界の見方、グローバルとローカル
の間で　―メナッセ、ラビノヴィチ、ヴィンクラー、ミシュクルニク、ランス
マイアーに関して―　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・徳永恭子 31

(Die Welt von den Rändern aus betrachtet: Österreichische Literatur zwischen
Regionalismus und Globalismus - am Beispiel von Menasse, Rabinovici,
Winkler, Mischkulnig und Ransmayr ・・・・・Kyoko Tokunaga　31)

Offene Grenzen: Flucht und Vernetzung, Aufbruch und Migration in der
österreichischen Gegenwartsliteratur　・・・・・・・・・・・Martin Kubaczek　49
（開かれた境界　―オーストリア現代文学における逃避とネットワーク、
出立と移住―・・・・・・・・・・・マーティン・クバチェク　49）

日本語討論記録　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・66
(Protokoll der Diskussion auf Japanisch・・・・・・・・・・・・・66)
Protokoll der Diskussion auf Deutsch・・・・・・・・・・・・・・・・・・・68
（ドイツ語による討論記録 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・68)

はじめに

本叢書は、日本独文学会 2017 年春季研究発表会（5 月 28 日、日本大学）で行われたシンポジウム「ポスト・ハプスブルク神話―グローバリゼーションとローカルな土着性の狭間に動くオーストリア現代文学―」における 4 名の発表とその後の質疑応答に基づき編集したものである。

本シンポジウムは、例年秋に行われるオーストリア現代文学ゼミナールの開催 25 周年を区切りとして、これまでゼミナールに招待された作家たちを中心に取り上げ、オーストリア現代文学の特徴と歩みをさまざまな視点から討議することを意図して行われた。まずオーストリア文学の特性をめぐるマグリスの「ハプスブルク神話」以後において提示された、古くて新しい「オーストリア文学」という概念がいまだ有意性を持ちうるかどうか、そもそも現代文学に適用しうるかどうかを問い直し、オーストリア出身のベテラン作家から若手作家にいたるまで、どのような文学傾向が見られるのか、オーストリア意識の在り方はどのようであるか、グローバル性とローカル性の両面をいかに保持・共有しているのか、など多様な問題を検討し議論した。

振り返れば、1960 年代から 90 年代にかけては、まだいくつかオーストリア的な特徴が見られる。たとえば、地方性、終末論意識、言語懐疑、言語遊戯、反郷土性、反カトリシズム、反ユートピア、アナーキズム、自己イロニーなどであり、トーマス・ベルンハルト、ペーター・ハントケ、ペーター・トゥリーニ、エルフリーデ・イェリネク、ゲルト・ヨンケ、フランツ・インナーホーファ、ゲルノート・ヴォルフグルーバー、ヨーゼフ・ヴィンクラーらの文学に共有される、閉塞的な状況に起因する鬱屈した抑圧感という特性に集約できるだろう。非政治的で微温的な美意識たる第二共和国の誇示・喧伝された牧歌性と、閉鎖的かつ伝統墨守的メンタリティとも呼びうる保守的風土に反抗し逃れようとしながら、自己批判的ないし憎悪愛的な自己意識によって引き裂かれ展開される悲観主義的かつ否定的な世界像とも呼べる特質である。これは現実隠蔽と現状維持に汲々とする退嬰的かつノスタルジックな「ハプスブルク神話」の現代的反照なのであろうか。地方的土着性に根差しつつ、大都市へ、さらに様々の異郷の世界へと広がっていく間テクスト的ポストモダン的な普遍的想像力の所産なのであろうか。また近年とくに東欧出身の移民作家たちによって優れた文学的成果をもたらしているインターカルチュラルな文学も、新たなオーストリア文学の一側面を形成しつつある。

真道は、オーストリア文化の普及政策の一環として1990年代に始められた、オーストリア現代文学ゼミナールの果たした役割から、ここ四半世紀の日本におけるオーストリア現代文学受容を論じている。フォーグルは、代表的なウィーンの作家ペーター・ローザイにおけるコスモポリタニズムと郷土性の関係を論じ、「ハプスブルク神話」の残滓からポストモダン文学への移行を考察する。徳永は、数名の中堅オーストリア作家たちの作品解釈を通して、オーストリア文学を特徴づける周縁性と国際性の相克および関連を明らかにする。そしてクバチェクは、オーストリアの若手作家たちの動向に注目し、とりわけ辺境から世界への跳躍として、ローカル性からグローバル世界へと逃走・拡散するポリフォニー的な文学として位置づけ考察している。なお、真道論文の最後に掲載された「オーストリア現代文学ゼミナール招聘作家関連文献一覧」は、この分野の文献表として初めてまとめられたもので、おおいに活用していただきたい。

最後に掲載したシンポジウムの討論については、徳永とフォーグルがそれぞれ日本語とドイツ語の部分を分担してまとめている。ケルンテンのマイノリティであるスロヴェニア語作家の問題、オーストリア国籍を持たない住民が3割を占めるウィーン、移民が2割を占めるオーストリアの現状、「普遍主義の個別化」と「個別主義の普遍化」の相互作用を指すグローカリゼーションの現象は、世界文学の傾向とも一致すること、またオーストリア精神が、スラブ語文化、ゲルマン語文化、ロマンス語文化の混交として形成されてきたことなど、過去から現代にいたるオーストリア的なるものをめぐる議論についても種々意見交換することができた。

会場でご質問をくださった会員の方々には、この場を借りてお礼申し上げる。また本研究叢書において展開されたオーストリア現代文学に関する諸問題に対して、読者諸賢のご意見・ご批判をお寄せくだされば幸いである。

2017年12月10日

土屋勝彦

オーストリア現代文学ゼミナールと
日本におけるオーストリア文学研究

真道　杉

はじめに

ユダヤ人の歴史を研究している野村真理氏は 1992 年の論考[1]の冒頭で次のように述べている。

「ながらくハプスブルク帝国領であったイタリアの都市トリエステ出身のオーストリア文学研究者、クラウディオ・マグリスの著書『オーストリア文学とハプスブルク神話』がでたとき、この本はオーストリア文学界に一大センセーションを巻き起こすことになった。邦訳者の「あとがき」によれば、「マグリスのたてた説はハプスブルク文化への攻撃」と受け止められ、さらにはそれを「かつての宗主ハプスブルク家にたいする誹謗と感情的告発」とみなす、きわめて悲壮な論評まで現われたという。だが、マグリスに対して示された感情的な反発や不快感こそ、まさしくオーストリアで「ハプスブルク神話」がもつ呪縛力を証明しているのかもしれない。」[2]

マグリスの『オーストリア文学とハプスブルク神話』のイタリア語初版が出たのは 1963 年[3]、ドイツ語訳が Otto Müller Verlag から出版されたのは 1966 年[4]。オーストリリアでは、第二次世界大戦後、オーストリアのアイデンティティとハプルブルク帝国との関係について、様々な議論がなされてきた。そして、この問題となった本の日本語訳が出たのが 1990 年。当時の日本では、世紀末ブームの中、ハプルブルク帝国末期のオーストリアの芸術文化に大きな注目が集まっていた時代だった。まさにハプスブルクの文化に大きな注目が集まった中で、「ハプスブルク神話」は日本においても現代のオーストリアとの対比として、

1　野村真理：「ハプスブルグ神話」と世紀末ウイーンのユダヤ人 ： 同化ユダヤ人のアイデンティティ問題をめぐって」［『金沢大学経済学部論集』第12巻2号, 1992, 191-22 頁］

2　同上　191 頁

3　Magris, Claudio: *Il mito asburgico nella lettereatura austriaca*. Torino (Einaudi) 1963

4　Magris, Claudio: *Der habsburgische Mythos in der österreichischen Literatur*. Salzburg (Szolnay) 1966

先に引用した論考などに多く取り上げられた。
前述の野村氏の引用が端的に表しているように、オーストリアの文学もまた、ハプスブルクの呪縛力を一つの力点として、「ポスト・ハプスブルク神話」という一つの大きな流れを常に意識して現在に至っているといえる。

1998 年に Konstante Fliedl によって刊行された *Das andere Österreich. Eine Vorstellung*[5]の中で、Fliedl はマグリスの「ハプスブルク神話」という概念の対極としてヨハン・ネストロイが扱われた構造を紹介している。「ハスプブルク的」なもの、つまり郷愁的で悲観的で、カトリック・バロック的な要素から外れるものをこの概念は捉えきれていないという批判がここにはある。その上で、オーストリア作家たちはその両極にも収まりきらない多様性を持っていることを指摘し、それらと「違うオーストリア」を文学に表した作家たちをこのアンソロジーの中で紹介している。

マグリスの著書のドイツ語訳が刊行されて半世紀、そして、本論考で扱うオーストリア現代文学ゼミナールは、昨年 2016 年に四半世紀の節目を迎えた。
日本で四半世紀にわたり毎年開催されているこのゼミナールの活動内容とその実績については、しかし、マグリスの著書とは違い、あまり知られてきてはいないのが現状である。長野県野沢温泉村という交通アクセスが良くない上に交通費参加費が高額になってしまう理由から敷居が高い、あるいは、開催地の地名から温泉旅行と勘違いされることもあり、その活動については、偏見もあったことは否めない。

しかし、その活動内容が認知されてこなかった最も大きな理由は、ゼミナールの学術成果がまとまった形で公表されることがなかったことであろう。ゼミナールで口述発表された論考は、散逸した形で学会誌や大学の紀要などに掲載されるか、あるいは、どこにも行き場がなくそのまま埋もれてしまっているものも少なくない。このような事情から、四半世紀にわたってこのゼミナールに参加している研究者たちですら、このゼミナールの学術成果についての全体像は把握していないのが現状である。

近年では、ホームページの開設により、ゼミナールの内容が動画でも公表されるようになっているが、データが残っていない年も少なくなく、全体像を示すまでには至っていない。

そこで、本シンポジウムを機に、この「ポスト・ハプスブルク神話」の中の最近の四半世紀の証人として、このゼミナールが行ってきた文学研究活動の歩

[5] Konstanze Fliedl: *Das andere Österreich. Eine Vorstellung.* München (dtv) 1998. の中の Eins nach dem anderen. Ein Nachwort(S.195-)参照。

みを概観し、ゼミナールが果たしてきた役割についてささやかな考察をしてみることとした。

１、オーストリア現代文学ゼミナールの概要について

オーストリア現代文学ゼミナールは、毎年原則一人の現役のオーストリア作家を野沢温泉村に招聘し、その作家の作品のみを３日間にわたって扱う異色の学術研究会である。その形式ゆえ、本ゼミナールの成果には二つの面がある。一つは、日本における招聘作家の作品翻訳及び研究の成果、そしてもう一つは、招聘作家たちがその日本体験を基にしてその後書いた作品郡が生まれたことで、オーストリア現代文学において「野沢文学」とも呼ばれる文学ジャンルを生み出したという成果である。[6]「野沢文学」については、今後まとまった研究が出てくることを期待し、本論では、主にオーストリア現代文学ゼミナールの今までの活動の概観、野沢招聘作家に関する日本国内の翻訳及び学術成果について考察する。

本ゼミナールを考察するために、まずは、その歴史的経緯を概観し、さらに、その学術成果については、CiNii 及び国立国会図書館の蔵書目録の検索を頼りに、文献目録をまとめた[7]。そして、その結果を踏まえ、ゼミナールの果たしてきた役割を考察する。

２、オーストリア現代文学ゼミナールの歴史的経緯

昨年 25 周年を迎えたこのオーストリア現代文学ゼミナールだが、25 年前の

---

[6] 「野沢文学」とは、招聘作家たちが帰国後に日本を題材にして書いた作品を、オーストリア現代文学ゼミナールに長年参加し推移を見てきたゲルマニストたちが総称した呼称である。Walter Ruprechter 等はこれを一つのジャンルと呼んでもよいものと捉えている。
そのほかに、本ゼミナールの企画に関わった人たちによるアンソロジーもある。2011 年に刊行された Jürgen Draschan / Bertlinde Vögel (Hrsg.): *Nachbeben Japan: 12 Standpunkte.* Wien (Luftschacht) 2012.は東日本大震災を受けて編纂されたアンソロジーであるが、Franzobel, Lydia Mischkulnig, Peter Rosei, Josef Winkler 等野沢ゼミナールの招聘作家が寄稿している。

[7] 本稿の為の検索は時間の制約のため、一部の海外刊行物を除き日本国内におけるものに限定せざるを得なかった。検索対象となっているものに関しても、今回の検索にかからなかったものも多々あり、シンポジウム後に多くの方々から文献情報をご教示いただいた。この場でお礼を申し上げたい。それでもなお遺漏があるため、お気付きの方は文献情報をご教示いただければ幸いである。また、ゼミナールで口述発表された論考の中には当然ドイツ語圏を中心に海外の雑誌や単行本に掲載されているものも少なくない。これらの成果についての調査は今後の課題である。

1992 年に、どのようにして成立したのか。ゼミナールのホームページを見ると、1992 年から 1993 年は LektorInnen Seminar と位置付けられている。[8]
招聘者を呼んだ形式のゼミナールが行われる前、当時この日本大学文理学部で教鞭をとっていた Martin Kubaczek 氏の発案により、オーストリア文学及び文化を主なテーマとしたゼミナールが 2 回開かれている。1992 年秋に Kubaczek 氏、及び Walter Vogl 氏を中心として、主に参加者によるオーストリア文学の最前線について研究発表をしたのが始まりである。大学の枠を超えたネイティブスピーカーの教員同士の勉強会として、参加者が研究発表をして、当時日本では限定された形でしか得られないドイツ語圏文学の最新情報等を交換しあう場として発足したのである。

この時代を振り返ってみると、1990 年はドイツ再統一の年、ヨーロッパは現在の EU の姿に向けて大きな転換期を迎えていた。1994 年にオーストリアは EU 加盟の是非を問う国民投票が行われ、永世中立国としての立場や EU における立場、また経済などの観点から国のあり方そのものが大きく問われた。ドイツが統一に向けて、戦後処理問題を克服して周辺国への理解を求めてゆく様子をにらみつつ、オーストリアでは、1980 年代に起こったワルトハイムスキャンダルを抱え、国の内部で強い自己批判をしながらの転換期を迎えていた。トーマス・ベルンハルトの *Heldenplatz*[9]などの作品が象徴的な役割を果たす時代であった。このような大きな歴史の転換期を目の前にして、日本で教鞭をとっているオーストリアやドイツ出身の教員が、情報共有をし、その時代の文学の動向を考察する場を求めたのである。

そのゼミナールに最初の招聘者が招かれたのは 1994 年である。招聘されたのは、まだ作家ではなく、ドイツ文学者の Rüdiger Wischenbart だった。
1995 年はオーストリア 1000 年として、フランクフルトの書籍見本市においてオーストリアが大きなテーマとして扱われた。Tausend Jahre Österreich：オーストリア 1000 年は、Osterricchi という名称が書かれた最も古い文書いわゆる Osterrichi-Urkunde[10]と呼ばれる文書が 996 年 11 月 1 日付であることから、オーストリアが生まれて 1000 年として祝われた。折しも EU 加盟の是非を問う時期と重なり、国内ではオーストリア国民意識が大きく議論された。
1994 年に招聘された Rüdiger Wischenbart は、1995 年のフランクフルト書籍見本市で、オーストリア文学セクションの統括を任されていた人物だった。当時、オーストリア文学とはそもそも何かという議論がオーストリアでは盛んになさ

[8] http://www.onsem.info/das-seminar/ （2017 年 9 月 11 日閲覧）
[9] Thomas Bernhard: *Heldenplatz*. Berlin (Suhrkamp) 1988.
[10] 現在、Osterrichi-Urkunde はミュンヘンにあるバイエルン州立博物館に保管されている。

れていたが、その議論の台風の目とも言える人物の招聘であった。オーストリア現代文学ゼミナールの成立期を見ると、当時のヨーロッパにおけるめまぐるしい変化と、それに連動する文学の最前線を、遠く離れた日本からリアルタイムで追い続けようとする、在日のオーストリア文学者たちの情熱を再認識することができる。

1995 年に初めて現役の作家が招聘された。それが、Josef Haslinger だった。当時はまだ、ゼミナール全体が招聘作家をテーマとはしておらず、その作家とは別のテーマについての発表も珍しくなかった。それから数年かけて、原則として招聘作家についてのみの発表をする現在の形式へと発展して行ったのである。

作家本人を目の前にして、そこに集まったゲルマニストたちが作品論を口述発表し、議論をするというあまり例を見ない形式でのゼミナールは、作家にとっては一種の居心地の悪さをも含むものであったが、企画者たちの努力により、オーストリア国内の作家たちの中でも話題となり、現在まで毎年途切れることなく招聘者を招くことができている。

その企画には、当初からオーストリア大使館全面的な支援もあった。日本人研究者も多く集まるゼミナールとなったことで、本研究会は当初の目的であったオーストリア人教員の勉強会という枠を超えたものとなり、また、オーストリア政府にとっては、自国の教員の研修助成から、日本との間の一つの文化外交としての意味を持つこととなった。

2000 年からは、当時オーストリア大使館文化参事官を務めていた Wolf Heim 氏の働きかけで、オーストリアのザンクト・アントンと姉妹都市提携を結んでいる長野県野沢温泉村での開催となった。当時、野沢温泉村にはザンクト・アントンから派遣された職員が常駐するほど、両都市間の親交は密であった。東京から３時間半、二泊三日にわたってこののどかな山間の村で行われるゼミナールの内容は、しばしばこの四半世紀の間の時代を色濃く映し出すものとなった。

３、オーストリア現代文学ゼミナールの招聘作家のアクチュアリティー

本論の巻末にあげた表は、今までの招聘者とその招聘者に関する国内で刊行された成果物を一覧表にまとめたものである。招聘された作家ごとに成果物をまとめた。

ゼミナールではしばしば招聘作家の最新作も扱われ、それらはその時代を色

濃く映し出す鏡であった。

1995 年、最初の招聘者として来日した、Josef Haslinger の *Opernball*[11]はウィーンの国立オペラ座を舞台にしながら、希しくも同年 3 月に日本でおきたオウムのサリン事件を予言するような内容となり、一見平和な社会に突如として起こる無差別テロの脅威が世界的に迫っていることを示した。その十年後の 2005 年に招聘された Kathrin Röggla の際には、Röggla が 2001 年 9 月 11 日にアメリカで起きた同時多発テロを目の当たりにして、その場の人間心理を鋭く映し出した作品が扱われた。

また、社会派作家として知られる Robert Menasse の現代のオーストリアの抱える社会問題を鋭く扱った作品、ユダヤ人の立場からオーストリアを見る Robert Schindel や Doron Rabinovici、南チロル問題を全面的に扱った Sabine Gruber の作品そして、何より作家本人たちによる作品の背景の説明やトークにより、ゼミナールはオーストリアの現代文学及びオーストリアがまさにポスト・ハプスブルク時代そして EU の中の一国として存在する現在において抱えている問題とその文学表現の最前線を垣間見る貴重な場を提供し続けてきた。

他方、招聘作家たちは、ヨーロッパの日常から遠く離れた野沢温泉村で日本にいるゲルマニストたちの発表を聞き、質問を受け、普段あまり体験しない形で自らの作品に向かい合い、自分の作品を語る場を、新たな創作活動の契機にしてきた。３日間缶詰状態で日本の研究者たちと顔を付き合わせる環境が、今まで遠い異国のエキゾチックな地であった日本を彼らの中で違う質のものに転換させる場としても本ゼミナールは機能していると考えられる。この四半世紀の間に、野沢ゼミナール招聘作家たちが日本を題材にして書いた作品は数多く、日本の研究者は研究対象である文学作品に、突如自分や自分たちのことが書かれているという非常に気恥ずかしい経験をすることとなった。[12]その日本の描き方も、この四半世紀において変化がみられる。ヨーロッパ人の目から見た、また短期間の滞在の中で得た印象を元に書かれた作品は、しばしば日本人の目から見ると、偏見やヨーロッパ優越主義を垣間見させるものであるとこともあり、そのような作品に対して私たち日本の研究者はどのように対峙していくのかという一つの大きな課題も、このゼミナールは私たちに至近距離で提示している。

独自性を求める作家の中には、例えば、Lydia Mischkulnig のように日本体験を

---

[11] Josef Haslinger: *Opernball*. Frankfurt am Main (Fischer) 1995.
[12] 代表的なものとして、
Josef Winkler: *Roppongi: Requiem für einen Vater*. Berlin (Suhrkamp) 2009. や
Kathrin Röggla: *tokio, rückwärtstagebuch.* Nürnberg (Vfmk) 2009.などが挙げられる。

単なる文学作品にするだけでは飽き足らず、日本の双六研究にまでその取材範囲を押し広げている作家も出てきた。今後の四半世紀においては、このゼミナールが存続して行けば、これまでオーストリアで書かれた野沢文学は自ずと変遷してゆくことであろう。そして、それがまた新たな相互理解そして、文学の新しい地平を生み出してゆく契機として作用することが期待される。

４、日本における研究成果の今回の調査について

本論の巻末に、2016 年までに招聘された各作家について 2017 年 10 月現在までに国内で刊行された物を調査対象にし、現在までに判明した物をリストアップした。今回の調査では、オーストリア現代文学ゼミナールに招聘される以前に国内で発表されていた成果も、ゼミナールで口述発表された物ではない論文や翻訳も含まれている。また、国立国会図書館の蔵書目録を調査対象としたため、国内刊行物でないものを数点混じっている。口述発表されたものには国外で刊行されたものも数多く存在するが、調査範囲が広くなりすぎるため、今回の調査対象からは外した。上記の方法で調査した結果、約 100 件ほどの刊行物が見つかった。

この調査でわかるのは、例えば 2016 年に招聘された Clemens J. Setz 氏については、ゼミナールにおいて 10 本も口述発表があるが、調査段階では CiNii などへの登録がまだ間に合っていないこともあるのであろうが、２本しか刊行物にはなっていない。本論の前半で述べた通り、ゼミナールの内容を示す報告書はない。2009 年の Thomas Glavinic 以降に関しては、ゼミナールのホームページで各口述発表のビデオが公開されている。Thomas Glavinic の例をみると、ホームページに口述発表のビデオは７本、論文として刊行されているものは３本である。ゼミナールの口述発表を含む成果の全容を明らかにすることは難しい状況である。

別の角度から文献表を見ると、各作家の招聘年とその直後に刊行された論文が圧倒的に多いことが分かる。作家によっては、来日後さらに現在までの間に後続研究がなされている作家も、招聘された時期にのみ論文が集中しており、後続研究がまだ出ていない作家もいるが、これだけの先行研究は、今後、招聘された作家たちの研究に大きな足がかりとなるであろう。

Gerhard Roth, Peter Rosei が来日した際には、彼らの来日に合わせて、小さな対訳本も刊行された。クバチェク氏が私財を投じて、Folio 出版社から発行した

ものである。[13] 招聘作家は、来日の際にオーストリア現代文学ゼミナールのみならず、幾つかの大学で朗読会を開くことが通例であるため、その朗読に合わせて日本語訳の作成も多くなされているが、全てが雑誌や本の形式で印刷されているわけではない。

また、ゼミナールの使用言語がドイツ語であることから、国内刊行物にもかかわらず、ドイツ人やオーストリア人の研究者だけでなく、日本人研究者の使用言語もドイツ語のものが多く、国内のゼミナールにおいてドイツ語論文の本数増大にも貢献していることがわかる。これらの論文は近年の各学会誌等の電子ジャーナル化により、散逸した形ではあるが、世界にも成果を発信していることがわかる。

次の四半世紀に向けて、ゼミナールそして、何よりもそこで扱われるオーストリア文学が時代の流れの中でどのように変化してゆくのか、それをリアルタイムで見守る場として、今後のゼミナール存続の重要性を改めて認識するとともに、これからのオーストリア文学研究を担う特に若い研究者がその証人として、またゼミナールの成果を発信する担い手として、ゼミナールに継続的に参加する意義は大きいと考える。

オーストリア現代文学ゼミナール招聘作家関連文献一覧（国内検索）

Wischenbart, Rüdiger（1994 年招聘）

Kawamata. Tram Passage / mit Texten von W. Valentin Jurjevec, Gabriele Koller, Rüdiger Wischenbart und einem Foto-Essay von Elfi Tripamer. Wien (Stadtraum Remise) 1995

Haslinger, Josef（1995 年招聘）

ヨーゼフ・ハスリンガー（上田浩二訳）:『オペラ座毒ガス殺人事件』（筑摩書房）1995

Josef Haslinger, 村山 雅人：インタビュー：新しい不寛容に対抗しなければならない［岩波書店『世界』第 623 号, 1996, 174-184 頁］

與倉 アンドレーア：Josef Haslingers Romane. Teil 1: Opernball［鹿児島大学法文

[13] ゲアハルト・ロート（須永恆雄・真道 杉訳）：蜜蜂について/ Über Bienen. Wien-Bozen (Folio) 1996.
ペーター・ローザイ（平野篤司、中島 愛、須永恒雄訳）:Kurzer Regentag: Aufzeichnungen. / mit einem Text von Walter Vogl. Wien-Bozen (Folio) 1997.

学部『人文学科論集 : 鹿児島大学法文学部紀要』 第 53 号, 2001, 145-165 頁］
與倉 アンドレーア：Josef Haslingers Romane. Teil 2: Das Vaterspiel［鹿児島大学法文学部『人文学科論集 : 鹿児島大学法文学部紀要』第 67 号, 2008, 115-128 頁］

Roth, Gerhard（1996 年招聘）

若槻 敬佐：拡散する世界像 : ゲルハルト・ロートの『ありきたりの死』[『山形大學紀要　人文科學』第 113 号, 1988, 155-177 頁］
ゲアハルト・ロート（須永恆雄・真道杉訳）：蜜蜂について/ Über Bienen. Wien-Bozen (Folio) 1996
Martin Kubaczek: Das Nein der Sorge. Zu Gerhard Roths „Landläufiger Tod“. In:蜜蜂について/ Über Bienen. Wien-Bozen (Folio) 1996, S. 46-63.
Tsuchiya Masahiko: "Ich schreibe für imaginäre Leser" : Ein Gespräch mit Gerhard Roth in Japan.［『名古屋市立大学人文社会学部研究紀要』第 2 号, 1997, 89-98 頁］
Renate Giacomuzzi-Putz: Zu Gerhard Roths Roman „Der See“ (1995).［日本オーストリア文学会『オーストリア文学』第 13 号, 1997, 18-29 頁］
保坂 一夫: 現実の迷路から想像世界へ―Gerhard Roth: „Landläufiger Tod“ について［日本オーストリア文学会『オーストリア文学』第 13 号, 1997, 1-8 頁］
土屋勝彦：ゲルハルト・ロートの現在―『沈黙の資料集』をめぐって［『ドイツ文学研究』第 29 号, 1997, 169-181 頁］
Birgit Maria Fuchs: Der Plan. Roman. ［ノルデン刊行会『Norden』第 35 号, 1998, 39-42 頁］
ゲルハルト・ロート（須永恆雄訳）：ウィーンの内部への旅 : 死に憑かれた都（彩流社） 2000.
Clemens Amann: Gerhard Roth „Die Geschichte der Dunkelheit“ (白鴎大学『白鴎大学論集』第 15 号, 2000, 283-295 頁］
Masahiko Tsuchiya: Die aktionistische Variante der Sprachkritik bei Gerhard Roth.（『名古屋市立大学人文社会学部研究紀要』第 10 号, 2001, 179-189 頁］
Uta Schaffers: Dr. Konrad Feldt und die >fremden Frauen<: Figurenkonstellation und Figurenkonzeption in Gerhard Roths Roman „Der Plan“. （『藝文研究』第 91 巻 2 号, 2006, 1-37 頁］

Rosei, Peter（1997 年招聘）

ペーター・ローザイ（平野篤司、中島 愛、須永恒雄訳）: Kurzer Regentag : Aufzeichnungen / Peter Rosei ; mit einem Text von Walter Vogl. Wien-Bozen (Folio) 1997.
Masahiko Tsuchiya: Bemerkungen zum Hörspiel „Verzauberung“ von Peter Rosei. ［日

本オーストリア文学会『オーストリア文学』第 14 号, 1998, 7-18 頁］
Karin Ruprechter-Prenn: Maske, Spiel, Triptychon − Zur distributiven Einheit von Peter Roseis Roman Persona ［日本オーストリア文学会『オーストリア文学』第 14 号, 1998, 7-18 頁］
Walter Vogl: Es gibt ein Leben nach dem Tod des Autors.Versuch über Peter Rosei. ［『慶応義塾大学日吉紀要ドイツ語学・文学』第 27 号, 1998, 109-121 頁］
Eberhard, Scheiffele: Das „wunderschöne Detail“ und die „allgemeine Verzweiflung“ Landstriche von Peter Rosei. ［『Waseda Blätter』第 6 号, 1999, 40-56 頁］
Walter Vogl: Im freien Fall: Erzähltechnisches bei Peter Rosei. ［『慶応義塾大学日吉紀要ドイツ語学・文学』第 31 号, 2000, 75-85 頁］
Walter Vogl: Absolut Wien : über Peter Roseis Roman „Wien Metropolis“. ［『慶應義塾大学日吉紀要ドイツ語学・文学』第 42 号, 2006, 1-30 頁］

Hell, Bodo（1998 年招聘）
Walter Ruprechter: Der mimetische Wirklichkeitserzeuger : Kommentar zu einer Lesung von Bodo Hell. ［首都大学東京都市教養学部人文・社会系, 東京都立大学人文学部『人文学報』第 465 号, 2012, 11-17 頁］

Ingold, Philipp（1998 年招聘）
Walter Ruprechter: Zu Felix Philipp Ingolds „Projekt einer Universalpoetik“.［首都大学東京都市教養学部人文・社会系, 東京都立大学人文学部『人文学報』第 303 号, 1999, 189-206 頁］
Hiroaki Sekiguchi: Hölderlin in der modernen Lyrik. Felix Phillip Ingold und die lyrische Umgebung heute.［日本独文学会東海支部『ドイツ文学研究』第 31 号, 1999, 71-80 頁］

Streeruwitz, Marlene（1999 年招聘)
Karin Anna Ruprechter-Prenn: Punkte und Schritte. „Zu Marlene Streeruwitz' Schreibverfahren“. ［首都大学東京都市教養学部人文・社会系　東京都立大学人文学部『人文学報』第 312 号, 2000, 295-318 頁］
Martin Kubaczek: Die Sehnsucht und das Infame. Das Desillusionstheater Marlene Streeruwitz. ［『ドイツ文学』第 103 号, 1999, 100-110 頁］
Verena Holler: Zu den Frauenfiguren in der Prosa von Marlene Streeruwitz.［日本オーストリア文学会『オーストリア文学』第 16 号, 2000, 14-27 頁］

Itaru Terao: Über den Chor der Japaner in „New York. New York.“ von Marlene Streeruwitz. ［日本オーストリア文学会『オーストリア文学』第 16 号, 2000, 28-35 頁］
松永美穂：父権制の言葉 VS プンクト ［『Waseda Blätter』第 7 号, 2000, 163-166 頁］
國重 裕：オーストリア小説に見る《家族ドラマ》の変遷 ―M.シュトレールヴィッツ『誘惑』(1996)［『研究報告』第 14 号, 2000, 37-48 頁］
マレーネ・シュトレールヴィッツ（松永美穂訳）:『誘惑』（鳥影社・ロゴス企画部） 2004.
マレーネ・シュトレールヴィッツ（松永美穂訳）:『ワイキキ・ビーチ』（論創社） 2006

Schindel, Robert（2000 年招聘）
土屋勝彦：ウィーンのユダヤ人―ローベルト・シンデルの『生まれついて』［日本独文学会東海支部『ドイツ文学研究』第 28 号, 1996, 151-164 頁］
Walter Vogl: Man erzählt Witze und die Vergangenheit kommt zurück. Der Wiener Dichter Robert Schindel. ［日本オーストリア文学会『オーストリア文学』第 17 号, 2001, 9-17 頁］
Yoko Yamaguchi: Gedicht als Schrift und Gedicht als Speise: Kommunikationsbilder bei Paul Celan und Robert Schindel. ［日本オーストリア文学会『オーストリア文学』第 17 号, 2001, 18-27 頁］
カーリン・ループレヒター・プレン, Robert Schindel（岩崎稔訳）: 記憶と想起―オーストリアの作家ローベルト・シンデルとのインタヴュー ［『みすず』 第 43 号, 2001, 13-27 頁］

Menasse, Robert（2001 年招聘）
Walter Vogl: Österreich ist eine Fiktion. Wie der Wiener Romancier und Essayist Robert Menasse eine Heimat aus Wörtern erfindet. ［『慶応義塾大学日吉紀要、ドイツ語学・文学』第 17 号, 1993, 31-48 頁］
Shizuo Ogino: Robert Menasses Roman „Sinnliche Gewißheit. ［『教養諸学研究』第 112 号, 2002, 71-82 頁］
Gabriele Stumpp: Anmerkungen zu Robert Menasses „Die Vertreibung aus der Hölle“. ［日本オーストリア文学会『オーストリア文学』第 18 号, 2002, 1-11 頁］
保坂一夫：ローベルト・メナッセの三部作－その構成と方法［日本大学文理学部人文科学研究所『研究紀要』第 64 号, 2002, 85-101 頁］

Haas, Wolf （2002 年招聘）

Wolf Haas（福本義憲訳）:『きたれ、甘き死よ』（水声社）2001

Karin Ruprechter-Prenn: Der Krimi als Alibi. Über den Schriftsteller Wolf Haas. ［首都大学東京都市教養学部人文・社会系, 東京都立大学人文学部『人文学報』第 343 号, 2003, 49-63 頁］

Walter Vogl: Noch ein Tier, bitte!Erzähltechnisches in Wolf Haas' Roman „Wie die Tiere“. ［日本オーストリア文学会『オーストリア文学』第 19 号, 2003, 12-19 頁］

Olaf Schiedge: Zur Translation bildlicher Rede vom Deutschen ins Japanische am Beispiel des Romans „Komm, süßer Tod“ (1998) von Wolf Haas. ［日本独文学会東海支部『ドイツ文学研究』第 40 号, 2008, 103-124 頁］

Scholl, Sabine（2003 年招聘）

Keiko Hamazaki: Rekonstruktion des vergessenen Lebens. Zu Sabine Scholls Roman "Die geheimen Aufzeichnungen Marinas". ［日本オーストリア文学会『オーストリア文学』第 20 号, 2004, 1-104 頁］

Masahiko Tsuchiya: Literaturbetrieb, Fremderfahrungen, transnationale Hybride und Minderheitenliteratur. Interview mit Sabine Scholl. ［『名古屋市立大学人文社会学部研究紀要』第 17 号, 2004, 235-248 頁］

土屋 勝彦, 竹内 宏 : 越境作家ザビーネ・ショルの掌編翻訳・解題［『名古屋市立大学人文社会学部研究紀要』第 18 号, 2005, 167-185 頁］

Sabine Scholl: Sprachlos in Japan: Notizen zur globalen Seele. Wien (Sonderzahl) 2006.

Schreiner, Margit （2003 年招聘）

山本浩司 : 講演会報告 : マルギット･シュライナー氏の朗読会を聞いて［『Waseda Blätter』第 11 号, 2004, 184-193 頁］

Risa Tamaru: (Un)Bequemlichkeit in der geschlechtlichen Dualität. Vorstellungswelt eines Ehemanns in Margit Schreiners „Haus, Frauen, Sex“. ［日本オーストリア文学会『オーストリア文学』第 21 号, 2005, 11-19 頁］

Winkler, Josef （2004 年招聘）

ヨーゼフ・ウィンクラー（若槻敬佐訳）: 思い出のウクライナ : ある強制移送の軌跡 （同学社）2002.

Kikuko Kashiwagi: Memento mori in Dorfgeschichten von Josef Winkler und Shichiro Fukazawa. ［日本独文学会東海支部『ドイツ文学研究』第 37 号, 2005, 163-176 頁］

Walter Ruprechter: Das Ritual als Literatur − Zur Schreib- und Wahrnehmungsweise

Josef Winklers. ［首都大学東京都市教養学部人文・社会系, 東京都立大学人文学部『人文学報』第 365 号, 2005, 91-102 頁］
Josef Winkler（コレクティーフメトロポーレ訳）:『屍骸、家族を窺いながら』より〔含 解説〕[『DeLi : Deutsche Literatur』第 4 号, 2005, 113-125 頁］
鈴木　伸一：解体される故郷 / 郷土―現代オーストリアの文学と社会・政治の関係性［『文学における不在　原研二先生追悼論文集』2011, 227-237頁］
Hiroshi Yamamoto: Stilleben / Natura morta als Stilprinzip. Zu den Todesritualen in Josef Winklers jüngstem Text „Roppongi. Requiem für einen Vater“. In: Transkulturalität. Identitäten in neuem Licht. Asiatische Germanistentagung in Kanazawa 2008, München (2012), S. 429-434.
山本 浩司：映画と死 ーアイヒンガーとヴィンクラーにみるオートフィクション［『早稲田大学大学院文学研究科紀要』 第 59 巻 2 号, 2014, 57-69 頁］
Hiroshi Yamamoto: Vermessung von Todeslandschaften. Zum Irre- und Engführungsverfahren in Josef Winklers „Roppongi“. In: Études Germaniques, 71. (2008) S. 89-102.

Röggla, Kathrin（2005 年招聘）
Kathrin Röggla（植松なつみ訳）: 私たちは眠らない（論創社）2006.
Herrad Heselhaus: Kathrin Rögglas „Niemand lacht rückwärts“ und der Diskurs der Adoleszenz.［筑波ドイツ文学会『Rhodus : Zeitschrift für Germanisik』第 22 号, 2006, 97-123 頁］
Christian Zemsauer: Kritik am Jargon der „Unter 35“-jährigen. Zu Kathrin Rögglas „Irres Wetter“. ［上智大学ヨーロッパ研究所『ドイツ語圏研究』第 24 号, 2006, 127-142 頁］
Kathrin Röggla: tokio, rückwärtstagebuch. Nürnberg (Vfmk) 2009.

Franzobel（2006 年招聘）
Walter Ruprechter: Streiflichter auf Franzobel. ［首都大学東京都市教養学部人文・社会系, 東京都立大学人文学部『人文学報』第 390 号, 2007, 107-115 頁］
山本 浩司:フランツォーベル朗読会報告[『Waseda Blätter』第 14 号, 2007, 218-219 頁］

Gauß, Karl-Markus（2007 年招聘）

Waterhouse, Peter（2008 年招聘）
ペーター・ウォータハウス：花. Wien/Bozen (Folio) 1993

ペーター・ウォータハウス（多和田 葉子訳）: 小石計画。見えない大学のためにより―ドイツ語圏の現役詩人たち-3- ［思潮社『現代詩手帖』第 40 号, 1997, 114-116 頁］
尾立 勝典 : 詩的自我の行方―Peter Waterhouse の詩 Blumen について［『Waseda Blätter』第 4 号, 1997, 139-139 頁］
真道 杉: Peter Waterhouse: Im Genesis-Gelände. Versuch über einige Gedichte von Paul Celan und Andrea Zanzotto, (Basel 1998)（書評）［『ドイツ文學』第 103 号, 1999, 195 頁］
Leopold Federmair: Ein ex-jugoslawischer Reisebericht. E 71 von Peter Waterhouse. ［日本オーストリア文学会『オーストリア文学』第 25 号, 2009, 1-10 頁］
保坂 一夫 : 戦争と世界(第 1 章)[含 解説] ［『DeLi : Deutsche Literatur』第 10 号, 2010, 75-94 頁］
Eberhard Scheiffele: Wider das Erzählen gegen eine Welt ohne Eigenschaften: Peter Waterhouse „(Krieg und Welt)“. In: Neue Beiträge zur Germanistik, Bd.10, Heft1, (Bd.143) , (2011) S.77-79.
Hiroshi Yamamoto: Die Sprach-Landschaft eines Spaziergängers. Zu Peter Waterhouse' Reisegedichten „Prosperos Land“. In: Inter. Festschrift für Eberhard Scheiffele zum Siebzigsten. hrsg. von Akihiko Fujii / Hiroshi Yamamoto. (2012) S. 132-138.

Glavinic, Thomas（2009 年招聘）
トーマス・グラヴィニッチ（西川賢一訳）: ドローへの愛 （河出書房新社）2003
トーマス・グラヴィニッチ（西川賢一訳）: 小説 カール・ハフナーの最期〔含 解説〕」［『DeLi : Deutsche Literatur』2003, 64-72 頁］
Tomoko Somiya: Passiv mit Leidenschaft: „Carl Haffners Liebe zum Unentschieden“ (1998) und „Wie man leben soll“ (2004) von Thomas Glavinic. ［『明治薬科大学研究紀要. 人文科学・社会科学』第 39 号, 2009, 61-66 頁］
與倉 アンドレーア : Ich habe viele Ichs. Betrachtungen zu Thomas Glavinics Roman „Das bin doch ich“. ［鹿児島大学法文学部『人文学科論集 鹿児島大学法文学部紀要』第 71 号, 2010, 175-194 頁］
Motoko Yajin: Über den Roman. Der Kameramörder von Thomas Glavinic. Eine Analyse der medienkritischen Aspekte. ［日本独文学会中国四国支部『ドイツ文学論集』第 45 号, 2012, 5-18 頁］

Mischkulnig, Lydia（2010 年招聘）
Masahiko Tuchiya: Identitätssuche in Lydia Mischkulnigs Roman "Umarmung". ［『名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究』第 15 号, 2011, 169-177 頁］

Walter Vogl: Kadaver, Kapriolen, Kippfiguren: Kult und Kalkül bei Lydia Mischkulnig. ［『慶応義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・文学』第 47 号, 2011, 51-71 頁］
リディア・ミッシュクルニク（徳永 恭子訳）: 〈翻訳〉『地方での出会い』 ［『近畿大学教養・外国語教育センター紀要. 外国語編』第 2 巻 1 号, 2011, 441-445 頁］
徳永 恭子 : 60 年代とゼロ年代のオーストリア反郷土文学（上智大学ヨーロッパ研究所『ヨーロッパ研究』第 4 号, 2011, 23-39 頁］
土屋 勝彦 : アイデンティティ、真実性、エロティズム、文学言語・・・ ― 作家リディア・ミッシュクルニクとの対話. Identität, Authentizität, Erotismus, literarische Sprache...: Gespräch mit Lydia Mischkulnig.（『人間文化研究』第 23 号, 2015, 79-86 頁］

Einzinger, Erwin（2011 年招聘）
Motoko Yajin: Die Weltsicht in Erwin Einzingers Gedichtband „Hunde am Fenster“: Ein textlinguistischer Annäherungsversuch. (『広島ドイツ文学』第 27 号, 2013, 1-12 号］

Rabinovici, Doron（2012 年招聘）
山本　浩司: 世界の文学ドイツ：ドロン・ラビノヴィッチ『他のどこか』文化間の矛盾に生きる ［『東京新聞』2011. 3. 23 夕刊］
Motoko Yajin: Erzählter und verschwiegener Holocaust : Über den Roman „Suche nach M.“ von Doron Rabinovici. ［『オーストリア文学』第 29 号, 2013, 1-10 頁］
Hiroshi Yamamoto: Bodenloser Satiriker. Zum Problem der Versöhnbarkeit von Kindern der NS-Opfer und-Täter in Doron Rabinovicis Roman „Ohnehin“. ［日本独文学会中国四国支部『ドイツ文学論集』第 47 号, 2014, 19-31 頁］

Wimmer, Herbert J.（2013 年招聘）
Walter Vogl: Wiener Wut: Die literarische Welt des Herbert J. Wimmer. ［『慶応義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・文学』第 52 号, 2015, 1-25 頁］

Gruber, Sabine（2014 年招聘）
Erich Meuthen: Erinnerung in Sabine Grubers „Stillbach oder Die Sehnsucht“. ［日本オーストリア文学会『オーストリア文学』第 31 号, 2015, 12-20 頁］
Atsushi Imai: Identität und die Zeitgeschichte in der Literatur aus Südtirol. Ein Vergleich zwischen Joseph Zoderer und Sabine Gruber. (『龍谷紀要』第 37 号, 2015, 39-49 頁］

Walter Vogl: Überleben durch das Erzählen vom Tod. Versuch über die Südtiroler Autorin Sabine Gruber.（『慶應義塾大学日吉紀要　ドイツ語学･文学』第53号, 2016, 81-102頁］
Sugi Shindo: Stillbach, oder die Orientierung im Verschwinden. Überlegungen zur Sabine Grubers Roman „Stillbach oder Die Sehnsucht“. (桜門ドイツ文学会『リュンコイス』第 49 号,　2016, 105-113 頁］
眞鍋正紀:盲点としての南チロルと身体―Sabine Gruber における隠喩の越境的連携について［日本独文学会研究叢書（土屋勝彦編）『文学はどこに向かうのか―ドイツ語圏越境文学の諸相と可能性』第 113 号, 2016, 31－51 頁］

Ransmayr, Christoph（2015 年招聘）
クリストフ･ランスマイヤー (高橋輝暁, 高橋智恵子訳) : ラスト･ワールド　（中央公論）　1996
岡田　素之 : 終わりなき戦後の廃墟から　［『Waseda Blätter』第 4 号, 1997, 130-137 頁］
クリストフ・ランスマイヤー（樋口倫子訳）: 氷と闇の恐怖（中央公論）1998
徳永　恭子 : 死角の文学ークリストフ・ランスマイアーの『モルブス・キタハラ』に関して　［『オーストリア文学』第 30 号, 2014, 32-41 頁］
徳永　恭子：キーファーとランスマイアーの重さと軽さ―造形芸術と文学の錬金術的融合アルカヘスト［日本独文学会叢書（川島隆編）『現代ドイツ文学－境界のゆらぎ』第 111 号, 2015, 71-95 頁］
徳永　恭子: ヘテロトピアとしての二十一世紀山岳小説―C・ランスマイアーの『飛んでいく山』に関して (阪神独文学会『ドイツ文学論篝』第 57 号, 2016, 27-49 頁］
Aya Kumeda: „Am Anfang war die Sonne.“ Eine postapokalyptische Landschaft in Christoph Ransmayrs Strahlender Untergang.　［『慶應義塾大学日吉紀要　ドイツ語学・文学』第53号, 2016, 103-118頁］
徳永　恭子：時間的な終わりと空間的な世界の果て–クリストフ・ランスマイアーにおける周縁の時間制、気候を中心に［『ドイツ文学』第 154 号, 2017, 122-139 頁］

Setz, Clemens J.（2016 年招聘）
Ayano Inukai: Clemens J. Setz und seine Grenzen der Sprache. (『人文学報．ドイツ語圏文化論』第 513-14 号, 2017, 101-111 頁］
園田みどり :『女とギターのあいだの時刻』を読む : クレメンス・J・ゼッツ氏朗読［『人文学報．ドイツ語圏文化論』第 513-14 号, 2017, 67-100 頁］

その他関連論文:

Masahiko Tsuchiya: Der Anti-Heimatroman in Österreich （『人文社会研究』第 42 号, 1996, 71-85 頁］

土屋勝彦：オーストリア国民文学の諸問題（『京都産業大学国際言語科学研究所所報』第 19 号, 1998, 129-153 頁］

Masahiko Tsuchiya:　Essay über zeitgenössische österreichische Literatur von Leopold Federmair. (『名古屋学院大学論集　言語・文化篇』第 28 巻 第 2 号, 2017, 159-175 頁］

土屋勝彦：オーストリア現代文学と越境文学ー二つのシンポジウムを終えて［『名古屋学院大学論集　言語・文化篇』第 29 巻　第 1 号, 2017, 77-82 頁］

Zurück in den Habsburger Mythos?
Über den komplexen Zusammenhang von Schreiben und Reisen im Werk von Peter Rosei

Walter Vogl

Ich werde ihnen hier keinen systematischen Überblick über die österreichische Literatur der Gegenwart bieten. Mit Peter Rosei (der 1997 Gast des Seminars zur österreichischen Gegenwartsliteratur in Japan war) habe ich jedoch einen Autor gewählt, der seit fast einem halben Jahrhundert schreibt und dessen Entwicklung eine Art Geschichte der österreichischen Literatur im Kleinen ist, wenn auch von einem etwas extremen Standpunkt aus. Denn Peter Rosei, meint der Kritiker Helmut Schödel, ist kein Schriftsteller für Jedermann. Er ist ein Autor für „Liebhaber"[1].
Auch ein noch so kursorischer Blick auf das um die vierzig Buchtitel enthaltende Werkverzeichnis des 1946 in Wien geborenen Peter Rosei macht schnell klar: Das Reisemotiv spielt in seinem Werk eine so herausragende Rolle, dass es bis in die Buchtitel vordringt. Hier ein paar Kostproben:

„Wege"[2]
„Entwurf für eine Welt ohne Menschen. Entwurf zu einer Reise ohne Ziel"[3]
„Von Hier nach Dort"[4]
„Reise ohne Ende"[5]
„Fliegende Pfeile. Aus den Reiseaufzeichnungen"[6]
„St. Petersburg. Paris. Tokyo"[7]
„Album von der traurigen und glückstrahlenden Reise"[8]

So machtvoll die Metaphern vom Unterwegssein auch sein mögen, Peter Rosei wurde von der Literaturkritik bis jetzt noch kaum als Reiseschriftsteller wahrgenommen. Im

[1] Helmut Schödel: Virtuosen der Endstation. In: Süddeutsche Zeitung, 24. März 2015. Zit nach: http://www.sueddeutsche.de/kultur/belletristik-virtuosen-der-endstation-1.2406001.
[2] Peter Rosei: Wege. Erzählungen, Residenz, Salzburg 1974.
[3] Ders.: Entwurf für eine Welt ohne Menschen. Entwurf zu einer Reise ohne Ziel, Residenz, Salzburg 1975.
[4] Ders.: Von Hier nach Dort, Residenz, Salzburg/Wien 1978.
[5] Ders.: Reise ohne Ende, Suhrkamp, Frankfurt a. Main 1983.
[6] Ders.: Fliegende Pfeile. Aus den Reiseaufzeichnungen, Klett-Cotta, Stuttgart 1993.
[7] Ders.: St. Petersburg. Paris. Tokyo …, Sonderzahl, Wien 2000.
[8] Ders.: Album von der traurigen und glückstrahlenden Reise, Droschl, Graz 2002.

Gesamtwerk haben seine Publikationen von Reisebüchern im engeren Sinn, also von Büchern, die von tatsächlichen Reisen und der Auseinandersetzung mit einer Fremde berichten, deren Realien jederzeit nachprüfbar sind, zwar durchaus einen eigenen Stellenwert, sie haben jedoch keine so zentrale Rolle wie das erzählerische Werk erlangt.
Anfang der 1970er Jahre praktiziert Rosei eine Art von ethnologischem Blick auf eine Welt, die in seinen damaligen Texten auch dort, wo sie in den Farben und Formen der Heimat auftritt, meist als eine abweisende Fremde erfahren wird, geprägt von einer Geschichte der Armut, von Verwerfungen und Spannungen zwischen sozialen und manchmal auch ethnischen Gruppen, einzelnen Dörfern sowie der Menschen untereinander. Die Einwohner sind wie die Gegenden, die sie bewohnen, abweisend und unerreichbar. In der Erzählung „Nach Outschena"[9] ist man in Richtung auf einen Talschluss hin unterwegs: In dieser im Raum stattfindenden Engführung erfährt die geschilderte Problematik noch einmal eine Zuspitzung. Natur und Gesellschaft stehen in einem unauflösbaren und schicksalhaften Zusammenhang: Homo homini lupus.
Die Richtung des Unterwegsseins wird durch den Charakter dieser Expeditionen vorgegeben, die in die Berge und aus ihnen raus, in die großen Ebenen und in die Wüsten führen, ins Siedlungsgebiet der Nomaden. Die Sprache der Texte ist knapp und protokollartig. In ihrer Parabelhaftigkeit sind sie Franz Kafka verbunden, in ihrer Verschmelzung von Realismus und Phantastik aber auch Jorge Luis Borges. Wie bei Borges spielt die Frage nach den letzten Dingen von Anfang an eine wichtige Rolle im Werk Peter Roseis. Die Aussichtslosigkeit, von der die condition humaine geprägt ist, führt sehr schnell dazu, dass der Autor die Landschaften, die er durchquert und in denen er auch sich selbst nur mehr als bloß Wahrnehmenden empfindet, zunehmend entvölkert. Eines seiner Bücher aus dieser Periode heißt nicht zufällig „Entwurf für eine Welt ohne Menschen. Entwurf zu einer Reise ohne Ziel"[10]. Sehr schön zeigt sich hier die Roseische Methode des Schreibens in Denkbildern. In dem Text, der eine Art poetischer Essay ist, wird die Ausweglosigkeit einer Suche beschrieben.

„Von der Höhe des Sattels blickt man in ein neues Land. Hügelig und waldbedeckt breitet es sich über die Erde hin. Ströme durchziehen es, Seen liegen zwischen Bergen eingeschlossen, die Täler sind von Wasser erfüllt. In weitester Ferne, an der Krümmung der Erde, glitzert ein großes Wasser, in das sich die Ströme ergießen. Wenn man auf das zu seinen Füßen weit sich öffnende Land hinabschaut, so ist es nicht Freude, was man

[9] In: Peter Rosei: Landstriche, Residenz, Salzburg 1972.
[10] Siehe Anm. 3.

empfindet, eher Müdigkeit und ein gewisser sinnloser, nichts mehr bewirkender Trotz. - So lange habe ich wandern müssen, sagt man, das also ist das gelobte Land. - Worauf sich diese letzte Feststellung bezieht, bleibt ungewiss, vielleicht ist sie auch nur getroffen, um nicht der Sprachlosigkeit, der stummen Verzweiflung endgültig anheimzufallen."[11]

Hügel und Wälder, Berge, Flüsse und Seen: Das gelobte Land trägt auffallend viele Züge der österreichischen Landschaft. Rosei verwendet hier das durch eine reflexive Brechung am Ende ins Existenzialistische gewendete Modell der Gralssuche, das, folgt man Paul Fussell, in säkularisierter Form eines der Charakteristika von Reiseliteratur ist.[12] Die Gralssuche ist zentral für den Ritterroman, der in seiner Spätzeit von Cervantes im „Don Quijote" ins Burleske abgewandelt wurde. Auch der Topos des Locus Amoenus, ein Hauptmotiv idealistischer Naturschilderung seit der Antike, ist erkennbar. Und mit dem Locus Amoenus kommen auch Weltabkehr und Melancholie ins Spiel. Rosei befindet sich hier eindeutig in den Fußstapfen von Walter Benjamin und Gerd Mattenklott, der in seiner Studie „Melancholie in der Dramatik des Sturm und Drang" von Benjamin her „die Schwermut als Topos und als Form, als Motiv der Literatur und als Prinzip ihrer ästhetischen Organisation"[13] beschrieben hat. „Benjamins essayistische Städtebilder und Reiseminiaturen, seine Analysen der modernen Wahrnehmungspraxis, seine Verklärung des ästhetischen Augenblicks, das Vergnügen am Unkonventionellen und Nicht-Kanonischen"[14] haben auch Rosei geprägt.
Ende der siebziger Jahre folgen Roseis so genannte „Reiseromane", in denen langsam individuelle Lebensgeschichten in den Vordergrund treten: „Wer war Edgar Allen"[15] (1977), „Von Hier nach Dort"[16] (1978) und „Das schnelle Glück"[17] (1980).
Seit Anfang des zwanzigsten Jahrhunderts werden in gelungenen Reisebüchern jeweils zwei Reisen beschreiben, eine durch die Außenwelt und eine andere, die nach Innen

---

[11] Zit. nach Peter Rosei: Entwurf zu einer Reise ohne Ziel, Klett-Cotta, Stuttgart 1989, S. 84.
[12] Vgl. dazu die entsprechenden Ausführungen von Paul Fussell in: Paul Fussell: Abroad. British Literary Traveling Between the Wars. Oxford University Press, Oxford/New York 1980, S. 206 ff.
[13] Peter André Alt: Grenzgänger der schönen Erkenntnis, in: Der Tagesspiegel, 7. Oktober 2009. Zit nach: http://www.tagesspiegel.de/wissen/nachruf-grenzgaenger-der-schoenen-erkenntnis/1611458.html .
[14] Ebd.
[15] Peter Rosei: Wer war Edgar Allen? Residenz, Salzburg 1977.
[16] Vgl. Anm. 4.
[17] Peter Rosei: Das schnelle Glück, Residenz, Salzburg/Wien 1980.

führt. Wie schon Michel Butor sehr richtig festgehalten ist, ist nicht nur das Lesen, sondern auch das Schreiben eine Art von Reise.[18] Reisevorstellungen, so Paul Fussell, besetzen die Imagination eines jeden Schriftstellers, wenn er mit dem Schreiben beginnt, zu Übergängen kommt, sich verliert, zurückkehrt, weitergeht, abschweift, sich dem Beschriebenen aus einer etwas anderen Richtung nähert und Dinge von verschiedenen Standpunkten aus betrachtet. Diese Beschreibung ist über weite Strecken identisch mit Roseis Schreibkalkül, und daher wundert es nicht, wenn der Autor die durch das Reisemotiv eröffneten Möglichkeiten auch weidlich nutzt. In seinen drei Reiseromanen, die nicht so sehr von wirklichen Reisen berichten, sondern sich eher an der Metapher, dass das Leben eine Reise ist, abarbeiten, fungiert der Raum, nach Peter Ensberg, „als Seismograph innerer Zustände"[19].

„Einfach unterwegs sein, von Nirgendwo nach Nirgendwo, gehen um des Gehens willen. Auch dieser Art des Gehens liegt eine Absicht zugrunde. Man kann sie in dem Satz zusammenfassen, dass Fortbewegung, wenn auch zweck- und sinnlos, dem Stillstand vorzuziehen sei."[20]

Was für die Erzähler von „Landstriche" und „Wege" gilt, das trifft ebenfalls auf die Figuren der drei Reiseromane zu: Sie werden von einem Gefühl der Verlorenheit beherrscht, demgegenüber Bewegung, Unterwegssein das einzig wirksame Mittel ist. Rosei greift in seinen Reiseromanen Vorlagen auf, wie sie Jack Kerouac mit seinem Roman „On the Road" lieferte und wie sie dann über das Genre des Road Movies Eingang in die populäre Wahrnehmung fanden. Als Transportmittel rückt in „Von Hier nach Dort" das Motorrad in den Mittelpunkt, als Hommage an den Film „Easy Rider" ebenso wie als Ausdruck eigener Erfahrungen und Präferenzen: Rosei war damals mit seinem Freund H. C. Artmann auf einem Moped halb Europa abgefahren. Für Reisen mit dem Motorrad gilt: Das Transportmittel ist das eigentliche Abenteuer.[21] Doch trotz der dem Motorrad inhärenten Herausforderung, die sich gut zur Charakterbildung eignet und dazu, dem Leben der Menschen ein Ziel zu geben, handeln die bekanntesten unter den Motorrad-Büchern weniger vom Reisen als von verschiedensten anderen Dingen. Wie im Road Movie auch, sind die geschilderten Figuren Außenseiter, die sich treiben

[18] Vgl. Paul Fussell, Abroad, S. 213.
[19] Peter Ensberg: Einfach unterwegs sein - Zur Wahrnehmungsproblematik und zum Problematischen der Wahrnehmung bei Peter Rosei. In: Gerhard Fuchs und Günther A. Höfler (Hg): Peter Rosei Dossier, Droschl, Graz 1994, S. 33-63, hier: S. 41.
[20] In: Wege, Salzburg: Residenz Verlag 1974, S. 61
[21] Steven E. Alford: Motorcycles. In: Jennifer Speake (Hg.): Literature of Travel and Exploration, Fitzroy Dearborn, New York 2003, S. 823.

lassen. Dieses Moment haben sie auch mit dem Pikaresken Roman gemein. Und dessen lose Abfolge von Episoden findet sich auch bei Rosei wieder, dessen Romane zeigen, „wie der Identitätsverlust das Subjekt an Bilder ausliefert"[22]. Die fiebrige Atmosphäre von „On the Road" hat bei Rosei jedoch eingefrorenen Bildern Platz gemacht. Peter Ensberg hält kritisch fest, dass der „Persönlichkeitszerfall ästhetisiert"[23] wird. Fanale der Freiheit wie ihre Vorbilder sind Roseis Reiseromane nicht. Eher schon Bewegungen der schönen Ratlosigkeit. Teil Eins der Reise des mit Drogen handelnden und unterwegs von seinen Kindheitstraumata und schweren Träumen heimgesuchten Helden führt von den Alpen über die großen Städte in den Ebenen bis ans Meer, an eine Schwelle voller Symbolik. Ein versteckter Todeswunsch? Im Gegensatz zu dem bis heute im Populärkino ausgeschlachteten und von James Joyce so bezeichneten, von James Campbell modellhaft beschriebenen Monomythos[24], in dem von einem magischen Aufbruch des Helden, den Fährnissen, Mühsalen und Bewährungsproben der Reise sowie der glücklichen Rückkehr, dem geläuterten Wiedereintreten in seine alte Persönlichkeit und den damit verbundenen Sozialbeziehungen erzählt wird, ist die Reise, die in „Von Hier nach Dort" unternommen wird, eine ohne Ende/Rückkehr. „Ich ging dann weiter."[25] heißt es lakonisch am Schluss - eine leitmotivische Wiederholung, mit der bereits der erste Abschnitt schließt. Neben der Metapher vom Leben als Reise bemüht Rosei in diesem Roman auch die vom Leben als Traum. Traumszenen überlagen die und vermischen sich mit der Wirklichkeit, und die beiden Sphären können von den Hauptfiguren immer weniger auseinandergehalten werden. In „Wer war Edgar Allen" wird dieser Prozess durch die Einnahme von Drogen noch beschleunigt.

„Einmal träumte ich von einem Land, das weit und grün war, grün und weit. Bäche waren darin und Seen. Sie glitzerten. Und es war eine Art von Musik über dem Land, ein Tönen, und Bäume, Gras und Felsen standen darin wie erlöst."[26]

Sätze wie diese sind es, die Peter Rosei seinen Ruf als Schönschreiber eingebracht haben. Auch die obige, in bester romantischer Tradition stehende Passage aus „Von Hier nach Dort" wird leitmotivisch wiederholt. Fremdheitserfahrungen werden aufgebrochen durch das Naturerlebnis.
In einem Essayband mit dem Titel „Naturverstrickt"[27] heißt es dazu viele Jahre später:

---

[22] Peter Ensberg, in: Fuchs und Höfler (Anm. 19), S. 55.
[23] Ebd.
[24] Vgl. Paul Fussell (Anm. 12), S. 208.
[25] Von Hier nach Dort (Anm. 4), S. 118.
[26] Ebd., S. 15.

„Ist man gänzlich fremd, bleibt immer die Natur als das Vertraute."[28]

Im auf die Reiseromane folgenden Roman „Milchstraße"[29] (1981), von der Kritik als einer der ersten postmodernen Romane im deutschsprachigen Raum gefeiert, reiht Rosei eine in sieben Büchern sich ausbreitende riesige Menge an sehr detaillierten Impressionen und Episoden aneinander, die nur durch die Hauptfigur Ellis verbunden werden, der zu diesem Zweck rastlos unterwegs sein muss. Das lineare Unterwegssein wird suspendiert und durch ein Modell ersetzt, in dem alles mit allem in dynamische Beziehung tritt. Manfred Mixner sieht hier ein filmisches Erzählverfahren am Werk, in dem so, Michael Wetzel, „Aktuelles mit Erinnerung [montiert wird], um - der stellaren Metapher folgend - das gegenwärtig Sichtbare als Epiphänomen von Lichtjahre entfernten Ereignissen durchschaubar werden zu lassen."[30]
In Roseis frühen Büchern ging es vor allem um das Unterwegssein, die Reise im engeren Sinn entwickelte sich erst nach und nach aus dieser Thematik heraus und zwar vorrangig durch das Schreiben von Reisefeuilletons, die im Falle Roseis meist Städtebilder sind, seit Mitte der siebziger Jahren entstanden sind und zum ersten Mal in einem Sammelband mit dem Titel „Reise ohne Ende. Aufzeichnungsbücher" 1983 erschienen sind. Sie sind fortlaufende Reflexionen zur Arbeit des Schreibens.

„Der Wissenserwerb als hermeneutische Wahrnehmungsanstrengung ist in den Texten selbst nicht dargestellt. Thematisiert wird vielmehr das ästhetische Projekt einer schreibenden Entäußerung und räumlichen Übersetzung jenes >Wissens< ins literarische Stadt-Bild. Die Projektionsbewegung verläuft dabei strikt von innen nach außen, der Stadtname fungiert lediglich als thematische Vorgabe, die die Blickrichtung, d.h. die Selektionskriterien, bei der bildlichen Darstellung von Bewußtseinsinhalten festlegt."[31]

Die auf „Die Milchstraße" folgende Werkgruppe ist ein Zyklus mit dem Titel „15,000 Seelen", der aus insgesamt sechs Büchern besteht: die Romane „Komödie"[32]

---

[27] Peter Rosei: Naturverstrickt. Sonderzahl, Wien 1998.
[28] Ebd., S. 39.
[29] Peter Rosei: Die Milchstraße, Residenz, Salzburg/Wien 1981.
[30] Michael Wetzel: Peter Rosei. In: Hermann Korte (Hg.): Kritisches Lexikon zur deutschsprachigen Gegenwartsliteratur (KLG), 110. Nlg., KLG- 6/15, 2015, S. 7.
[31] Daniela Bartens: Anmerkungen zu einer Poetik des Raums. In: Walter Vogl (Hg.): Basic Rosei, Sonderzahl Verlag: Wien 2000, S. 150.
[32] Peter Rosei: Komödie, Residenz, Salzburg/Wien 1984.

sowie ”Mann und Frau”[33] (beide 1984) bilden den rechten Flügel, „15,000 Seelen”[34] (1985) das Mittelstück, „Die Wolken”[35] (1986) und „Der Aufstand”[36] (1987) den linken Flügel. Ein kurzer Text mit dem Titel „Unser Landschaftsbericht”[37] (1988) macht den Abschluss und bildet die Rückseite. Er zeigt die von den vorangegangenen Büchern in ihren verschiedenen Facetten beschriebene spätkapitalistische Gesellschaft als postapokalyptisches Mythenfeld.

Die motivlichen Wiederholungen sowie die immer stärker bemerkbaren manipulativen Eingriffe der Erzählerstimme in Roseis damaligen Büchern waren auch von der Kritik bemerkt worden: „Erzählerische Faulheit”[38] war eine der diesbezüglich extremsten Reaktionen auf die Werke dieser Periode.

Im Lauf der achtziger und mehr noch im Lauf der neunziger Jahre wird deutlich, wie Rosei das bisher von ihm Geschriebene nicht nur in neuen Editionen herausbringt, sondern auch seziert, zerlegt, und im Lichte einer neuen Lektüre umarrangiert und in neue Werkzusammenhänge einbaut. Die trockene Protokollsprache der Anfänge, vor deren Hintergrund sich der romantische Schmelz einzelner Landschaftsbeschreibungen besonders gut abhob, wird zunehmend ausladender und im weitesten Sinn barocker. Manche der Städtebilder aus dieser Zeit (in „Fliegende Pfeile”) sind ein wahrer Rausch der Sinne, jedoch gebändigt in der Form des Reisefeuilletons und durch Anschauung gesättigter als die Texte aus „Reise ohne Ende”. Das Reisefeuilleton entwickelt sich mehr und mehr zu einem eigenständigen Strang innerhalb des Roseischen Oeuvres (der Autor reist auch entsprechend weiter und intensiver, besucht die USA und Lateinamerika sowie Asien) und die Reiseaufzeichnungen finden auch in Romane Einlass.

Das multiperspektivische Schreiben der achtziger Jahre wird in den Neunzigern abgelöst von einer Konzentration des Autors auf eine Vielzahl von Tonlagen. Ausdruck dieser gewandelten Strategie ist der Roman „Persona”, der eigentlich aus drei in unterschiedlichen Tonlagen erzählten eigenständigen Büchern besteht: einer Reisegeschichte am Anfang, die aus verschiedenen und im Lauf der achtziger Jahre bereits veröffentlichten Reisefeuilletons komponiert ist, einem Gesellschaftsroman, in dessen Zentrum ein Bildhauer und Objektkünstler steht sowie einem utopischen Roman.

---

[33] Ders.: Mann und Frau, Residenz, Salzburg/Wien 1984.
[34] Ders.: 15,000 Seelen, Residenz, Salzburg/Wien 1985.
[35] Ders.: Die Wolken, Residenz, Salzburg/Wien 1986.
[36] Ders.: Der Aufstand, Residenz, Salzburg/Wien 1987.
[37] Ders. Unser Landschaftsbericht, Residenz, Salzburg/Wien 1988.
[38] Der Ausdruck stammt von Otto A. Böhmer. Zit. nach Ensberg, in: Fuchs und Höfler (Anm. 19), S. 52.

Wie viele der österreichischen AutorInnen, die in den letzten Jahrzehnten zu Lesungen, Vorträgen, Symposien, Konferenzen, Lehraufträgen und Privatreisen nach Japan gekommen[39] sind, hat auch Rosei seine Japan-Eindrücke in zwei Texten festgehalten: „Anmerkungen anläßlich einer Japan-Reise"[40] und „Einige Bemerkungen über das Essen in Japan"[41], in welchem mehrere sich auf das Tafeln und das Bedienungspersonal beziehende Passagen wortwörtlich aus dem vorangegangenen Text übernommen worden sind. Eigene Beobachtungen, beschreibende Passagen, Denksplitter und Kommentare von Gewährsleuten sind in diesen Texten zu einem kunstvollen Tableau arrangiert, deren Autor sich auf die Beobachterrolle des Gastes zurückzieht und sich gleichzeitig wie ein König und ein Unterworfener fühlt: Wesentlich mächtiger ist das vom weiblichen Dienstpersonal, das nicht individuell wahrgenommen wird, ausgeführte Gesetz als „das kurzatmige, temporäre des Gastes"[42]. Die Gesichter der Bedienerinnen sind hinter einer dicken Schicht Schminke und Puder zu Masken erstarrt. Diese Masken scheinen stets zu „lächeln - und lächeln doch nicht"[43]. Ein „glatzköpfiger Wirt" sieht bei anderer Gelegenheit aus wie ein „No-Schauspieler in Maske"[44]. Mit Hilfe von Anleihen bei Hokusai, der Zen-Ästhetik sowie dem No-Theater, Origami und dem Neon-Kult des nächtlichen Shibuya entsteht so ein Japan-Bild, das in Vielem (und ohne es explizit zu erwähnen) der Sichtweise von Roland Barthes verbunden ist, das der Schönheit der Landschaft viel Raum einräumt, das Spiel der Farben in der freien Natur in allen Schattierungen enthält sowie mit einem wunderbar künstlerischen Effekt endet und so den europäischen Japonismus des späten 19. Jahrhunderts in gewisser Weise auf Japan zurückprojiziert.

Das „Album von der traurigen und glücksstrahlenden Reise"[45] (2002) ist wieder eine Art Aufzeichnungsbuch, in dem das Reisen, so verheißt der Klappentext, eine Lebensform ist, „die nicht zufällig mit der Literatur Hand in Hand geht". Im titelgebenden Text beschäftigt sich der Autor intensiv mit Phänomenen der Beschleunigung (Paul Virilio), der ungerechten Weltordnung, sowie vor allem mit dem Internet. Es werden aber auch viele altbekannte Themen wieder aufgegriffen, vor allem das der Ziellosigkeit von Roseis Reisen und die Einsamkeit.

---

[39] Vgl. Renate Giacomuzzi (Hg.): Nach Japan – Reiselesebuch, Konkursbuch, Tübingen 2005. Sowie: Jürgen Draschan und Bertlinde Vögel: Nachbeben Japan, Luftschacht Verlag, Wien 2012.

[40] In: Peter Rosei: St. Petersburg, Paris, Tokyo… (Vgl. Anm. 7), S. 107-115.

[41] In: Peter Rosei: Die sog. Unsterblichkeit - Kleine Schriften, Sonderzahl, Wien 2006, S. 63-70.

[42] St. Petersburg, Paris, Tokyo …, S. 114.

[43] Ebd.

[44] End., S. 109.

[45] Peter Rosei: Album von der traurigen und glückstrahlenden Reise (Anm. 8).

„Wahrscheinlich ist dieses Aufsuchen der Einsamkeit, diese Sucht nach Verloren-Sein und Verlorenheit eben der Weg, mein Weg NACH HAUSE: - Und mein Zuhause ist eben ein Abgrund aus Schwärze und Nichtsein."[46]

Der „Weg nach Hause" wurde vom Autor während der von intensiver Lehrtätigkeit im Ausland geprägten neunziger Jahre aber auch noch auf eine andere Art begangen. Schon seit 1991 waren Prosatexte entstanden, die von einer gewissen Rückbesinnung auf mitteleuropäische Wurzeln im Allgemeinen (ich denke da an die „Geschichte von früher"[47] im Buch „Der Mann, der sterben wollte") und österreichische beziehungsweise Wiener Wurzeln im Besonderen zeugen, wie zum Beispiel die Erzählung „Gnadenlos" im 2000 erschienenen Roman „Liebe und Tod"[48].
„Gnadenlos" bildet so etwas wie die Keimzelle des darauf folgenden Romanprojekts mit dem Titel „Wiener Dateien", das Rosei 2005 mit der Veröffentlichung von „Wien Metropolis" begann und 2014 mit der Veröffentlichung von „Die Globalisten" abschloss und das aus insgesamt fünf Büchern[49] besteht.
Rosei verengt hier bewusst seine Perspektive auf Wien[50], zieht sich aus den virtuellen Weiten des Netzes zurück und läßt seine Reisen, die ihn nach wie vor um die ganze Welt führen, Reisen sein. Die „Wiener Dateien" sind ein Versuch, vor dem Hintergrund der „Welt von gestern"[51], also der Kontinuität bestimmter Mentalitäten und Phänomene der Habsburger Monarchie eine Geschichte der Republik Österreich nach 1945 zu erzählen. Der Autor tut dies in Short Cuts, jedoch in einem seltsam altertümlichen Ton, welcher dieser Technik eigentlich zuwiderzulaufen scheint. Und er führt einen allmächtigen Erzähler ein, der wie ein blasierter Weltenschöpfer wirkt und das Geschehen in diesen schillernden Gesellschaftspanoramen auf seltsam joviale Weise kommentiert. Die Handlungsmuster sind durchwegs hart am Rande der Trivialität. Rosei wirkt in diesen fünf Romanen wie ein Autor, „aus dessen Hinterlassenschaft mit

---

[46] Ebd.: S. 81.
[47] In: Peter Rosei: Der Mann, der sterben wollte samt einer Geschichte von früher, Klett-Cotta, Stuttgart 1991.
[48] Peter Rosei: Liebe und Tod, Deuticke, Wien 2000.
[49] Ders.: Wiener Dateien, Residenz Verlag: Salzburg/Wien 2016. Der erste Band, „Wien Metropolis", erschien 2005, es folgten "Das große Töten" (2009), „Geld!"(2011), „Madame Stern" (2013) und „Die Globalisten" (2014). Alle im Residenz Verlag.
[50] Nebenschauplätze wie das Salzkammergut, Kärnten, das Burgenland, Zürich, Budapest und auch Fidschi gewinnen kaum ein Eigenleben. Sie akzentuieren die Zuspitzung allen Geschehens auf Wien hin.
[51] Vgl. Stefan Zweig: Die Welt von Gestern. Erinnerungen eines Europäers, 1942.

der (jeweils, Einfügung Vogl) neuesten Publikation wieder ein verschollenes Werk ans Licht kam"[52], so Helmut Schödel. Roseis Wien ist, läßt man seinen Blick nur ein wenig vom schönen Schein der Oberflächen weg schweifen, eine „bald gekrösenhaft und fettig sich ringelnde, bald bröselig-grau oder schorfig und wund anzuschauende Masse"[53] und erinnert mindestens ebenso sehr an den Orkus wie an die Hauptstadt eines einst großen Reiches. Und der Autor legt es auch bewußt weltstädtisch und provinziell an - obwohl der erste Roman des Zyklus den Titel „Wien Metropolis" trägt. Das Typeninventar ist in der Art der Karikaturen eines Georges Grosz zur Kenntlichkeit verzerrt. Durchgängig positiv besetzte Figuren gibt es so gut wie gar nicht - und wenn, dann nur in Gestalt eines Mädchens vom Land, das es in die Großstadt verschlagen hat.

„Der Abend war (...) ausnehmend schön (...). Zwar waren die Lindenbäume schon abgeblüht, aber der Geruch ihrer Blüten, die tausendfältig über den Asphalt ausgestreut lagen, durchdrang die laue Luft, die angenehm - als eine geschmeidige, unendlich bewegte Flüssigkeit - den großen Raum erfüllte. Oben, in einem Himmel, der beinahe schwarz war, aber dieses Schwarz war frisch, festlich und feierlich wie ein Hochzeitsrock, sprangen die Sterne auf und verstreuten in feinen Linien ihr Licht."[54]

Es handelt sich bei diesen Passagen um Epiphanien in der Nachfolge von Heimito von Doderers berühmtem Wien-Roman „Die Strudlhofstiege"[55], mit dem „Wien Metropolis" vieles gemein hat. Wie bei Doderer läßt sich auch bei Rosei feststellen, dass Momente von Epiphanie nur in der sich jenseits der menschlichen Komödie, jenseits der kompromittierten Wiener Gesellschaft entfaltenden Sphäre der Natur möglich sind. Doderers löst dieses Problem mit einem Kunstgriff, „indem er Gesellschaft und Natur miteinander identifiziert und aus der Gesellschaft, aus der Wiener bürgerlichen Gesellschaft seiner historischen Gegenwart und seiner jüngsten Vergangenheit die Natur des Menschen macht, die spontane Totalität seines Seins, seine unveränderliche und harmonische ontologische Ordnung".[56]

---

[52] Vgl. Anm. 1.
[53] Wien Metropolis, S. 52.
[54] Ebd., S. 116
[55] Heimito von Doderer: Die Strudlhofstiege oder Melzer und die Tiefe der Jahre, Biederstein, München 1951.
[56] Claudio Magris: Doderers erste Wirklichkeit. In: Heimito von Doderer 1896-1966, Neugebauer, Salzburg 1978, S. 41-60, hier: S. 46.

Wo Doderer dazu tendiert, aus der Welt „eine Art große Wiener Maturaklasse“[57] zu machen, die Wiener Gemütlichkeit als exemplarischen Wert vorzuführen, zeigt Rosei letztere als untrennbar verwoben mit der Nachtseite Wiens, als Teil des Humus, auf dem unter anderem der Holocaust wachsen konnte. Als totale Romane haben sowohl Doderers „Strudlhofstiege“ und seine „Dämonen“[58] als auch Roseis „Wien Metropolis“ mit dem Umstand ihrer „verzwickten Bau-Intentionalität“[59] zu kämpfen, welche sich der Unmittelbarkeit des grenzenlosen Fließens, welches sie ausdrücken wollen, entgegenstellt, sie verhindert.
Bei Rosei wehen die Epiphanien herüber aus einem versunkenen Gestern, sind nur eine von vielen Stimmen im Chor der Gegenwart: Denn im Hintergrund der oben zitierten Naturbeschreibung läuft ein Gespräch über die amerikanische Wirtschaft, das die in Wien gelandeten Studenten Alfred und Georg anläßlich eines abendlichen Ausgangs führen und - der Autor deutet hier etwas an, lässt es aber offen - auch ein Gespräch zwischen Vater und Tochter über die Geschichte der Familie Wohlbrück. Diese Familie, deren Vertreter seit Generationen Stützen des Staates sind, repräsentiert das Versagen des österreichischen (Groß)Bürgertums, das sich mit den Mächtigen immer arrangiert hat.
Was am Beispiel von „Wien Metropolis” hier pars pro toto deutlich werden sollte: Die fünf Romane der „Wiener Dateien” auf deren Seiten ein Staat voller Schieber, kleiner Gauner, kaputter Großbürger und raffgieriger, neureicher Eliten Kenntlichkeit annimmt, sind eine schneidende Abrechnung des Autors mit dem Österreich der Gegenwart, und zwar mit den Mitteln von Ironie, Scherz, Satire sowie einer gehörigen Portion Zynismus. Sie sind alles andere als eine Glorifizierung Österreichs im milden Licht des Habsburger Mythos. Das vorläufige Endziel der Reisen Roseis im Raum ist also ihr Ausgangspunkt, von wo aus der Autor unterwegs ist in die Zeit, genauer gesagt in die k.u.k. Vergangenheit, die mit der heutigen Republik nicht nur über die Beziehung vergangene Größe und gegenwärtig akute Unzulänglichkeit verbunden ist, sondern auch in der Kontinuität fataler historischer Irrtümer und gesellschaftlicher wie politischer Fehlentwicklungen über die Zeiten hinweg.

---

[57] Ebd., S. 49.
[58] Heimito von Doderer: Die Dämonen. Nach der Chronik des Sektionsrates Geyrenhoff, Biederstein, München 1956.
[59] Magris (Anm. 49), S. 50.

現代オーストリア文学における周縁からの世界の見方、グローバルとローカルの間で

―メナッセ、ラビノヴィチ、ヴィンクラー、ミシュクルニク、ランスマイアーに関して―

徳永恭子

はじめに

90 年代以後のオーストリア文学を特徴付けるものとして、コスモポリタニズムが挙げられる。89 年の壁崩壊、95 年 EU 加盟を経て、オーストリア文学は外へ向かっての拡張を経験していくこととなる。野沢温泉で毎年開催される現代オーストリア文学ゼミナールに初めて現役の作家が招聘されたのも 95 年のことである。近年ではオーストリアから外へ出て、異国での経験を作品に反映させる作家だけではなく、周辺国からの移民作家の活躍も目立つ。国際色豊かになったオーストリア文学であるが、その一方で、地方を舞台とし、第二次大戦以来の歴史を家族の年代記として描く作品群も多く存在する。現代のオーストリア文学は、グローバルとローカルの間を行ったり来たりしているようだ。

「グローバリゼーションとローカルな土着性の狭間に動くオーストリア現代文学」というテーマについて考えるにあたり、有効な手がかりを与えてくれるシンポジウムが 2002 年チェコで開催された。このシンポジウムの成果は『コスモポリタンとしての詩人–現代オーストリア文学におけるコスモポリタニズムに関して』というタイトルで、2003 年に書籍の形で出版されている。[1] シュミット＝デングラーは、この本の序文で、ゲルハルト・ロートやペーター・ハントケが 70 年代に「アメリカ」をオーストリア文学に紹介したことを改めて確認しつつも、90 年代ほどコスモポリタン性が目立った時代はなかったとし、以下のような発言をしている。この時代の作家たちは「コスモポリタンとして、とりわけ旅行者として、そう、世界を旅する者として自らを示しました。しかしながらほぼ例外なく彼らは再び故郷に戻って来ます。」[2]つまりデングラーは、オーストリアから外へ出て行こうとする遠心的運動よりも、オーストリアという国の求心性を強調する。以下の言葉からもそのことが伺える。「オーストリアの

[1] Der Dichter als Kosmopolit. Zum Kosmopolitismus in der neuesten österreichischen Literatur. Beiträge der tschechisch-österreichischen Konferenz České Budějovice, März 2002. Hrsg. v. Patricia Broser und Dana Pfeiferová. Wien (Praesens) 2003.
[2] Wendelin Schmidt-Dengler, ebd., S. 7.

作家たちはコスモポリタン的になりました。少なくとも彼らは、遠いところから戻ってきてやっと、オーストリアという舞台を再び拡大鏡のもとで検証したいと願うのです。」[3]まるでオーストリアの作家たちはオーストリア的問題を再発見するためにこそ世界へと飛び出すかのようである。そのような「拡大鏡」を必要とする視座のもとでは、グローバルはローカルと化す。本論文では、グローバル性とローカル性の間で揺れ動く現代オーストリア文学の特徴を示すことを目的とする。扱う作品としては、毎年秋に野沢温泉で開催されるオーストリア現代文学ゼミナールへ招聘された作家たちの代表的な作品とする。

1. ロベルト・メナッセに関して
　－グローバルな歴史的事件を前にしたローカル－

2001 年にオーストリア現代文学ゼミナールに招聘されたロベルト・メナッセの 95 年に出版された小説『逆推進』*Schubumkehr*[4]を見ていくことにする。この小説は 89 年の壁崩壊という歴史的事件を目前に控えたオーストリアの片田舎の町の様子を描いており、グローバルな事件へのローカルな対応を見ていく上で興味深い。メナッセは 1981 年からブラジルのサンパウロに講師として 7 年間滞在していた経験があるが、この小説の主人公もブラジルからオーストリアへ久しぶりに帰ってきたという設定となっている。この小説の主人公は理論的解説書『脱精神化現象学』(*Phänomenologie der Entgeisterung* 1995)の文学的展開である三部作『感性的確信』(*Sinnliche Gewissheit* 1988)、『至福の時代、ばらばらな世界』(*Selige Zeiten, brüchige Welt* 1991)、そして三部作の最後の作品である本作に共通して登場する人物ローマンである。ブラジルでの生活を終えて、ローマンが久しぶりにウィーンへと戻ってきたところから話は始まる。ウィーンでの生活が始まると思いきや、ローマンの母親は田舎での「自然のサイクルと自然に調和した健康的な生活」(37)に憧れ、ウィーンの住居をすでに売り払ってしまっていた。仕方なしに彼は母親とともに、国境を接するニーダーエスターライヒの小村コンプレヒツへ引っ越すこととなる。主人公は皮肉にも、ブラジルという異国ではなく、故郷オーストリアで初めてホームシックを覚えることとなる。「あらゆる年月の後、彼は初めてホームシックを感じた、治る見込みのないホームシック。故郷剥奪。まるで今初めて、7 年の留守のあとに異郷にやってきたかのようだった。」(43)オーストリアを去ろうとするも、パスポートを山羊に食べられて身動きができなくなったローマンは、国境開放までの 1 年間をこのチ

[3] Wendelin Schmidt-Dengler: Österreich - das Herz der Finsternis. Geschichten von Heimkehrenden. In: ebd., S. 13.
[4] Robert Menasse: Schubumkehr. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1997 (1995). この小説からの引用は直接本文中にページ数を記入する。

ェコ国境地帯の寒村で生活することとなる。こうして「どちらにせよ最も田舎臭い国の最もひなびたド田舎」(42)の一年間の様子が描かれていく。「コンプレヒツについて語る者は、オーストリアについて語っている。あるいは、コンプレヒツはオーストリアなのである」[5]というデングラーの言葉の通り、寒村コンプレヒツはオーストリアの似姿である。壁崩壊という歴史的一大事件を時間的にも、また地理的条件から空間的にも眼前にしているにも関わらず、人々は世界情勢などとは関係のない世界に生きている。彼らの関心はもっぱらローカルなもの、個々人の利益追及にしか向けられていない。村の産業であるガラス工場や採石場は経営悪化のため、人員削減に精を出し、村長は政府から補助金をもらうために四苦八苦している。地方再生のためにコンプレヒツの村が考えた案は、村を採石ミュージアム付きのリゾート地「スパぬかるみ温泉」(Kurort Moorbad)と改名して売り出すことである。このような命名の仕方は、オーストリアでいち早く、ナチズムと強制労働の歴史、地方における過去の抑圧を描いたハンス・レーベルト(Hans Lebert)の小説『狼の皮』(*Die Wolfshaut* 1960)を彷彿とさせる。レーベルトは、強制労働の歴史を隠蔽する村を「沈黙」(Schweigen)と命名した。メナッセの小村コンプレヒツは、負の過去を抑圧するのではなく、逆に喧伝することによって、過去の反省を促す政府の啓蒙的プログラムに迎合し、補助金を得ようとする。戦前のユダヤ人所有者が消え、戦中はチェコからの強制労働者たちが働き、その多くが死んでいったとされるコンプレヒツ村の採石場は、マウトハウゼンの外部キャンプであるエーベン湖畔の採石場を思い起こさせる。この小説が出版されたのと同年の 95 年、クリストフ・ランスマイアーも小説『モルブス・キタハラ』で、「ぬかるみ温泉」と同名のモーア(Moor)という架空の湖畔の村を舞台とした。その村モーアの採石場では、村民全員がかつての強制労働者の格好をして、石を運ぶ演技するという贖罪の儀式が進駐軍の命令によってとり行われるのである。メナッセとランスマイアーが同名の村で同じような採石場を登場させるのは偶然の一致なのだろうか。どちらにせよ湿地帯や沼地を意味するモーアという地名は、過去の歴史の「ぬかるみ」を表すには好都合であろう。またランスマイアーと同じオーバーエスターライヒ出身の若手作家、82 年生まれのライハンルト・カイザー＝ミューレッカー(Reinhard Kaiser-Mühlecker)の小説『留まりながらの長い行程』(*Der lange Gang über die Stationen* 2008) においても、山中の採石場が登場する。寒村の傾きかけた農場主である主人公は採石場の小屋で猟師が猟銃で自殺する場面に出くわす。採石場での猟師の自殺は冬の森へと消えていく主人公の人生の終焉を仄めかすものである。採石場はここでも死を暗示する不気味な場所として表されていることを付言しておく。

[5] Schmidt-Dengler, Österreich - das Herz der Finsternis, S. 18.

過去の反省をツーリズムの売りとするエピソードだけでなく、メナッセらしい痛烈な皮肉は小説のあらゆるところに散在している。化学肥料を使わないビオ農業に精を出す母親に対してローマンは「チェルノブイリで汚染された大地を化学肥料から守りぬいて、自然のサイクルについてうんぬん抜かすなんて何の意味があるんだ」(45)と毒を吐く。堆肥で耕された故郷の大地は、コンドームと生理用品の不燃物ゴミで溢れ、母親はついには田舎暮らしを放棄して、村から逃げ出すことになる。メナッセ特有の皮肉に満ちた批判精神は、とりわけ小説のラストシーンに現れている。主人公ローマンがコンプレヒツで撮り続けたビデオテープのうち、国境開放という決定的な瞬間 89 年 10 月の日付が記されたビデオテープには何も写っておらず、ただ Ende という文字しか残されていない。空のビデオテープは一体何を意味するのだろうか。東西冷戦終結は、歴史の終わりを意味すると考えるべきなのだろうか。奇妙な小説のタイトル「逆推進」Schubumkehr を考慮するならば、歴史の流れはここで反対方向に進むと考えられているのかもしれない。「逆推進」とは推進方向とは反対方向にエンジンを最大出力し、推進力の向きを逆さにすることによって、スピードを減速させることである。歴史はここで壁崩壊という爆音を響かせて方向転換し、時の流れを減速させながら、逆さ向きに進んでいくことを示唆しているのかもしれない。逆さ向きに進む歴史というイメージは、ヘーゲルの精神現象学を逆さまに読んでいこうとする三部作の理論的解説書『脱精神化現象学』と、そしてまた主人公ローマンが書こうとする「退歩の小説、後ろ向きの発展小説」[6]とも合致する。三部作について論じた保坂一夫の言葉を借りれば、主人公ローマンは、「学生らしいマルクス主義的な全知（という 68 年世代の理想）から後ろ向きに感性的確信の意識状態へ発展してゆく青年の物語、言うなれば「衰退小説」」[7]を書こうと決心する。いずれにせよ、ローマンが撮影したビデオの意味を考えるには、この小説三部作全体を詳しく見ていく必要があるだろう。

2. ドロン・ラビノヴィチに関して
－市場に現れるコスモポリタニズム－

2012 年に現代オーストリア文学ゼミナールに招聘されたドロン・ラビノヴィチはユダヤ系の作家であり、歴史家でもある。ラビノヴィチは、ルーマニアからパレスチナに逃れた父と強制収容所を生き延びたリトアニア出身の母との間に 1961 年イスラエルのテルアヴィヴで生まれた。幼少期にウィーンへ移住したものの、イスラエルの国籍を保持している。小説『どこか他の場所で』(*Andernorts*

[6] 保坂一夫: ローベルト・メナッセの三部作―その構成と方法―［日本大学文理学部人文科学研究所 『研究紀要』第 64 号，2002．85-101 頁］92 頁。
[7] 同上

2010) はイスラエルを舞台とし、イスラエル人としてのアイデンティティーが問題化されているが、ラビノヴィチは一貫してアイデンティティーの在処を問題とする。また歴史家としてナチズム時代の歴史を考察対象とするだけでなく、文学の世界でも過去の歴史と記憶の問題を追求する。2005 年に出版された小説『どちらにせよ』(*Ohnehin* 2005)も例外ではない。[8] この小説の中では、認知症を患った高齢の老人が突然 SS としての自分の過去を自慢し始める。毛沢東思想に染まっていたこともある子供達は父親を糾弾し、尋問をし始める。このような子供達の態度を医師としてなだめるのが、精神科医の主人公シュテファンである。シュテファンはユダヤ系の出自を持ちながらも、そのアイデンティティーは一貫して不確かである。自分の出自を再確認させるユダヤ教にまつわる言葉は、シュテファンにとって最も近しいものでありながらも、恐れと恥の感覚を喚起させる性的秘密に似たタブーとして表現される。

> サバトとかユダヤ寺院といった言葉には懐かしさと不気味さが同時にまとわりついており、それらは性的秘密を温存しているかのようだった。彼には神の家や共同体へ侵入することは不遜な行為であるかのように思われた。子供の時、閉じられた両親の部屋のドアの前でノックする勇気が出なかった時のように、タブーを犯しているのではないかと思われるのだった。[9]

ユダヤ寺院を訪れることにためらいを覚えるシュテファンは、「一人でユダヤの建物に足を踏み入れて、変な感じに目立ってしまうのが怖いんだ。馴れ馴れしく見えるに違いないよ。それにあのセキュリティ措置だよ」(90)と言う。緊迫する中東情勢を背景にしたシナゴーグの過剰な防衛意識が示唆されるとともに、他の信心深いユダヤ教徒から浮いてしまうのではないかと感じる主人公の疎外感が描かれる。シュテファンは自分と同じくユダヤ系の出自を持つ友人にシナゴーグへともについて来てくれるよう頼むが、3 歳でモスクワを、６歳でテルアビブを離れたこの友人にしろ、「ウィーンの境界を超えてオーストリアの田舎へと足を踏み入れた途端、なんか自分を失ったように感じるんだ」(94)と口にしたりする。ユダヤ系の彼らにとって、多様な出自を持つ人々が生活する国際都市

---

[8] この小説におけるナチズムの加害者と被害者の問題に関しては以下の論文に詳しい。Hiroshi Yamamoto: Bodenloser Satiriker. Zum Problem der Versöhnbarkeit von Kindern der NS-Opfer und –Täter in Doron Rabinovics *Roman Ohnehin.* 〔日本独文学会中国四国支部『ドイツ文学論集』第 47 号, 2014. 19-31 頁〕小説『M を探して』に関しては以下の論文を参照のこと。Motoko Yajin: Erzählter und verschwiegener Holocaust. Über den Roman *Suche nach M.* von Doron Rabinovici.〔日本オーストリア文学会　『オーストリア文学』第 29 号, 2013. 1-10 頁〕

[9] Doron Rabinovici: Ohnehin. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 2005, S. 91. この小説からの引用は直接本文中にページ数を記入する。

ウィーンと地方との差は、単一のアイデンティティーを持つ人々が感じるよりもずっと大きなものであるに違いない。しかしウィーンで生まれ育ったシュテファンはウィーンにもまた馴染んでいない。

> シュテファンは確かにこの街で育ってはいるけれども、この街の中へと成長していくことができなかった。ただ友人がここにいてくれることが、ある意味彼を落ち着かせるのだ。シュテファンはここで生まれた地元の人間だった。パトリックのように単なる国籍保持者ではなくて、この国に属していることを誰も疑うことができない人間だった。それにも関わらず彼は異国人にとどまっているように見えた。(157)

コンゴ人の友人パトリックは幼少期にこの国へと移住してきたにも関わらず、その外見から「ケルントナー通りに出現したサファリ」の「小さな綺麗な動物、可愛らしい猿の一種」(158)であるかのように扱われる。コンゴ人のパトリックだけでなく、ウィーンでシュテファンが付き合うのは、複数の文化を行き来した経験がある人々のみであり、彼らの人生の背景には亡命や内戦などの痛みの体験がある。そのような異邦人たちが好んで集う場所がナッシュマルクトである。様々な国からやって来た売り子たちが異国情緒たっぷりの食材を提供するナッシュマルクトはまさに大都市のコスモポリタン性を象徴する場所である。

> この場所は一つの固有の世界、メトロポールの只中に浮かぶ一つの島であった。市場は右と左のヴィーンツァイレの間、百年以上地下を流れ続けるウィーンの河に楔のように打ち込まれていた。激しく行き交う雑踏の波に晒されながら、運河の上に広がって、カールス広場と分離派館からケッテン橋まで伸びていた。秩序を守るため、水の流れは上辺からは追放されてしまったけれど、幾多の治水工事も物ともせず、周りの地区よりも賑やかな生命が運河の上に湧き上がるのだった。(18)

秩序付けられ、区画整備されたリンク内部の世界の外側に位置するナッシュマルクトはまさに周縁の地である。治水工事によって水の流れは調整することができるが、人々や物資の流れはナッシュマルクトにとめどなく流れ込んで来る。地下水脈から湧き上がる無秩序なエネルギーに溢れ、不安定な水の上に作られた「どこでもない場所」ナッシュマルクトは、行き場を失いウィーンに流れ着いて来た人々にとっては、故郷とは呼べないまでも、つかの間の居所を提供してくれる避難所である。それぞれの物語を背負いながら様々な出自の人々が行き交うナッシュマルクトであるが、「異邦人に対してめっぽう弱い」(83)主人公はここで旧ユーゴスラビア出身のビデオアーティストの女性フローラと出

会い、恋に落ちる。ラヴィノヴィチが描くのはしかし異邦人二人の恋愛模様ではなく、ミスコミュニケーションである。フローラはどうやら狭いアパートに、同郷からやって来た男性と住んでいるようで、その生活も窮乏しているようだが、シュテファンは彼女をロマンチックなデートに連れ出すばかりで、彼女の生活に踏み入る勇気はない。彼女の滞在許可がそろそろ切れると案じたシュテファンは彼女と一緒に暮らすべくアパート探しをするが、様々な言い訳をしては契約を結ぼうとはしない。ようやく良い部屋を見つけた時には時すでに遅しで、彼女は自分がウィーンに残っていたのはただ彼と一緒に居たかったためであり、自分を芸術家として招聘してくれたパリへと行くべきかどうか悩んでいたと告白し、パリへと去っていく。全ては彼女はボスニア難民であり、滞在許可を持たない違法滞在者であるとシュテファンが勝手に思い込み、彼女に難民というレッテルを張っていたことが原因である。またフローラのビデオ作品を評価していたアカデミーの教授も彼女が違法滞在者でないと知るや、彼女をゼミから追い出してしまう。価値があったのはボスニア難民の芸術家の作品なのであり、彼女が難民に冷たいオーストリアの現実をいかにカメラに収めようとも当事者性にかけるその作品には価値がないという訳である。ラビノヴィチは移民や難民のステレオタイプ問題をシビアに描き出す。ウィーンのユダヤ系住民たちもまた一枚岩ではない。ワルシャワゲットーでの蜂起に関するシンポジウムで、ほとんどの人が理解できない見事なイディッシュ語で、二重否定の形で蜂起への批判を告げる保守派のラビと静かにその言葉に頷く正統派ユダヤ教の人々。その言葉を反対の意味にとり、彼らは英雄であったとドイツ語に翻訳したユダヤ学を専攻する女学生、間違いに気付いて吹き出す不信心な人々。「子供の頃から次から次へと国を追われ、様々な物を奪われ、それが故にこそ自分の語学力を誇る」(99)通訳の女性は間違った翻訳をする女学生や文化的功労者を親にもつ男子学生を叱責する。ラビノヴィチは多様な出自の人間たちの間の交流と誤解、衝突を、加害者と被害者という二項対立を超えて、繊細にそしてシビアに描き出す。小説の表紙には夜間のナッシュマルクトの写真が添えられているが、それらの屋台のシャッターが下ろされているのは象徴的である。

3. ヨーゼフ・ヴィンクラーに関して
－グローバルに現れるローカルの呪縛－

多様な出自の人々がダイナミックに行き交うラビノヴィチのコスモポリタンな市場に対して、ヨーゼフ・ヴィンクラーが描く市場はタイトル『静物』(*Natura Morta* 2001)[10]が示すごとく、静止の世界である。2004 年に来日した際に行われ

[10] Josef Winkler: Natura Morta. Eine römische Novelle. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 2013 (2004).この作品からの引用は直接本文に頁数を記す。

た対談で、ヴィンクラーはドイツ語の「静物」Stillleben という言葉から、「文体」Stil と「静寂」Stille という語を連想し、本作を支配する静寂さを強調している。[11] この作品でヴィンクラーは、ローマの市場に並べられた野菜や肉や魚といった事物を細部に至るまで精確な文体で描き取り、色鮮やな静物画の世界を作り上げる。国際色豊かなラビノヴィチのウィーンの市場に劣らず、ヴィンクラーのローマの市場もコスモポリタンな様相を呈してはいる。しかし描写の重きはコスモポリタン性というよりは官能性や退廃性に置かれている。そこで描かれるのは、国際色豊かな出自を自らのアイデンティティーとする人々などではなく、異文化や言語といった上辺がはぎ取られ、生の身体のみが残されたボスニアの難民たちや売春するモロッコの少年たちである。「ローマの小説」という副題を持ちつつも、この「小説」にはストーリーはない。カメラアイが市場の事物や人物を舐めるように延々と追っていくが、それでも交通事故による少年の死というクライマックスが用意されている。先ほどまで元気に市場を動き回っていた半ズボン姿の魚売りの少年は消防車に撥ねられ、路上に横たわる。少年を抱き抱え、血に濡れた T シャツに顔を埋めて肉屋の青年が嗚咽する姿は、まるでバロック絵画のピエタ像のようである。降りしきる雨の中、肉屋の青年は少年を腕に抱きかかえたまま、口から内臓を出している魚が並べられた魚市場を駆け抜け、皮を剥がれた子羊や神へと捧げる花束であるかのように死後硬直した雉を頭上に掲げる肉屋のいる肉市場へ至る。生物の死体が並べられた市場はまさに「自然の死」Natura morta を描く静物画である。ヴィンクラーはインタビューで、自らの作品をポップアートの巨匠ロイ・リキテンシュタインの静物画に例えている。[12] リキテンシュタインの静物画は、黄色いゴルフボールとともに、ガラスの器が描かれているが、ガラスの鉢の中には赤い魚が入っており、静性の中に動性が示されている。ヴィンクラーはローマの市場をガラスの器に見立て、その中に、動き、駆け、死んで硬直する少年たちを閉じ込める。彼らを目にして驚く市場の売り子達も、芝居掛かったダイナミックな動きの頂点で固定される。ヴィンクラーの描くローマの市場は、リキテンシュタインの静物画ではなく、むしろ光と影がダイナミズムとともに永遠の静止を作り出すバロック絵画を思わせる。「我がバロックの死の祝祭」[13]という言葉は故郷のケルンテンを描いたヴィンクラーの初期作品『人の子』(*Menschenkind* 1979)からの言葉であるが、ローマを描いたこの作品でもカトリック総本山ヴァチカンとローマの市場で「バロックの死の祝祭」が繰り広げられる。血とスペルマと十字架の三位一体というカトリック的モチーフ、そして同性愛のテーマはヴィンクラー

[11] 「作家の仕事場 ヨーゼフ・ヴィンクラーとの会話」 聞き手・構成 カーリン・ループレヒター＝プレン　訳 初見基 ［『DeLi デリ』 第 4 号 2005, 113−125 頁］124 頁
[12] 同上 121 頁
[13] Josef Winkler: Menschenkind. In: Das wilde Kärnten. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1995, S. 104.

作品にはお馴染みのものである。ケルンテン地方を描いた三部作の一作目『人の子』は、ヴィンクラーの故郷の寒村カーメリングでの二人の少年の首吊り自殺の描写から始まる。少年たちの遺体は一本の牛縄(Kalbstrick)で吊り下げられ、木の周りをくるくると旋回している。自殺に使われたこの牛縄は作品の中で、強権的な父親が子供達を折檻する際、また母牛の胎内から子牛を引っ張り出すために使われる。牛縄は折檻と死と生を結びつける重要なモチーフとなっている。2017 年に現代文学ゼミナールに招聘された 82 年生まれの若手作家ラインハルト・カイザー＝ミューレッカーの小説『他人の心、暗い森』(*Fremde Seele, dunkler Wald*　2016)[14]にも牛縄が登場する。この小説は作家の出身地オーバーエスターライヒの村における抑圧的な生活を描いており、反郷土文学の流れに連なる作品である。ヴィンクラーへのオマージュであろうか、この作品の中でも少年の自殺に牛縄が使われている。そして吊り下がった少年の遺体の隣には使われなかった牛縄の輪が空っぽのまま揺れていたことから、村では誰かと心中するつもりだったのではないかと憶測を呼び、主人公の弟が噂に苦しめられる様が描かれる。

ヴィンクラーの故郷カーメリングでの二人の少年の首吊り自殺は、あらゆる場所で反復強迫のように繰り返される。[15] インドのバナラシを描いた『ドムラ』(*Domra* 1996)では、ニューデリー行きの飛行機の中で作家はイヤホン越しに「あのヴィンクラーも同じようにひどい終わりを迎えるだろう」と自殺した少年の父親が罵る声を聞く。[16]「ケルンテンの作家ヨーゼフ・ヴィンクラーは遠くまで旅せねばならなかった。自分自身であり続けるために」[17] という批評家の言葉が示すように、インドまでやってきてもヴィンクラーには故郷での少年の自殺を忘れることができない。そして「死体愛好家的好奇心」[18]に憑かれた作家の関心はガンジス川での火葬に集中し、焼けていく死体が事細かに描写される。

2008 年ビューヒナー賞を受賞する前年に出版された『六本木』[19]も、死の儀式に対する作家の執着が遺憾無く発揮されている。2004 年の来日後に執筆された『六本木』であるが、これは日本を描いた旅行記などではない。作家が父の死の知らせを受け取ったオーストリア大使館の所在地が六本木であるというだけである。副題「ある父のためのレクイエム」とあるように、故郷の父の死とそ

---

[14] Reinhard Kaiser-Mühlecker: Fremde Seele, dunkler Wald. Frankfurt a. M. (Fischer) 2016.
[15] ヴィンクラーのオートフィクションにおける死のモチーフに関しては以下の論文を参照のこと。山本浩司 : 映画と死--アイヒンガーとヴィンクラーにみるオートフィクション-- ［早稲田文学研究科 『早稲田文学研究科紀要』 第 59 巻 2014, 57−69 頁］
[16] Josef Winkler: Domra. Am Ufer des Ganges. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 2000 (1996), S. 13.
[17] Thomas Steinfeld: Der Maler des Kuhfladens. In: Frankfurter Allgemeine. 05. 11. 1996.
[18] Josef Winkler: Roppongi. Requiem für einen Vater. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 2007, S. 143.
[19] 『六本木』には部分訳であるが、日本語翻訳がある。ヨーゼフ・ヴィンクラー :『六本木--ある父のためのレクイエム--』より　訳　山本浩司［『DeLi デリ』第 10 号 2010, 52-74 頁］

の葬儀に関する記述がほとんどを占める。父の葬儀に出ずに、「六本木に残ったことを私は喜んだ」という言葉が幾度も復唱され、各章の前に深沢七郎の『楢山節考』がドイツ語訳で引用される。[20] 日本の山での鳥葬、インドのガンジス川での火葬、オーストリアのカトリックの土葬が同時に描かれ、遠く隔たった土地が死の儀式によって結びつく。『楢山節考』を引用するのは、年老いた母を背負い山へと捨てに行く息子の姿に、田舎の父を裏切る自分を重ねたからであろうか。また山行きを躊躇する息子に対して口減らしの掟を遵守するよう戒める厳しい老母の姿に、村での体面を汚した息子に対し、葬儀の出席を禁じる父を重ね見ているのだろうか。「いつかわしがいなくなることになっても、お前がわしの葬式に出ることは許さんぞ！」(66)との父の願い通りケルンテンでの父の葬儀は息子不在のまま執り行われる。日本にいながらにしてヴィンクラーは故郷の葬儀の様子をまるで目で見ているかのように再現する。遠く隔たった土地が一文の中に同時に出現する。例えば以下の句点を多用した長文では、接続詞während でつながれて、場面がカーメリングから築地、新宿へと移っていく。

> そして葬儀から数日経って、ケルンテンで雪が降り花束と花輪が吹雪によって雪に覆われ、薔薇となでしこの葉っぱがくっついて、花のがくが雪片の重みで下方に押しつぶされ、新雪の積もった氷河の上未亡人とその娘の足跡が墓丘に見てとられ、彼らは毎日いっしょに十字架の形をした村の十字の梁を垂直に墓場まで降りて行き、ろうそくを灯し、死んだばかりの者のために祈りを唱えていた時、その間私たちはケルンテンから何千キロも離れ、別の大陸にいて、朝の５時に六本木を離れ、地下鉄で別の街区へと赴き、巨大な魚市場の中で電動のこぎりによって解体され切り身にされた大きなマグロを百匹も目にして、晩、すっかり暗くなってから、西新宿のパーク・ハイアット・トーキョーのバーに座り、そこはソフィア•コッポラが映画『ロスト•イン•トランスレーション』のいくつかのシーンをスカーレット•ヨハンソンとビル•マーレイと撮影した場所だったが、この映画を僕たちは日本へ旅立つ数ヶ月前にクラーゲンフルトのヴルフェニア・シネマで二歳のシリと九歳のカシミールといっしょに観たのだった。(100)

映画『ロスト•イン•トランスレーション』を介して、東京とケルンテンの州都クラーゲンフルトが結びつけられ、作家の意識はさらに過去へと向かっていく。東京でも故郷カーメリングでの二人の少年の死を作家は忘れることが出来ないでいる。

---

[20] 深沢七郎の『楢山節考』と比較した論文としては以下を参照のこと。Kikuko Kashiwagi: Memento mori in Dorfgeschichten von Josef Winkler und Shichiro Fukazawa. ［日本独文学会東海支部『ドイツ文学研究』 第 37 号 2005, 163−176 頁］

イシカワ嬢がかわいらしく微笑みながら、ペコリとお辞儀して僕に持ってきてくれたイタリアのペレグリノ•ミネラルウォーターをちびちび飲みながら、『ロスト•イン•トランスレーション』がずっと流れている、バーの上から吊り下げられているテレビ画面と、数え切れないほどの大きな赤い光と蛍のような青い光を発する東京の夜の通りを交互に眺めながら、僕は思い起こした、当時、僕の初めての本が出版された後のこと恥ずべき長い不在の後に再び両親の家に僕が現れた時、父は歯のない口をして—入れ歯は修理中だったのだ—唇は薄く、口は窪み、糞がついた鋤を手にしたまま、堆肥の山の上に立ち、それを崩し、瞼を閉じて嘴は軽く開いたままの切断された鶏の頭と黄色の鉤爪の足を堆肥の中に埋めながら父は言ったのだ、息子に関する映像をテレビで見て驚かされ、報道の中で父に対する僕の憎悪と絶望を初めて知って言ったのだ、「それでお前が助かるっていうんなら、わしについては書きたいように書けばいい、だがあの首を吊った村の二人には構うんじゃない！死者を安らかに眠らせろ！あの二人の自殺者についてはもう何も書くんじゃない！」あの首を吊った二人には構うな、かと緑色の透き通ったペレグリノ・ウォーターの瓶を目の高さまで持ち上げ、グラス越しに画面を見ながら僕は呟いた。「いつ発つの？」スカーレットはビルに言った。「明日！」彼が答えた。「寂しくなるわね！すぐ行かなきゃならないの？」「そうだ、ボディガードがもう待ってるんだ…また…良い旅をと言ってくれないかい？」「ええ、そう思ってたとこよ…オーケー…じゃ、元気でね！」「君もね！」「元気で！」

旅先の異国の地で言葉の狭間で迷い、アイデンティティーを揺さぶられ、同時に束の間の解放感を経験するスカーレットとビルの映画の中の会話を巧みに使いながら、ヴィンクラーは、異国の地で浮遊する自身の意識を描いてみせる。たとえ故郷から遠く離れた異国の地にいても、作家の意識は「死」を契機として常に故郷へと旅立っていく。

4. リュディア・ミシュクルニクに関して
－国境地帯の二つに裂けた舌－

2010 年にゼミナールに参加したリュディア・ミシュクルニクもヨーゼフ・ヴィンクラーと同じくケルンテン出身の作家である。「クラーゲンフルトは私の地獄でした」[21]と述べるミシュクルニクは、散文作品『地方での出会い』[22]で、風

[21] Lydia Mischkulnig: Brief an den Circus. In: Macht euch keine Sorgen. Neun Versuchungen. Innsbruck, Wien (Haymon) 2009, S. 108.
[22] Lydia Mischkulnig: Begegnung im Gebiet. Ebda. この作品に関しては、インゲボルク・

光明媚でありながらもキッチュな「絵葉書のような静けさ」(95)に包まれた故郷の牧歌的風景の底に潜む災いを炙り出す。「私は感情が四季とともに変化するような所ではなく、感情のイメージがコンクリートの中に保存されるような大都市を愛しています」という彼女にとって、故郷の大地は不気味なものでしかない。「この木が根を下ろした大地に手を突っ込んでみると、その感覚は私に、墓地の土壌を、肉と血の凝集したものを触っているのだと発見させてくれるのだ。私が土になる時、何がここを統べていることだろう。この風景の上を。言葉だろうかあるいは野蛮？」(95)死者たちの肉や血によって出来た故郷の大地の上を統べる「言葉」と「野蛮」とは何を意味しているのだろうか。それを考えるにはこの作品『地方での出会い』で描かれる「地方」がどこを指しているのかを考えなくてはならない。ここで描かれている「地方」とは、オーストリアの周縁の地、スロヴェニアとイタリアと国境を接したケルンテンの三角地帯である。この散文作品の語り手女性はどうやら久しぶりに国境地帯に位置する故郷へと帰ってきたようだ。語り手は里帰りを契機に子供時代の思い出を語り始める。思い出の中心にいる人物は「舌が二つに裂けた蛇」(95)に喩えられる叔母と頭にスカーフを巻いた亀のような目をした祖母である。叔母と祖母の間の喧嘩の火種となった火事の思い出が語られる。近隣の家から出火した火花が自分たちの農家に飛び火したのだ。火種の元となったは「国民と国家の敵として誹謗されて追放されたスロヴェニア系ケルンテン人の農家に、ナチスの移住計画によって強制移住させられたカナル谷のドイツ人」(97)の家であった。第一次大戦敗北後、北をオーストリアに、東をスロヴェニアに接し、ドイツ系とスロヴェニア系住民が住むカナル谷はイタリアに属することとなり、またケルンテンとスロヴェニアの国境は 1920 年の国民投票によって新たに引き直された。この時にスロヴェニアへの帰属に賛成した者は追放された。1938 年のオーストリアのナチスドイツ併合後は公共の場でスロヴェニア語を話すことは禁じられた。このような政治的に複雑な地域で起こった火事の原因を叔母は言語的問題に帰す。叔母は野蛮な紛争の火種を点け、憎悪の炎を掻き立てる。「ドイツ語で祈るにはあまりにもおばぁちゃんは愚かだったから、火花は燃え移ったんだ」(97)、火花は「ドイツ語の代わりにスロヴェニア語で祈りを唱えるおばぁちゃんを罰するための神の罰」(97)だと叔母は祖母を断罪する。「スロヴェニア語は悪の根源なんだ、そんなものはこの家と農場では抹殺してしまえ」と罵る。しかしそんな叔母は語り手から言わせると、まともなドイツ語を話すことができない。「そんな

バッハマンの『あるオーストリアの町での青春』と比較した拙論に詳しい。徳永恭子：60 年代とゼロ年代のオーストリア反郷土文学　［上智大学ヨーロッパ研究所　『ヨーロッパ研究』 第 4 号 2011, 23−39 頁］またこの散文作品の日本語訳は以下を参照のこと。徳永恭子 : 地方での出会い　［近畿大学教養・外国語教育センター『近畿大学教養・外国語教育センター紀要　外国語編』 第 2.1 号 2011, 441−445 頁］

ことを言うがこの罵り女の口には一言のドイツ語ものぼってこない。口にのぼるのはただの方言。」(97)「舌が二つに裂けた蛇」と喩えられている叔母は二枚目の舌の存在を隠蔽し、スロヴェニア語を話すことを禁じる。

> 叔母の舌は、まるで口蓋の中で驚いたトカゲのようだった。なぜならそれは叔母の憎悪からの脱出口を見つけることができなかったから。この土地の看守は神という。神は土地の者に言語という道具を創造した。だがまた彼らの舌も一緒に牢獄の中に閉じ込められてしまったのだ。(98)

本来ならば言語世界を広げてくれるはずの国境地帯のバイリンガル性は、ここでは災いをもたらすトカゲやヘビの二枚舌に喩えられ、そして二重言語話者はその二枚舌故に偏狭な世界に閉じ込められている。

ミシュクルニクは小説『不安の姉妹たち』(*Schwestern der Angst* 2010)[23]で、倒錯した母娘関係、姉妹関係をテーマにしているが、同時に移民問題、そしてバイリンガルの言語問題も描いている。小説の舞台はまたも周縁に設定されているが、ちょうど『地方での出会い』で描かれたケルンテンの三角地帯を反対側から、スロヴェニア側からみた形となっている。語り手の女性レナーテは子供時代を、かつてはオーストリア領であったが、今では「好まれないヨーロッパの東側」(20)に属す地域で過ごす。シングルマザーの母親はレナーテをアルコール中毒で無職の祖父に預け、単身オーストリアに掃除婦として出稼ぎに行く。ドイツ語を覚えた母親は子供を連れて永久に故郷を去る。『地方での出会い』ではスロヴェニア語で祈ることが禁じられていたが、幼いレナーテは移住先でドイツ語で祈ることをすすんで身につけていく。

> 私は両手を重ねブツブツ祈った。ドイツ語で、新しい人たちと新しい世界で新しく生まれ変わるために。死がやって来ないように。祈りの文句は楽に口について出た。私は文字に沿って祈ってるのだから。文字は信仰の言語。
> 皆は私をドイツ化しようと決めたのだ。そのことでより良い生活ができるように。母は私と標準ドイツ語で話そうと努めた。彼女にとってはそれも外国語だったのだが。彼女のアクセントは外国人のもので、書き言葉は黙り込み、始めから私は自分の声だけを頼りにしていた。私のドイツ語の音は私をイキイキさせた。(49)

子供のレナーテは、大人たちとは異なりどんどんドイツ語を覚えていく。「いわゆる大人たちの日曜ドイツ語はたどたどしかった。私は書かれた通り話した

[23] Lydia Mischkulnig: Schwestern der Angst. Innsbruck, Wien (Haymon) 2010.

ので、私の声は鐘が響くよう純粋で、ドイツ語の先生はそれをとても気に入ってくれた。」(49)レナーテは書き言葉通り話すことで完璧なドイツ語を話すようになる。しかし皮肉にも彼女が愛した男は、方言しか話さない妹と愛し合うようになる。書き言葉からドイツ語を学んだレナーテとは異なり、妹は生きている人間たちからドイツ語を学んだのである。レナーテの完璧な標準ドイツ語はコミュニケーションのためのものではない。それは子供の頃に失った母、故郷、言語を補完する人工物でしかない。レナーテは完璧な人口言語、「概念でできた誰もいない言葉 Niemandssprache」(52)という牢獄の中に孤独に閉じこもる。小説の最後でレナーテは妹を暴力するが、妹に手をかける直前に故郷を夢見る。「家の破風屋根の上には山の頂きがそびえ、山の上にはトウヒの梢が故郷の上に広がる青い空にそびえている。」(236)「庭の柵、母、野ばら、山の頂、木の梢」(236)という理想化された故郷のイメージが崩壊したとき、レナーテは暴力に走る。『地方での出会い』同様、ここでも「言語」と「野蛮」のせめぎ合いが見られる。ミッシュクルニクにおいては二重言語性、あるいは多言語性はなにもグローバル性など意味しない。多言語が話される空間は、ここでは他文化へと向かって外に開かれているわけではない。むしろ母語以外の言語を話すが故にこそ、理想化された故郷という監獄に閉じ込められている。監獄からの脱出口はあるのだろうか。『地方での出会い』でスロヴェニア語しか話さない祖母が唯一口にしたドイツ語は「おばさんはイカレてるんだ」(Die Tante spinnt.) (98)というものである。語り手は「その言葉は真実で、それは私にとって今日でも舌の上のチョコレートのように溶けていくのだ」(98)と感じている。「祖母はそれを私のためにドイツ語で言った。祖母は別のどの言語でも同じことをいうことができただろう。あらゆる言語はそれが真実のことばを生み出すとき、全て理解可能なものとなる。そのことにこそ二つに割れた舌を持つ話者の救済がある。」(98)

ケルンテンの国境地域をスロヴェニア側から描いた作家にマーヤ・ハーダーラップがいる。ハーダーラップは 1961 年ケルンテンの三角地帯のアイゼンカッペル生まれで、スロヴェニア語で創作をしている。ドイツ語で書いた唯一の小説『忘却の天使』(*Engel des Vergessens* 2011)[24]はケルンテンのスロヴェニア系家族の三代に渡る年代史である。森に潜み対ナチパルチザン運動をしていた祖母、現状に馴染めない父、クラーゲンフルトの学校に通い、ドイツ語で劇作を学ぶ娘が物語の中心人物である。ナチ時代からユーゴスラビア解体まで、スロヴェニア系の住民から見た歴史が語られる。この小説は 2015 年、ハーダーラップ自身の演出でウィーンのアカデミー劇場で上演された。[25]上演の際のパンフレットでハーダーラップは以下のように語っている。

---

[24] Maja Haderlap: Engel des Vergessens. Göttingen (Wallstein) 2013 (2011).

[25]演劇では現代における娘と父の関係に焦点が絞られ、ナチ時代のパルチザンの過去は銃撃戦を思わせるような耳を引き裂くような音響で再現されていた。

戦後オーストリアはドイツと線引きするために固有のオーストリア的アイデンティティーを作り上げるよう尽力しました。国家形成のプロセスの中で、ナチ時代のスロヴェニア系ケルンテン人の歴史を組み込むのはただ困難でした。なぜなら彼らの運命はその他の地域のオーストリアの自己理解と調和することはできなかったからです。ケルンテンのスロヴェニア系民族グループの歴史はそれゆえ分けられて、固有の小さな箱の中に収められました。不要というラベルが貼られて。[26]

1986 年のヴァルトハイム事件をきっかけに、オーストリアでは過去との取り組みが始まったと言われている。ハーダーラップはしかしそのような展開はケルンテンでは許されなかったと述べている。「それに対してケルンテンではそのような展開は許されませんでした。なぜなら理想化された自己像よりも多くのものを失うからです。政治とドイツナショナリズムの郷土協会によってオーストリアの最も南に位置する連邦州の周りに建てられた神話的防塁があったからです。」神話の防塁に守られたケルテンでは、過去の亡霊が蠢いているとハーダーラップはいう。そのような場所を彼女は「影の国」、「幽霊の空間」と呼び、自らの創作活動を悪霊払いに喩えている。86 年のヴァルトハイム事件、89 年の壁崩壊、95 年の EU 加盟を経て、オーストリアはグローバル化したと言われているが、ローカルでは空間を拡張する前に、まずは過去へと時間を遡り、作品世界で過去の亡霊や幽霊を呼び出して、無視されてきた過去からの声を聞き取る必要があるだろう。

5. クリストフ•ランスマイアーに関して
ー辺境と化すヨーロッパー

2015 年に来日したクリストフ・ランスマイアーはポストモダンを代表する作品『最後の世界』(*Die letzte Welt* 1988)でいち早く世界文学の仲間入りを果たした。シュミット＝デングラーはランスマイアーに関して「オーストリア的テーマによる強迫観念から自らを解き放ち、再び世界文学的な関連の中へ赴いた」[27]非常に稀な先例であると述べている。ランスマイアーは近年はウィーンに戻ってきているが、アイルランドに住んでいたこともあり、年間の大半を世界各地を旅して周り、登山家ラインホルト•メスナーと共に北極やネパールの高山を探索す

[26] Maja Haderlap: Die Wirklichkeit der Schatten. Begegnungen mit einem österreichischen Tabu. In: Schwebe, mein kühler Wind nach Kärnten hinunter. Akademietheater. 2015.
[27] Wendelin Schmidt-Dengler: Bruchlinien. Vorlesungen zur österreichischen Literatur 1945 bis 1990. St. Pölten, Salzburg (Residenz) 2010 (1995) S. 527.

る。それ故「たとえランスマイアーが自分を田舎の村人と称しようとも、彼からは全く田舎染みたものは感じられない。遠い果ての地、開かれた風景、高山、広々とした空間、空漠が彼の本性にあった棲息地と思われる」[28]と評される。ランスマイアーは実際に世界の辺境を旅して周るだけではない。作品の舞台もまた世界の辺境に置かれている。『氷と闇の恐怖』(*Schrecken des Eises und der Finsternis* 1984)では北極圏が、『最後の世界』では黒海沿岸のトミ、現在のルーマニアのコンスタンツァが、『飛んでいく山』(*Der fliegende Berg* 2006)ではアイルランドの島とチベットの山が、最新作『コックスあるいは時の流れ』(*Cox oder der Lauf der Zeit* 2016)では満州が物語の舞台となる。オーストリアを舞台とするのは唯一『モルブス•キタハラ』(*Morbus Kitahara* 1995)のみである。小説の舞台は、周囲を山と湖で囲まれた架空の村モーアである。この小説は第二次大戦中、アメリカのユダヤ系の財務長官ヘンリー•モーゲンソーが構想したモーゲンソー計画が実際に実施されていたらどうなるかという仮の世界を描いたものである。モーゲンソー計画とは、二度とドイツに戦争をさせないため、工業化を禁じ、ドイツを農業国化する懲罰計画のことである。周囲から隔絶された村モーアは「石器時代へ戻れ！」[29]という進駐軍のモットーのもと、あらゆる文明の利器が禁じられ、時の流れは先へと進まず、過去へと逆戻りする。第 1 章で述べた通り、湖畔の村モーアには採石場がある。この採石場はマウトハウゼンの外部キャンプ、エーベン湖畔の採石場を思い起こさせる。モーアの採石場の岩肌には「ここには 1 万 1973 人の死体が横たわっている／殴り殺されて／この土地に生まれた者たちによって／モーアへようこそ」(33)という文句が刻み込まれている。「決して忘れるな！」(336)というモットーのもと、米占領軍は採石場で「想起の儀式」(44)を執り行う。土地の者たちは囚人服の衣装を着て、石を運ぶ演技をし、かつての囚人たちの苦しみに想いを馳せねばならない。この小説の小説の主人公の一人、採石場の管理人アンブラスは強制収容所の生き残りで、かつてのトラウマに苦しめられている。アンブラスたちは小説の最後でヨーロッパを捨ててブラジルへ移民することとなるが、彼らが辿り着いたのは、ポルトガル語でモーアと同じく「ぬかるみ」や「沼地」を意味するパンタノという村である。ブラジルでもアンブラスは強制収容所の幻影に苦しみ、断崖から飛び降りて死んでしまう。いかにグローバルに地球の裏側まで移動しようとも主人公たちは過去の「ぬかるみ」から逃れることはできない。ブラジルまでの道中に主

---

[28] André Spoor: Der kosmopolitische Dörfler. Christoph Ransmayrs wüste Welten. In: Die Erfindung der Welt. Zum Werk von Christoph Ransmayr. Frankfurt a.M. (Fischer) 2004 (1997)

[29] Christoph Ransmayr: Morbus Kitahara. Frankfurt a. M. (Fischer) 1997 (1995), S. 41. この小説からの引用は直接本文中にページ数を記入する。この小説に関しては以下の論文を参照のこと。徳永恭子:死角の文学−クリストフ・ランスマイアーの『モルブス・キタハラ』に関して　［日本オーストリア文学会　『オーストリア文学』 第 30 号 2014, 32−41 頁］

人公たちが目にするニュルンベルクの時間も停止したままである。それどころかそこは絶滅していた鳥や植物が復活したステップ地帯と化している。ここで描かれるのは世界の中心ではなく、負の歴史の償いとして辺境化させられたヨーロッパである。ランスマイアーは常に世界の中心と辺境を対置させる。[30] この小説での世界の中心はヨーロッパを非文明化させ、進駐軍を取り仕切るアメリカのワシントンである。『氷と闇の恐怖』では北極探検隊に指示を下すハプスブルク帝国首都ウィーン。『最後の世界』ではオウィディウスを辺境へと追放するアウグストゥス帝政下のローマ。『飛んでいく山』ではアイルランドとチベットを圧政下におくイギリスと中国。『コックスあるいは時の流れ』では紫禁城のある北京。ランスマイアーは時の流れから取り残された辺境を描くことによって、世界の中心の権力を透かし見せ、辺境から世界の中心に向かって警鐘を鳴らす。旅行者であり、冒険家でもあるコスモポリタン、ランスマイアーは、いかにグローバルに世界を股にかけようとも、周縁から世界を見ることを忘れない。このような周縁から世界を見る視点はオーストリアの作家たちの一大特徴なのではないだろうか。

おわりに

壁崩壊、ヨーロッパ統合を経た 90 年代以後のオーストリアの文学は外へと向い、コスモポリタン的な様相を帯びるようになる。しかしオーストリア文学を特徴付けているのは、外へと向かう遠心的な運動が、その反動でオーストリアへと、しかもオーストリアの地方へと戻ってくる求心的帰還へと変化することである。グローバルな動きがローカルへと転化するのである。ロベルト・メナッセの小説の主人公もブラジルからチェコ国境の村に戻ってくる。そして壁崩壊というグローバルな歴史を目前に控えたローカルが描かれる。ヨーゼフ・ヴィンクラーも、たとえインドや日本へと旅立っても、常に故郷カーメリングでの「死」に舞い戻る。ヴィンクラーと同じくケルンテン出身のリュディア・ミシュクルニクは、多言語性が自由を意味することのない国境地帯の閉鎖性を問題にした。ラビノヴィチもウィーンの街の周縁に位置するナッシュマルクトを舞台に国際色豊かな人々の交流を描くが、力点はミスコミュニケーションに置かれている。多言語性や多文化性が相互理解や他文化への開放性へと即座に接続するわけではない。安易な楽観性に走らないシビアな視点がこれらの作家たちに特徴的である。このような客観性に立脚した冷静な見方は、ヴァルトハイ

[30] ランスマイアー作品における中心と周縁の問題に関しては拙論を参照。徳永恭子 : 時間的な世界の終わりと空間的な世界の果て–クリストフ・ランスマイアーにおける周縁の時間性、気候を中心に［日本独文学会　『ドイツ文学』 第 154 号 2016, 122–139 頁］

ム事件以後オーストリア全土で過去への取り組みが始まったとする歴史認識は誤認であり、地方はその発展から依然取り残されていると述べるスロヴェニア系の作家マーヤー・ハーダーラップにも共通する。またここに見られるのは中央と地方との対比である。世界の中心と周縁の対立を意識して作品の構造に取り込んでいるのが、クリストフ・ランスマイアーである。そもそもヨーロッパの中でも地理的に周縁に位置するオーストリアの文学は、たとえグローバルになろうとも、いや、グロ―バルな視点を獲得したからこそ、ローカルから世界を見ることを忘れない。世界を周縁から見ることこそオーストリア文学の一大特徴なのではないだろうか。

Offene Grenzen:
Flucht und Vernetzung, Aufbruch und Migration in der österreichischen Gegenwartsliteratur

Martin Kubaczek

> *„Ganz nüchtern betrachtet, interessiert mich an der Ukraine, dass es nicht Österreich ist.“* Cordula Simon im Interview mit Stephan Wabl, „Profil“-online, 20.7.2013[1]
>
> *„Entwurzelt und umgetopft!“* Julya Rabinowich auf die Frage, wie sie sich als Kind 1977 bei ihrer Übersiedelung von St. Petersburg nach Wien fühlte (bei der Lesung im Literarischen Quartier Alte Schmiede, Wien, am 4.12.2014)
>
> *„Ich mache Literatur und Punkt!“* Seher Cakir im Interview mit Meri Disoski in „Der Standard“, 15.2.2010[2]

Vorangestellt drei Zitate: Eine Österreicherin, die in der Ukraine lebt, eine Türkin, die nach Österreich gekommen ist und die von stereotypen Fragen nach der kulturellen Differenz enerviert ist; eine Russin, die in ihrer Kindheit im neuen Sprachraum angekommen sich nun in der österreichischen Literaturszene etabliert und integriert hat; und mit Simon eine literarische „Arbeitsemigrantin“ in die Gegenrichtung. Drei Positionen, drei sich überkreuzende Bewegungen, die darauf hinweisen, dass Migration keine Einbahnstraße ist, kein One-Way-System, sondern in Austausch und Konfrontation, in Durchmischung und im neuen Sprachzugang, in seiner Außenperspektive eine Quelle nicht nur literarischer Kreativität und Faszination bereithält.

Schon 2006 widmete sich ein Sonderband der Zeitschrift „Text+Kritik“ dem Thema „Literatur und Migration“.[3] Für die aktuelle österreichische Situation lässt sich der Band „Ankommen“ von Brigitte Schwens-Harrant heranziehen: 2014 veröffentlichte sie Gespräche mit jenen inzwischen prominenten Neuzugängen, von denen die

---

[1] http://www.profil.at/home/cordula-simon-bachmannpreis-die-fruehstuecksjuroren-362159 abgerufen am 25.5.2017

[2] http://derstandard.at/1265851881267/Interview-Ich-mache-Literatur-und-Punkt abgerufen 25.5.2017

[3] Text + Kritik. Sonderband „Literatur und Migration“, hrsg. v. Heinz Ludwig Arnold, München 2006, u.a. mit Essays zu Yoko Tawada, Terézia Mora, Feridun Zaimoglu.

österreichische Literaturszene seit den 1990er-Jahren mitgestaltet und bereichert wird.[4] Die Zugewanderten brachten dabei etwas mit, das der „unheimlichen Heimat“[5] suspekt geworden war: Humor, wenn auch schwarzen, sowohl angesichts der Zustände in den Ländern, die sie verließen, wie auch der Zustände in jenem Land, in dem sie nun als Zeitgenossen mit Selbstironie, Sarkasmus und Verwunderung ihre Erfahrungen mit dem österreichischen Wesen kommunizierten. Sie wurden als erfrischend unbekümmerte Geschichtenerzähler gesehen, in ihrer Tragikomik und im Slapstick ihres Erzählens waren sie attraktiv, unterhaltsam und willkommen. Dennoch bleibt es ein Blick von Quasi-Nachbarn aus einem bekannten Kulturraum: Radek Knapp kommt aus Polen, Michael Stavaric aus der Tschechei, Dimitré Dinev und Iliya Trojanow aus Bulgarien, Julya Rabinowich aus der Sowjetunion.

Das Label „Migrationsliteratur“ ist allerdings umstritten: Glücklich über ihre Einordnung als Migrationsliteraten waren diese AutorInnen nicht, sie „drückten immer wieder ihren Unmut darüber aus, auf ihre Einwanderungsbiografien reduziert und lediglich in diesem Zusammenhang wahrgenommen zu werden“.[6] Zuwanderung war normal, der Zuzug aus dem Vielvölkerstaat der Monarchie bedeutete seit Jahrhunderten Mehrsprachigkeit, ja Vielsprachigkeit. Auch nach 1945 wurden Autoren wie Milo Dor, Manes Sperber, György Sebestyén nicht als gesonderte Spezies behandelt, sondern als selbstverständlicher integrativer Teil der Literaturgeschichte. Erst ab 1970 kam es zu einer sprachlich verengenden Nationalisierung des literarischen Feldes, „in dieser Zeit entwickelte sich das monolinguale Paradigma (…) Also die Idee, dass die Kreativität einer Person an eine Sprache gebunden ist“, wie Wiebke Sievers als Mitverantwortlicher eines Forschungsprojekts der österreichischen Akademie der Wissenschaften unter dem Titel „Literature on the Move“ betont. **I**mmigrierte AutorInnen würden die Transnationalisierung des literarischen Feldes inhaltlich und stilistisch vorantreiben, so Sievers und KollegInnen, die der Frage nachgehen, welche Auswirkungen ihrer Präsenz und Arbeit auf die ansässigen Schreibenden habe.[7]

Ähnliche Veranstaltungen zur Thematik fanden sich in den letzten Jahren u.a. an der Universität Klagenfurt, an der Arbeiterkammer Wien, am Institut für Österreichkunde.[8]

---

[4] Brigitte Schwens-Harrant: Ankommen. Autoren im Gespräch. Gespräche mit Dimitré Dinev, Anna Kim, Radek Knapp, Julya Rabinowich und Michael Stavaric. Graz: Styria 2014

[5] So der Titel von W.G. Sebalds Essayband aus dem Jahr 1991 zur österreichischen Literatur (ursprünglich im Residenz-Verlag Salzburg/Wien erschienen, derzeit als Fischer-Taschenbuch erhältlich).

[6] Julia Grillmayr: Vom Aushorchen der Wörter. In: Der Standard, Forschung Spezial, S. 13., 29.6.2016; zur Abschlusstagung des Forschungsprojekts „Literature on the Move“ an der Akademie der Wissenschaften

[7] http://www.litmove.oeaw.ac.at/projekt.php**,** abgerufen am 25.5.2107. Übergangen werden damit auch die literarischen Beiträge der slowenischen und kroatischen Minderheiten in Österreich, man denke nur an Autorinnen und Autoren wie Maja Haderlap, Janko Ferk, Florian Lipus, Gustav Janus, Fabjan Hafner, Losje Wieser, u.v.a.

[8] Literatur JETZT im Österreich des 21. Jahrhunderts. Symposion, Alpen-Adria-Universität

Auffallend in den Formulierungen und Konzepten dieser akademischen Auseinandersetzungen ist immer wieder die Topf-Metapher: *Was kommt herein, welchen Effekt hat es.* Das ist befremdlich, finden sich doch die Öffnung und das Motiv des Fort- und Hinausgehens nicht nur bei den vielen Reisenden unter den Autorinnen und Autoren, sondern allgemein in einer Bevölkerung, die ihrerseits Emigrations- und Fremdheitserfahrung hat, sei es aus Not oder Neugierde, aus Abenteuerlust oder wirtschaftlichen, privaten oder beruflichen Gründen, als Stipendiaten, für ein Studium – eines greift hier ins andere, hat seine fließenden Übergänge, und nicht wenige Autoren führen Auslandslektorate in ihrer Biografie an (Robert Menasse in Sao Paulo, Peter Waterhouse in Los Angeles, Wolfgang Hermann in Tokio, etc.), oder leben bestens vernetzt an den kreativen Schnittstellen komplexer kultureller Kodierung: Anna Kim, Milena Flasar, Ann Cotten, Claudia Simon, u.v.m.

Die junge Generation zeigt dabei mitunter einen noch höheren Grad an Freiheit und Mobilität, sowohl geografisch wie medial und mental; für die Nachkriegsgeneration endete die Welt sechzig Kilometer östlich von Wien vor dem Eisernen Vorhang. In einer Zeit der Bedrohungen des Kalten Krieg gab es nach Osten kaum ein Durchkommen, die Nachkriegsliteratur war nach Westen oder Süden hin orientiert, Autoren wie Handke, Roth, Henisch legten ihre Amerikareise- und Italienromane vor,[9] Anna Kim schreibt dagegen über Grönland – nun aber nicht über die Schrecken des Eises einer k&k Polarexpedition wie Ransmayr,[10] sondern über eine Selbstmordwelle in der indigenen Bevölkerung.[11] Mit der geopolitischen, wirtschaftlichen und migratorischen Öffnung nach dem Fall des Eisernen Zauns und der Berliner Mauer, seit der EU-Grenzöffnung einerseits und mit dem Aufkommen der neuen Kommunikations- und informationstechnologien hat sich der soziale Wahrnehmungsbereich verändert: *Was für*

Klagenfurt, 17. – 19. März 2016. Robert Musil-Institut für Literaturforschung in Kooperation mit dem Institut für Germanistik, dem Bildungszentrum der Arbeiterkammer Wien/ Initiative Minderheiten: Sag wie hast du's mit der Sprache. Zur Bedeutung von Sprache und Mehrsprachigkeit, Symposion 10./11.11.2011. Programm abrufbar u.a. auf der Forschungsplattform „Migration and Integration Research" der Universität Wien http://migration.univie.ac.at/home/ und dem Institut für Österreichkunde Wien/ Institut für Deutschdidaktik Klagenfurt: Migrations- und Fluchtgeschichte(n). Historisch-literaturwissenschaftliche Tagung. 2.-4.Juni 2016. Dokumentiert in: ide – informationen zur deutschdidaktik 1/2017: Menschen gehen. Flucht und Ankommen. Pädagogische, politische, literarische und linguistische Aspekte. Wien: Studienverlag 2017

[9] Josef Winklers „Friedhof der bitteren Orangen" und „Natura morta", Walter Kappbachers „Selina oder Das andere Leben" gehören hier ebenso dazu wie Birgit Müller-Wielands „Das neapolitanische Bett", u.v.a.

[10] Christoph Ransmayr: Die Schrecken des Eises und der Finsternis. Fischer Verlag 1984. Der Roman basiert auf der österreichischen Polarexpedition 1872-74 im Eis von Spitzbergen. Ein ähnliches Expeditionsdrama legte 1988 auch Michael Köhlmeier mit „Spielplatz der Helden" vor, in dem eine zeitgenössische Drei-Männer-Expedition durch Grönland beschrieben wird.

[11] Anna Kim: Anatomie einer Nacht. Roman. Frankfurt a. M.: Suhrkamp 2012; siehe dazu auch Anna Kims Reisebericht und Essay zur postkolonialen Situation Grönlands: „Invasionen des Privaten", Graz: Droschl 2011

die Nachkriegs-Generation die Demokratisierung war, ist für die Wohlstandsgeneration die Globalisierung. Bereiche werden literarisch erschlossen, die zuvor nicht zugänglich waren, vor allem in ehemaligen S.U.-Gebieten wie dem Kaukasus, Aserbeidschan, Georgien, Ukraine (Tschernobyl und Odessa), selbst von Krieg und Bürgerkrieg verwüstete „failed states" wie der Irak (Semir Insayif), der Jemen (Evelyn Schlag) und Libyen (Maxi Obexer) werden Schauplätze von Erzählungen und Romanen.

Wenn man einen Querschnitt der österreichischen Neuerscheinungen heranzieht (etwa auf der online-Rezensionsseite von www.literaturhaus.at), so zeigt sich, dass gut ein Viertel der Publikationen in die Rubrik *Krieg, Zeitgeschichte, Flucht, Exil* fällt. Die junge österreichische Literatur spricht von *Prekariat, Dystopie, Migration und Aussichtslosigkeiten*. „Es kracht an allen Ecken und Enden", so Cordula Simon im oben zitierten Interview. Mangelnde Zukunftsperspektiven, der Katastrophismus der Medien, die realen politischen und ökonomischen Bedrohungen, Terrorismus, politische Eskalation und Destabilisierung führen einerseits zu Skepsis und Rückzug in soziale Gruppen und Parallelwelten, mit den Migrationswellen und der globalen Öffnung lassen sich aber auch unkonventionelle neue Lebensmöglichkeiten wahrnehmen: Die 1986 geborene Schriftstellerin Cordula Simon, sie hat in Graz Russisch und deutsche Literatur studiert, lebt seit einem Lektorat in der Ukraine mit Unterbrechungen in Odessa. [12] Martin Leidenfrost, 1972 geborener Essayist und dokumentarischer Schriftsteller mit ruhigen, präzisen Reportagen über die Grenzregionen in Ostereuropa, wohnt seit vielen Jahren in einem Plattenbau in einem Vorort von Bratislava. Der Musiker und Schriftsteller Hans Platzgumer, geboren 1969 in Innsbruck, Diplom an Wiener Musikuniversität in Elektroakustischer Musik, lebte in New York und legte mit „Der Elefantenfuß" (Innsbruck: Limbus-Verlag 2011) einen dokumentarischen Roman über ein Biologen-Paar vor, das in der Geisterstadt Pripjat lebt und die Tierwelt in der verstrahlten Zone rund um Tschernobyl studiert. Die Germanistin und Autorin Verena Mermer, Jahrgang 1984, türkisch verheiratet, lebte und arbeitete vier Jahre als Lektorin in Rumänien, war davor als Stipendiatin in Delhi und Baku/Aserbaidschan, wo auch ihr Debutroman „Die Stimme über den Dächern" (St. Pölten: Residenz Verlag 2016) spielt.

Es scheint sinnvoll, die akademische Debatte um diese transitorische Gegenbewegung zu ergänzen, um nicht der abgeschotteten Innensicht der Ansässigen auf die Dazugekommenen zu unterliegen. In dieser begründet sich ja die befremdende Idee einer geschlossenen kulturellen Identität, die insofern absurd ist, als gerade die Geschichte Österreichs seit jeher von Migrationsströmen, Zu- und Abwanderung ländlicher Bevölkerung und selbst nach 1945 noch in jeder Dekade von dramatischen Flüchtlingswellen geprägt wurde.[13] Migration findet immer schon statt, sie war und ist

[12] 2016 erschien ihr mittlerweile dritter Roman „Wie man schlafen soll" im Residenz-Verlag einer der vielen dystopischen Texte, mit denen eine junge Generation auf die beklemmende geopolitische Lage reagiert.

[13] Nach Kriegsende kamen auf 6 Millionen Österreicher 2 Millionen „displaced persons" aus

Signum einer „westlichen Wertegemeinschaft“, die sich aus der Diversität und Vielfalt der Kulturen und Sprachen formt. Stabilität und Sicherheit der Lebensverhältnisse wird eher bedroht durch die ökonomischen und technologischen Entwicklungen mit ihren Auswirkungen auf Sozialstrukturen, Berufsgruppen und Regionen. Thematisiert und sichtbar wird dies unter anderem in den eigentümlich verhaltenen, sprachsensiblen Romanen des 1982 in Oberösterreich geborenen Autors Reinhard Kaiser-Mühlecker.

In der Folge soll nun über einige ausgewählte Beispiele der Bogen gebildet werden vom verlorenen Heimatbild mit einer ortsgebundenen spätfeudalen Identität der Untergebenen hin zu einer Heimatbildung, die sich in Sprachfindung, Kommunikation und Kooperation entwickelt.

HÜTER DER VERLORENEN HEIMAT: Reinhard Kaiser-Mühlecker

Seit seinem Debut mit „Der lange Gang über die Stationen“ (2008) geht Kaiser-Mühlecker in bislang sechs Romanen Beziehungs-, Familien- und Brüdergeschichten nach, die in Stifterscher Verzögerung und Präzision die Einbrüche der globalen in die regionale agrarische Lebenswelt darstellen. Das Land ist Vorstadt geworden, eine von Transport und Industrieanlagen, von Verkehrswegen durchkreuzte und zerschnittene Peripherie mit Resten von Nutzflächen. In atmosphärischen Landschaftsbeschreibungen und Naturbildern und Melancholie stellt Kaiser-Mühlecker seine oft schweigsamen und kontaktarmen Figuren in den Umbruch und vor den Ruin einer jahrhundertelangen Lebensweise, zeigt ihre aussichtslosen Versuche, in Zeiten globalisierter neoliberaler Wirtschaftssysteme eine kleinbäuerliche oberösterreichische Landwirtschaft weiterzuführen.

Nicht nur im zuletzt erschienenen Roman „Fremde Seele, dunkler Wald“ (2016) ist dabei auch die geopolitische Realität präsent. Hier sind es Erzählabschnitte rund um den älteren Bruder der Hauptfigur, der sich als Milizsoldat zu einem österreichischen Bataillon der U.N. peacekeeping missions meldet, im Kosovo stationiert ist, dann im Verteidigungsministerium eine Stelle findet, dort von seinem gutmütigen Vorgesetzten

---

verschiedenen Teilen Europas (Zwangsarbeiter, verschleppte Zivilisten, Soldaten, Flüchtlinge, Heimatvertriebene, etc). Dazu kamen 1947: 200.000 Donauschwaben aus Serbien; 1956: 180.000 Ungarn; 1968: 162.000 Tschechoslowaken; 1981-83 (Kriegsrecht in Polen): 120.000 Flüchtlinge, irakische und iranische Flüchtlinge im Golfkrieg 1988 -86; im Bosnienkrieg 1991/92: 90.000 Flüchtlinge, 1988 20.000 Tschetschenen, etc. Seit 1945 sind rund 2 Millionen Flüchtlinge nach Österreich gekommen, 700.000 von ihnen blieben und wurden Staatsbürger. In diesen Zahlen nicht erfasst sind die „Gastarbeiter“-Einwanderung seit den 1960er-Jahren und die Arbeitspendler aus Nachbarstaaten (vor allem Polen als Bauarbeiter, Slowakinnen und Rumänische Frauen als Pflegekräfte, etc.) Zum Vergleich: Derzeit leben rund 500.000 österreichische Staatsbürger permanent außerhalb des Landes. Quelle: „Flucht und Asyl in Österreich“ Bericht der UNO-Hilfsorganisationen, abgerufen am 20.5.2017: http://www.unhcr.at/fileadmin/user_upload/dokumente/02_unhcr/events/UNHCR_QA_2015_FINAL.pdf

beruflich gefördert wird. Der jüngere Bruder führt dagegen die kaum noch Erträge liefernde väterliche Landwirtschaft weiter. Der Vater verspekuliert den Hof mit Aktien, der jüngere Bruder nimmt eine Stelle als Handwerker an, besucht die Versammlungen einer lokalen Sekte. Spürbar ist der Verlust von Zugehörigkeitsgefühl in subtilen Details und Innensichten der Hauptfiguren, ihren fehlschlagenden Beziehungen, dem Rätsel um den Freitod eines Jugendfreundes. Immerhin gibt es im Fall des aus dem Kosovo zurückgekehrten Bruders nach allen Querelen und Hindernissen eine Art des stillen Glücks und einer verhaltenen Erfüllung. Das wird erzählerisch nicht herbei gezwungen, die Dinge scheinen sich eher zu fügen in einem fast Stifterschen Sinn. Die schmerzhafte Suche nach Halt, Zuordnung, funktionierenden Beziehungen wird fast beiläufig erzählt.

Der Roman schaffte es auf die Shortlist zum Deutschen Buchpreis 2016; vorangegangen waren ihm die zusammen 1400 Seiten der beiden Romane „Roter Flieder“ (2012) und „Schwarzer Flieder“ (2014), die ein ganzes Spektrum österreichischer Geschichte in einer mehrere Generationen umfassenden Familienchronik abhandelten, mehrperspektivisch erzählen von Anpassung und Opportunismus, von Mord und Familientragödien, vom in Bolivien verschwundenen Nazi-Großvater, von Schweigen und Verschweigen, von Kälte und Beziehungslosigkeit, die sich nahtlos fortsetzt in den verlorenen Perspektiven der in die Stadt abwandernden Nachkommen der ursprünglichen Landbevölkerung.

ANARCHISCHE ROLLENSPIELE: Marlene Streeruwitz

Auseinandersetzungen und Engagement der Literatur in Richtung zeitsensibler Fragen werden aber auch von den AutorInnen der vorangehenden Generation wahrgenommen: Norbert Gstrein, Sabine Gruber, oder die oft übersehene, wenig ältere Evelyn Schlag liefern etwa Romane zu aktuelle Kriegsszenarien. Bei ihnen verbinden sich, generationsbedingt, eigene Reflexionen noch unmittelbar zurück in die Nazizeit und zum Holocaust, gegenwärtige Konfliktzonen werden biographisch mit meist tragisch scheiternden Beziehungen in ihren libidinösen Verlusten aufbereitet. Auch in Marlene Streeruwitz letzten Romanen findet sich diese Präsenz der Motive: Frauenfiguren arbeiten sich entlang einer ausbeuterischen Ökonomie, die Probleme der Gegenwart werden zurückverbunden zu den Traumata der Nazizeit. Ging es Streeruwitz im Roman-Double „Nachkommen“ und „Die Reise einer jungen Anarchistin in Griechenland“ (2014) um die Fassungslosigkeit angesichts der Auswirkungen der Bankenrettung auf die griechische Bevölkerung einerseits und die Machtmethoden im Literaturmarkt andererseits, so mischt „Yseut. Ein Abenteuerroman“ (2016) ihre Themen wieder neu auf: Die Protagonistin Yseut („Üsüt“ gesprochen, eine Form von Isolde), hetzt in wilden Autofahren durch die Szenen einer Gesellschaft nahe der Anarchie und Auflösung: Flüchtlinge und Asylsuchende finden sich hier ausgesetzt dem Straßenkampf und den Schießereien zwischen Mafiabanden, Polizei und Militär. In diese erzählerische Gegenwart gegengeschnitten werden Kapitel mit Rückblenden in Yseuts Vorgeschichte,

die in Aufenthalte in Kalifornien zurückreicht oder in das Herumziehen mit einer Theatergruppe, in gescheiterte Ehen und Beziehungen, in familiären Verwicklungen im Nazi-Regime und in die Zeit des Kalten Krieges. Am Ende steht eine Schaubühne, in deren gespielten Szenen Yseut Episoden aus ihrem eigenen Leben wiedererkennt - vielleicht eine Reminiszenz an Streeruwitz‘ ursprünglichen Erfahrungen als einer der innovativsten und produktivsten Theater-Autorinnen der 1990er-Jahre.

BILDER VOM KRIEG: Sabine Gruber

In Norbert Gstreins Roman über Israel und Palästina („In der freien Welt“, Hanser Verlag 2016) wird John, amerikanischer Jude und ehemaliger Freiwilliger der israelischen Armee, in San Francisco auf offener Straße niedergestochen und so getötet. Sein österreichischer Freund, ein Schriftsteller namens Hugo, der um John trauert, reist nach Kalifornien, wo sich die beiden bereits vor Jahrzehnten kennengelernt hatten, und weiter nach Israel. Er spricht mit Palästinensern und Israelis, versucht beide Seiten zu verstehen, sieht sich auf beiden Seiten des Konflikts um. Es geht um jüdische Identität, um das Fortwirken deutscher Geschichte und die Politik Israels, der Krieg ist Schauplatz und zerstörerischer Ausdruck von Sprachlosigkeit und Nichtkommunikation in diesen Auseinandersetzungen.

Ähnliche Fragestellungen gegenüber der verzweifelnden Aussichtslosigkeit angesichts der Dauer von Kämpfen und Konflikten finden sich in Sabine Grubers Roman „Daldossi oder Das Leben des Augenblicks“ (München: C.H. Beck 2016). Die in Wien lebende gebürtige Südtirolerin hat auch schon in ihren früheren Werken die großen Themenbereiche Biographie, Beziehung, Migration anhand der eigenen Herkunfts-, Familien- und Südtirol-Geschichte in ihrer formal beeindruckenden erzählerischen Schnitttechnik verwoben. Mit Bruno Daldossi gestaltet sie eine Figur, anhand derer sie die Darstellung der Kriegspräsenz, die Problematik der Sensationsmedien mit ihren Schreckensbildern für die Medien-Konsumenten reflektiert. Durch ihre Figur hindurch lässt sich fragen: Geht es nur noch um Sensation, ist die Idee der Aufklärung und Anklage überhaupt noch möglich? Daldossi hat sich als Presse-Fotograf auf Krisen- und Kriegsgebieten spezialisierte und über Jahrzehnte hin unter Lebensgefahr Bilder aus den Konflikten in Tschetschenien, dem Irak, dem Sudan und aus Afghanistan geliefert. Nun, sechzigjährig, zweifelt er an der Sinnhaftigkeit seines ursprünglichen Engagements, geht nur mehr sporadisch auf eine seiner lebensgefährlichen Missionen. Als ihn seine Gefährtin wegen eines anderen Mannes verlässt, empfindet er sich sowohl auf beruflicher wie privater Ebene als gescheitert. Er freundet sich mit einer Journalistin an, die von den furchtbaren Zuständen in den Flüchtlingslagern auf Lampedusa berichtet, reist ihr nach, versucht dann doch die frühere Gefährtin zurückzugewinnen, wird abgewiesen.

Gruber schreibt von einer harten Kombination aus Sex und Crime, erzählt von Männern,

die in Suff und Verdrängung untergehen. Um ihren Roman möglichst authentisch schreiben zu können, hat sie in einer deutschen Armeestation an einem Training für Kriegsjournalisten teilgenommen, hat eine Fülle von Themen und Elementen zwischen Krise, Krieg und persönlichem Scheitern zu ihrem Plot in einem Beziehungsdrama verbunden. Dezidiert thematisiert sie auch die Zustände in den Flüchtlingslagern, will Verzweiflung und aussichtslose Intentionen, Bereitschaft und Verantwortungsgefühl ihrer Figuren anerkennen, gerade indem sie das Scheitern, die Selbst-Überforderung und das Versagen ihres Hauptcharakters bis in seinen Ruin hinein auslotet:

> „Ich habe mich beim Schreiben gefragt: Was macht einer, wenn er nicht mehr in den Krisengebieten unterwegs ist? Wie hält er den Frieden aus, wenn in seinem Kopf noch immer oder immer wieder Krieg ist? Wie lebt er mit den Bildern, die er geschossen oder eben nicht geschossen hat, die veröffentlicht oder nicht veröffentlicht wurden? Daldossi schläft schlecht, er trinkt zu viel, ist zuweilen aggressiv. Der Krieg geht in seinem Kopf weiter, der Mann ist kaum noch friedenstauglich.“[14]

Gruber war mit dem Südtiroler „Stern“-Journalisten Gabriel Grüner befreundet, der im Kosovo erschossen wurde. Ihre Figur Daldossi sei in keiner Weise der Wirklichkeit „abgeschrieben“, dem Freund nicht nachgebildet, betont Gruber im zitierten Interview. In gewisser Hinsicht stellt Gruber mit der drastischen Metaphorik vom „Bilder schießen“ in der Kriegsfotografie und mit dem Sensations- und Katastrophen-Journalismus aber auch die eigene Darstellung des Grauens in Frage: Ihr Schreiben zielt auf Verantwortung und Aufklärung, die über die eigene Befindlichkeit hinaus auf globale Katastrophen verweisen will und auf die Darstellung der existentielle Gefahr und der brüchigen Illusionen der zivilisierten Gesellschaft abzielt – Ansprüche, die sich für eine jüngere Generation anders stellen, wo die Kriegserlebnisse in eine weit zurückliegende Epoche gerückt sind und sich nur noch vage und indirekt in den Großvätern vermitteln, wie etwa in Teresa Präauers so ernstem wie zauberhaftem, mehrfach ausgezeichneten Debut-Roman „Für den Herrscher aus Übersee“ (Göttingen Wallstein Verlag 2012), einer raffiniert-verspielten, kindlich poetisierenden Erzählung über ein Geschwisterpaar, das sich Flugmaschinen erfindet und bastelt. Erzählt wird in einer flirrenden Mischung aus Phantasie und Realität in der Ich-Perspektive der älteren Schwester, die mit ihrem kleinen Bruder bei den Großeltern untergebracht ist, während die Eltern irgendwo auf einer großen Reise unterwegs sind. Der Großvater mit seinen Geschichten von einer japanischen Pilotin, die mit ihrem Flieger neben ihm abstürzt, oszilliert zwischen Witz, Erfindung und fragwürdigem Nazi-Hintergrund, die Kinder lieben und fürchten ihn, wenn im Spiel der brutale Kern des alten Patriarchen

---

[14] Literatur ist eine Lebensentscheidung. Sabine Gruber im Gespräch mit Christoph Franceschini. In: Salto. Das Nachrichten- und Communityportal für Südtirol, 1.8.2016. Nachzulesen unter https://www.salto.bz/de/article/01082016/schreiben-ist-eine-lebensentscheidung, abgerufen am 10.8.2017

hervorbricht. Die Eltern schicken Postkartengrüße mit gehaltlosen Ermahnungen, lassen die Kinder bei den Großeltern zurück – subtiler Hinweis auch auf das Vakuum und den Neglect in der gegenwärtigen Elterngeneration mit ihren primären Befindlichkeiten und Karrieren.

DIE SEHNSUCHT DER UNTERDRÜCKTEN: Verena Mermer

Aufmüpfig, unbekümmert, energetisch, ohne Vorsatz und vorgefasste Meinung gestaltet erscheinen auch die folgenden Romane, die ich kurz skizzieren möchte. Sie sind dicht, unmittelbar und atmosphärisch stimmig, gerade auch weil sie sich nicht den Forderungen einer leichten Lesbarkeit oder erzählerischen Professionalität unterwerfen, sondern ihre eigenen Wege suchen, oder weil sie unmittelbar aus Reise- und Aufenthaltserfahrungen in politisch extremen geografischen Zonen entstanden sind: Berg-Karabach/Kaukasus und Baku/Aserbeidschan:

Verena Mermer, Jahrgang 1984, aufgewachsen in Niederösterreich, studierte Germanistik, Romanistik und Indologie in Wien, es folgen Arbeitsaufenthalten in Delhi, Baku und Cluj-Napoca (Rumänien), wo sie vier Jahre lang als Lektorin arbeitete. In Baku hat Mermer (sie hat den Namen ihres türkischen Ehemanns angenommen) die Niederschlagung der Protestbewegung gegen das autoritäre autokratische Regime im Frühjahr 2011 miterlebt und zum Thema ihres 2015 bei Residenz erschienenen filigranen Debuts gemacht, dem Roman „die stimme über den dächern“, in dem sie auf Kleinschreibung und einige formale Strukturelemente insistierte, vor allem aber auch mit Intertextualität arbeitete und ihre Protagonisten „politically ganz incorrect“ rauchen lässt. Man fühlt sich an die Debattierstuben der 1968er-Generation erinnert, die alten Utopien scheinen hier wieder zu erstehen, ein freundlicher, utopischer Marxismus und eine beschwingte Liebe, eine Flasche Wein, so sind die ersten neunzig Seiten atmosphärisch erfüllt von orientalischer Verzauberung: Nino ist Lektorin, macht Sprachunterricht, ist unsterblich in Ali verliebt, der als ewiger Student und träumerischer Agitator auftritt. Die beiden ziehen in eine Wohngemeinschaft mit dem befreundeten Paar Che, der Arzt ist, und Frida, einer Tänzerin und Schauspielerin. Sie lesen ein wenig Freud und Marx, rauchen und trinken viel, spazieren durch die Altstadt, treffen sich in Kneipen oder WGs. Es ist eine brüchige Seligkeit in orientalisch dunklen Nächten, peripher gehören dazu auch Emin, der Verkäufer im kleinen Laden um die Ecke, oder der suspekte Richard, der mit den Faschisten Bier trinkt und mit den Stalinisten Tee, oder Alis Bruder Fuad, der wegen seiner homosexuellen Beziehung bedroht wird und gefährdet ist.

In die bildhaften Beschreibungen und Szenen einmontiert finden sich kursive O-Ton-Passagen, in denen die Figuren unmittelbar in ihren Fantasien und Träumen sichtbar und hörbar werden. Das verleiht dem Text an einigen Stellen drehbuchhaften Charakter, aber immer finden seine Figuren Unterschlupf, werden von der Autorin

liebevoll begleitet, berührende Szenen orientieren sich dabei am orientalischen Erzählen als Schutzraum der Liebenden. Angespielt wird aber auch auf historische Figuren wie Frida Kahlo und Che Guevara: Che, der Arzt, wird so zum revolutionären Wiedergänger. Geht der Text anfangs ganz auf in Lokalkolorit und Atmosphäre, so kommt später die politische Dimension ins Spiel: Abgehörte Telefonate, KGB-Besuche und Repressionen zermürben die Beziehungen, Nino verliert ihre Arbeit, bangt um den nach einer regierungskritischen Demo verhafteten Ali, zu dem es über Tage und Wochen keinen Kontakt und keine Informationen gibt. Ali kehrt einmal als Imagination zurück, erweist sich in einer Umarmung dann doch als real. Die flirrenden Zwischenwelten zeigen die Anspannung, die schließlich zu einem psychischen Zusammenbruch Ninos und ihrem Entschluss zur Heimkehr führt. In den Stimmen über den Dächern klingt ihr der Ruf *Azadliq* nach - Freiheit auf aserbeidschanisch.

GLOBAL VILLAGE, ALPENDORF: Robert Prosser

Robert Prosser findet dagegen im Kaukasus die Hüttenstruktur seiner Heimat wieder in den Behausungen jener, die sich in den Schutz der höchsten Täler zurück ziehen. Robert Prosser, geboren 1983, aufgewachsen im Tiroler Bergdorf Alpbach,[15] hat sich dort als Sprayer betätigt, ist in der Hip-Hop-Szene aufgetreten, war früh aktiv auf Lesebühnen und bei Poetry Slams, ist präsent als Kurator von Literaturperformances und Internetauftritten. Unter programmatischen Titeln wie *Lockstoff – Babelsprech - Riots im Gläsernen Käfig* engagiert er sich in eigensinnigen wie widersetzlichen poetischen und ästhetischen Grenzbereichen. Im Literaturhaus Wien kuratiert und moderiert er die Lesungsreihe „kombo kosmopolit“ von Kulturkontakt-Austria, in der osteuropäische AutorInnen, die als Stipendiaten eingeladen sind, zum Austausch mit den vor Ort Schreibenden zusammenkommen. Prossers erste Prosapublikation hatte den Titel „Strom. Ausufernde Prosa“ (2009), es folgte mit „Feuerwerk“ (2011) eine ebenso ausufernde wie kraftvolle und eigensinnige experimentelle Reiseprosa, die als „dicht gewebter, elektrisierter Impressionsteppich, ein Logbuch des Umherschweifens“ bezeichnet wurde.[16] Prosser ist unterwegs auf mehreren Kontinenten: „Strom“ beschreibt Indien, „Feuerwerk“ Venezuela, China und Tiroler Eisenbahntunnel, „Geister und Tattoos“ (2013, alle Klever Verlag Wien) spielt im Kaukasus. Hier findet sich eine globale Flexibilität und Mobilität, wird jeder Winkel zugänglich, Komfort ist irrelevant, Eigen-Gefährdung wird in Kauf genommen, um dem Alltag von Rand- und

[15] Alpbach ist bekannt durch seine seit 1945 stattfindende alljährliche Tagung europäischer Experten aus Politik, Wirtschaft, Philosophie, Zivilgesellschaft und Kultur. Thema des Europäischen Forums Alpbach 2017 ist „Konflikt und Kooperation“, es finden dabei innerhalb von zwei Wochen 200 Vorträge, Debatten und Podiumsdiskussionen mit insgesamt 700 eingeladenen ExpertInnen statt. Alpbach beherbergt während des Jahres auch eine Gesprächsreihe zum Thema „Innovative Ansätze zu Migration und Integration“; siehe unter: https://www.alpbach.org

[16] http://www.robertprosser.at/v2/node/51, abgerufen am 20.5.2017

Risikogruppen fernab aller Konsumgesellschaften zu begegnen, gleichmütig teilzunehmen am prekären Überleben.

„Geister und Tatoos“ ist aus kleinen Prosa-Einheiten aufgebaut: 40 Abschnitte im ersten Teil mit dem Titel „Unter Wölfen“, 50 Abschnitte im 2.Teil unter dem Titel „Auf die Toten, auf die Frauen“; jeweils steht den Abschnitten in Klammer ein titelartiges Stichwort vorangestellt. Der erste Teil bildet als Patchwork solcher Abschnitte eine Sicht auf den Alltag der Milizionäre; das streckt sich vom Ansiedeln im Talschluss hin zu ihren Erzählungen aus den Kampfzonen und vom Gefängnis. Man erfährt einiges über die Rolle der Tattoos und deren codierte Bedeutungen, ständiges Thema ist die Beschaffung von Alkohol, die Korruption der Gefängniswärter. Gewalt und Abstumpfung in sowjetischen Lagern und bei den Kämpfen der autonomen Gebiete bestimmen den Alltag, sadistische und brutale Rituale kennzeichnen das Sozialgefüge im Baracken-Dorf. Wie eingepackt in Nebelfetzen ziehen und verschwinden die Motive und rudimentären Szenen.

Im zweiten Teil findet sich etwas mehr narrative Linie und erzählerischer Kontext durch die neue Figur Kim, die als Transvestit, Fremde, Außenseiterin ins Dorf kommt. Nachdem drei der Milizionäre der wilden Siedlung von Angreifern erschossen werden, verlässt Kim die dörfliche Gruppe wieder, wobei auch die Zeit der Enklave vorüber scheint: Zwei Vermessungsingenieure kommen in das Tal, sie sollen es für die Regierung vermessen, die hier ein Wander- oder Skigebiet einrichten möchte, um den Tourismus anzukurbeln – fast ließe sich darin eine ironische Paraphrase an Kafkas „Schloss“-Roman sehen. Prosser gestaltet ein Szenario zwischen Alptraum und Realismus, das sich auch in die Tradition von Kubins „Die andere Seite“ oder Ransmayrs „Die letzte Welt“ stellen lässt. Medial wurden Prossers Texte bislang kaum wahrgenommen, seine Prosa folgt einem ästhetischen Programm, dem man im Feuilleton eher ausweicht: hier nimmt kein Erzähler den Leser an der Hand, um ihn durch eine wahre Geschichte zu führen. Dennoch erschien sein neuer Roman „Phantome“ nicht mehr im kleinen Wiener Klever Verlag, sondern bei Rowohlt.[17]

GEWALT, HÄUSLICH, GLOBAL: Katharina Winkler

Volle Aufmerksamkeit erhielt dagegen einer der in seiner Poetisierung der Gewalt erschreckendsten Romane, die in den letzten Jahren erschienen sind: „Blauschmuck“ - der titelgebende Ausdruck für die Blutergüsse der geprügelten und misshandelten Ehefrauen in einem kurdisch-türkischen Bergdorf wurde von der Autorin selbst geprägt.

[17] „Phantome“ wurde auf die Longlist zum Deutschen Buchpreis 2017 aufgenommen. „Longlist des Deutschen Buchpreises steht fest“ In: Frankfurter Allgemeine Zeitung, Feuilleton, 15.8.2017, online: http://www.faz.net/aktuell/feuilleton/buecher/themen/die-longlist-des-deutschen-buchpreises-steht-fest-15152035.html, abgerufen am 16.8.2017

Die Erzählung basiert auf der Lebensgeschichte einer kurdischen Immigrantin, die verschleiert in die Landarzt-Ordination von Katharina Winklers Vater kam, als die Autorin dreizehn Jahre alt war. Mit zwanzig nahm sie dann über viele Stunden den freimütigen Bericht der inzwischen von ihrem Peiniger befreiten Frau auf Kassette auf. Es brauchte weitere zehn Jahre, in denen Winkler, die inzwischen Literatur- und Theaterwissenschaften studiert hatte und als Schauspielerin arbeitete, hunderte Gedichte schrieb, bevor sie sich an den Stoff wagte, den sie verdichtete und in knapper, bildhaft-szenischer und poetisch gestaltender Form zusammenfasste.

Anfangs findet sich noch eine bukolische Szene der Kindheit im kurdischen Dorf, sie wird aber sofort verwüstet durch die blindwütige Gewalt des patriarchalischen Vaters. Gegengeschnitten wird diese von Bildern des die Schafe reißenden Wolfs, symbolisch unterscheidet sich die sinnlose Brutalität des Mannes nicht von tierischen des reißenden Wolfs. Auch wird hinter den Bergrücken und jenseits der Passhöhe gekämpft, die Bedrohung durch unerklärliche und willkürliche Gewalt ist im Alltag ständig präsent. In einer weiteren berührenden Szene verliebt sich Filiz in den Dorfjungen Yunus, sie heiratet gegen den Willen ihres Vaters, flieht vor ihm zu Yunus, gerät bei ihm und seiner Mutter in die nächste Falle physischer und psychischer Destruktion. In der Hoffnung auf „ein Leben in Jeans“ (das Synonym für westliche Gleichberechtigung) folgt sie dennoch Yunus, der nach Deutschland vorausgereist war und schließlich in einer oberösterreichischen Kleinstadt mit Gebrauchtwagen handelt. Er zwingt Filiz Schleier zu tragen, prügelt sie, wenn sie mit dem Briefträger spricht oder einen Mann nur anblickt. Filiz, die inzwischen zwei Kinder geboren hat, kommt nach einem Selbstmordversuch ins Krankenhaus. Mit Hilfe von Nachbarn und der Frau des Arztes schafft sie schließlich den Schritt zur Trennung und zieht mit den Kindern in ein Frauenhaus. Sie wird selbstständig, machte Ausbildungen, wird beruflich autonom. An einer Immigrantin aus einem anderen Kulturkreis dargestellt, ergäbe sich aus der Distanz und in der Fremdheit die Möglichkeit, etwas lesbar zu machen, so die Autorin, das sich auch in deutschen und österreichischen Haushalten abspiele. Die Geschichte sei für sie aber nur schreibbar gewesen, weil sie gut ausgeht und Filiz davon kommt, erklärte Winkler im Gespräch.[18]

RÄTSEL DER ANKUNFT: Peter Waterhouse/ Nanne Meyer

Vom Ankommen und Fortgehen in einer ständigen Sprachbewegung und mit ständigem Nachfragen berichten auch „Die Auswandernden“ (starfruit publications 2016) von Peter Waterhouse – eine Erzählung die diese Thematik vielschichtig in sich trägt, ist doch der Autor selbst mehrfach kulturellem und sprachlichem Transfer ausgesetzt worden: aus der Kindheit in Malaysia, wo der Vater als britischer Agent stationiert war, mit der österreichischen Mutter dann in Norddeutschland lebend, bis er zum Studium

[18] Im Literarischen Quartier Alte Schmiede in Wien anlässlich ihrer Lesung am 21.2.2017

nach Wien übersiedelte, anschließend auch in Los Angeles und England lebte. Zunehmend übersetzte Waterhouse auch aus dem Italienischen, und seit über einem Jahrzehnt befindet er sich in unmittelbarem Kontakt und in Gesprächen mit Flüchtlingen und Asylanten: Er besucht ihre Prozesse, unterstützt und begleitet sie, indem er ein Ankommen für die später doch Abgewiesenen zu erreichen sucht. Die Schritte einer sich über Jahre hin ziehenden Ankunft zeichnet er nun mit einem Text nach, der Flucht und Vertreibung schon im Titel trägt. Er spielt an auf Goethes „Unterhaltungen deutscher Ausgewanderten“ (1795), einer Rahmenerzählung und Novellensammlung vor dem Hintergrund der innerdeutschen Flucht vor den französischen Revolutionstruppen.[19]

Waterhouse vorangegangene Veröffentlichung „Der Honigverkäufer im Palastgarten“ (Salzburg: Jung & Jung 2010) greift schon die Geschichte der in der Wiener Votivkirche Schutz suchenden Asylwerber und einer Hausbesetzung in Wien auf. Dieses neue Buch erzählt von einer aus einem kaukasischen Dorf mit ihrer achtjährigen Tochter nach Österreich geflüchteten Frau namens Media, von ihrem Ringen mit der fremden Sprache, mit absurden Bürokratien und willkürlichen Hürden bei Einvernahmen, Protokollen und Bescheiden, von kafkaesken anmutenden Ämtern und Gerichten. Gleichzeitig ist es ein Sprechen über die Hoffnungen derer, die am Rande der Gesellschaft leben, von der Liebe zu Wortklängen und ihren Fehldeutungen, die so kreativ und vergnüglich sind, wie sie unverhofft dann auch noch Sinn ergeben. Das Buch, vom Verleger initiiert, ist als Projekt über mehrere Jahre hin als ästhetisches Experiment zwischen dem Autor und der Zeichnerin Nanne Meyer entstanden. Gestaltend reagierten sie abwechselnd auf Text und Bild, generieren so im Austausch einen Text- und Bild-Verlauf, der getragen ist von der Verhaltenheit des Indirekten in der Form des Umwegs, der am Ende des Buches beschworen wird als der bessere Weg einer Zielsetzung, die sie teilen: Er verfeinert die Sinne, Wahrnehmung und Bewusstheit für die ebenso kostbare wie verletzliche Daseinsform jedes einzelnen Lebens.

Waterhouse ist einer, der den Übergang vorführt zu einer Literatur zurückhaltender Stille, stummer Teilnahme, Anteilhabe in der Begleitung. Das wird ästhetisch und erkenntnistheoretisch ebenso wie ethisch begründet, belegt, fundiert. Selbst eingeübt in eine Sprachlosigkeit, die er in seinen Essays zu Celan und Zanzotto als „Genesisraum“ bezeichnete (quasi als Entstehungs- und Offenbarungsraum),[20] sieht er in der Sprachlosigkeit den Ausgangspunkt des Hörens auf den sprachlichen Laut, den er

---

[19] Auch auf W.G. Sebalds vier Erzählungen über jüdische Schicksale, die er unter dem Titel „Die Ausgewanderten“ 1991 veröffentlichte, kann hier verwiesen werden, auch wenn sich Flucht und kultureller Identitätsverlust nun in anderer Richtung neuerlich ereignen. Die beiden Werke, wenn auch aus gegensätzlichen Perspektiven geschrieben, lassen sich verschiedentlich in Beziehung zueinander setzen, wie etwa in der Form der „Begleitung“, eines mitvollziehenden Denkens ohne vorgefertigte Urteile.

[20] Peter Waterhouse: Im Genesisgelände. Versuche über einige Gedichte von Paul Celan und Andrea Zanzotto. Urs Engeler Editor 2001

zum Ursprung und Ausgangspunkt einer analytischen und etymologischen Deutungs- und Lesearbeit macht. Als ein zwischen den Kulturen und Sprachen lebender Übersetzer und Beschwörer einer Poesie des Abwesenden und der Nicht-Aneignung begleitet er jene Auswandernden und Geflüchteten mit der Erfahrung des Traumas, das zum Verstehen auch der Träume und Mythen in Goethes kryptischem „Märchen“ verhilft, wo Sprachimaginationen und Vorstellungswelten temporäre Brücken bilden. Von Waterhouse‘ Opus Magnum, dem wuchtig-zarten fast 670seitigen Prosaband mit dem irritierend ein- wie ausklammernden Titel „(Krieg und Welt)“ (Salzburg: Jung & Jung 2006) verläuft die Verbindung über die Sprachform, da Spracherleben: dort in der Vatergeschichte, hier nun in Asylgeschichte, in beiden Fällen läuft des Begehren und die Zuneigung, die Hinwendung an den anderen und die Suche nach Vertrauen über den Moment der Stummheit, führt zu einer Suche nach dem Zugang zur Person in der Akzeptanz, ohne ihre Vorgeschichten im Unverständlichen und Verschwiegenen aufbrechen zu wollen. Gegenüber dem Erlittenen aber stellt sich der Fragegestus ein, der die Texte oft in Clustern und im Stakkato von Vermutung, rhetorischen Fragen und Infrage-Stellungen aufbaut. Der Text entwickelt sich als Prozess insistierender Fragestellungen, die unmissverständliche ihre inhärenten Antworten und die Ethik ihrer Überzeugungen klarstellen.

ZUR SPRACHE FINDEN: Vom Transfer zur Transkription

Mit den Themen Flucht und Asyl scheint ein neues literarisches Genre zu entstehen: „Erzählte Flucht“ hieß ein Panel zur Flüchtlingsdebatte in der Gegenwartsliteratur im Rahmen der Tagung "65 Jahre Genfer Flüchtlingskonvention“ des „Netzwerks Flüchtlingsforschung“ deren akademische Organisatoren in ihrer Einleitung klarstellten:

> „Der Diskurs, den die Gegenwartsliteratur über die aktuelle Flüchtlingsthematik führt, unterscheidet sich deutlich von dem, der in Medien und Politik geführt wird. Sie nimmt diesen zwar aufmerksam zur Kenntnis und setzt sich entsprechend kritisch mit ihm auseinander, entwickelt jedoch eigenständige Fragestellungen und Kategorien, die in der öffentlichen Debatte wenig Berücksichtigung finden. Zudem leihen Autoren in ihren Texten über ihre Figurengestaltung jenen eine Sprache, denen entweder aufgrund von Kriegs- und Entortungstraumata noch keine Sprache zur Verfügung steht oder angesichts vorherrschender Stereotype kein Raum im öffentlichen Diskurs zugestanden wird (z.B. ‚Schlepper‘ oder ‚Wirtschaftsflüchtlinge‘).“[21]

Reisen, Transit, Asyl - Fremdheit und Asyl, im Transit sein, Situationen sozialer Nicht-Zugehörigkeit, Sprachlosigkeit und Exil**,** das waren auch die Themen einer Veranstaltungsreihe im Literarischen Quartier Alte Schmiede in Wien für

[21] Vom 6.-8. 10.2016 in Osnabrück unter der Leitung von Sarah Steidl (Universität Hamburg) und Ivo Theele (Europa-Universität Flensburg), http://fluechtlingsforschung.net/konferenz/, abgerufen am 21.5.2017

Oberstufen-Literaturgruppen der AG Germanistik 2015/2016.[22] Die dabei (und im Folgejahr) vortragenden und diskutierenden Autorinnen und Autoren Anna Kim, Martin Leidenfrost, Ann Cotten, Robert Prosser, Milena Michiko Flasar, Ilija Trojanow, Julya Rabinowich, Susanne Gregor u.a. eint eine Haltung der Bereitschaft und Suche nach Ursachen und Motiven. Ihrer Zuwanderung korrespondiert das Hinausgehen, eine Mobilität in verschiedensten Richtungen der Unvoreingenommenheit. Nicht der Katastrophismus ist ihre Motivation oder ihr Ausgangspunkt, sondern die Auffassung des Fremden als einer anderen Art des Eigenen, in der Interaktion, die dem Schreiben vorangeht, die sie motiviert, zu der ihr Schreiben beiträgt auch als einer Herkunfts- und Zugehörigkeitsforschung vor dem Faktum der Devianz und Diversität moderner Großstädte, die Zentren der Zuwanderung sind: die Hälfte der rund 1,8 Millionen Einwohner Wiens sind nicht in dieser Stadt geboren, viele kommen aus den Bundesländern und ein Drittel der in Wien lebenden Menschen ist nicht österreichischer Herkunft, sondern zugewandert.[23]

Es ein Spezifikum der Vielfalt in der Literatur, gerade jenem zur Sprache zu verhelfen, das noch keine Sprache hat, das sich nicht ausdrücken kann oder das nicht wahrgenommen wird. Sichtbar und hörbar zu machen, eine Stimme zu geben, ist wohl eine der kostbaren Herausforderungen und Charakteristika von Literatur. Immer wieder begibt sich Literatur in die Außenzonen, an den sozialen Rand, in die emotional schwierigsten Zonen, ist Ausdrucks- und Forschungsbereich für das bislang nicht Wahrgenommene, schwer Artikulierbare, sucht Zonen des Unbewussten und Verdrängten, macht das bislang nicht Greifbare bewusst durch Verschriftlichung. Literatur schreibe die Leidensgeschichte der Menschheit, konstatierte wiederholt Gerhard Roth.[24] Mit den globalen Auswirkungen von Krieg, Not, Asyl und Migration stellen sich die Schreibenden über das eigene, noch geschützte Dasein hinaus den elementaren Fragen von Existenz und Perspektivlosigkeit, stellen sich einer Realität bis zur Praxis in Begleitinitiativen, in Sprachunterricht, als Volontäre in privatem und ökonomischem Engagement. Die Literatur gewinnt dadurch an Fakten, an Funktion und Vernetzung, an Zugehörigkeit und Verständnis, und sie gewinnt damit erneut etwas wie Hoffnung, die sie in ihrer Geschichte des Aufdeckens und der Anprangerung, der Klage und Anklage mitunter verloren hat: das Glück der Begegnung, Sinnhaftigkeit im Engagement.[25]

---

[22] Dokumentiert in „Der Hammer. Die Zeitung der Alten Schmiede“, Nr. 76/Juni 2015

[23] Ein Drittel der Wiener Bevölkerung ist aus dem Ausland zugezogen: aus Deutschland 38.000, aus Polen 35.000, Rumänien 20.000, Russland 13.000, die größte Gruppe mit 120.000 Menschen aber kommt aus den ehemaligen jugoslawischen Ländern (Kroatien 18.000, Serbien 70.000) und der Türkei (44.000). In diesen Zahlen nicht enthalten sind jene Migranten, die bereits die österreichische Staatsbürgerschaft angenommen haben. Siehe https://www.wien.gv.at/statistik/bevoelkerung/tabellen/bevoelkerung-staat-geschl-zr.htm, abgerufen am 20.5.2017

[24] Mehrfach im Gespräch mit dem Autor; M.K.

[25] Martin Horvaths “Mohr im Hemd oder Wie ich auszog, die Welt zu retten” (München: DVA

In der politischen Diskussion wird ja nach wie vor ausgeblendet, wie die eigene Kultur geprägt ist von Zu- und Abwanderung; Migrationsgeschichte findet sich in jeder Region, oft in der eigenen Familie. Es verlassen seit Jahrhunderten und nach wie vor Zigtausende von Österreichern ihr Land. Was man Abwanderung nennt, steht dabei pejorativ für jene Normalform der Emigration, die aufgrund der Aussichtslosigkeit daheim anderswo Arbeit und neue Lebenschancen zu finden hofft. Kontinentale wie interkontinentale Abwanderung war und ist in allen europäischen Ländern aus ökonomischer Not sowohl aus industriellen wie ländlichen Regionen erfolgt; auch Japan kennt diese Abwanderung aufgrund der Chancenlosigkeit, den Lebensunterhalt im Herkunftsland zu bestreiten, Tausende von jungen Menschen zogen aus japanischen Provinzen seit der Meiji-Zeit als Erntearbeiter nach Kalifornien oder in südamerikanische Länder wie Peru und Brasilien.[26]

Eines der großen Abwanderungsgebiete in Österreich war seit dem 19. Jahrhundert das Burgenland.[27] Viele Familien haben heute Verwandte in Nord- und Südamerika, haben womöglich ihre Wurzeln in kroatischen oder ungarischen Minderheiten vertriebener oder zugewanderte Landarbeiter.[28] Auch zu dieser Genealogie gibt es neuerdings vermehrt Literatur, wird biographische Recherche betrieben: im Verschwinden und in der Assimilation der Kroaten in Essays von Martin Pollack („Kontaminierte Landschaften“, Residenz Verlag 2014), in der Zuwanderung der Vorfahren bei Manfred Chobot („Reise nach Unterkralowitz“, Limbus Verlag 2009, ein Familienpanorama über vier Generationen), in der Emigration nach Nordamerika, um feudaler und industriellen Ausbeutung und Not in der Heimat zu entkommen in Helene Flöss ebenfalls vier Generationen übergreifenden Roman „Brüchige Ufer“ (2005). Von drei Schwestern, die auswandern und am amerikanischen Traum zugrunde gehen, handelt der 2017

2012) wäre ein wunderbares Beispiel; der Roman entstand aufgrund der mehrjährigen Erfahrungen des Autors als Sprachlehrer im Wiener Asylheim für unbegleitete minderjährige Flüchtlinge.

[26] Größte japanische Auswanderungsgebiete waren Brasilien (1,6 Millionen) und die U.S.A. (1,4 Millionen). In Deutschland leben derzeit rund 70.000 japanische Expatriats. Siehe Jochen Oltmer: Globale Migration. Geschichte und Gegenwart. C.H. Beck Reihe Wissen 2012

[27] „Durch die Entwicklung ergab sich auch die kuriose Situation, dass um 1970 etwa 30.000 Burgenländer in Chicago lebten, was damals etwa der dreifachen Einwohnerzahl der Landeshauptstadt Eisenstadt entsprach. Die nordamerikanische Metropole wurde daher auch oft scherzhaft als die größte burgenländische Stadt bezeichnet.“ „Chicago, die größte Stadt des heutigen Burgenlandes“. Philipp Wagner, Wiener Zeitung, 17.9.2001, siehe unter http://www.wienerzeitung.at/nachrichten/archiv/200327_Chicago-die-groesste-Stadt-des-heutigen-Burgenlandes.html
In der südburgenländischen Stadt Güssing gibt es ein eigenes Auswanderermuseum, siehe unter http://kultur-burgenland.at/de/partnerbetrieb/auswanderermuseum-güssing

[28] Klaus Hoffers Roman „Halbwegs. Bei den Bieresch 1“ (1979, 1983 folgte der zweite Teil, 2007 die gemeinsame Neuauflage im Droschl-Verlag in Graz), stellt dies auf wunderbare Weise dar. Er spielt in einer solchen Bevölkerungsgruppe, berichtet von ihren Ursprüngen, Erzählungen, Mythen und Bräuchen.

erschienene Roman „Chikago“ der jungen Theodora Bauer (geb. 1990, aufgewachsen im Burgenland), die 2014 mit einer versiert wahrnehmungsorientierten Familiengeschichte über einen in Südamerika verstorbenen Onkel debütierte und aufhorchen ließ; weiteres wird folgen.[29]

[29] Ein für den 27.9.2017 geplantes Podiumsgespräch zum Thema „Exil in der österreichischen Gesellschaft“ im „Republikanischen Club – Neues Österreich“ mit Hazel Rosenstrauch, Ana Milić, Ljiljana Radonić, Ilker Ataç wurde folgendermaßen angekündigt: „Die Erfahrung von Exil – als möglicher Ausdruck erzwungener Migration, von Flucht, Vertreibung, Verfolgung oder Deportation – ist inhärenter Aspekt der österreichischen Gesellschaft. Wo wird in Österreich Exilerfahrung sichtbar, historisch und gegenwärtig und mit Verweis auf die Zukunft? Und welche Erfahrungen von Exil werden unsichtbar gemacht? Wie lässt sich Exil verstehen, auch in Abgrenzung und Überschneidung zu anderen Formen der Migration? Welches Spannungsfeld ergibt sich zwischen Exilgedächtnis und dominantem Gedächtnis? Und wie verändert sich der Zusammenhang von Exil und Gedächtnis im Zeitverlauf und Generationswechsel?“ Siehe unter http://www.repclub.at/veranstaltungen/, abgerufen am 1.9.2017

日本語討論記録

質疑応答１：
発表者、徳永への質疑が日本語で行われた。一つ目の質問は、ヨーゼフ・ヴィンクラー(Josef Winkler)に関するものであった。発表の中では、ヴィンクラーは、世界のどこへ赴こうとも常に意識は故郷のケルンテンへと戻っていき、作家はローカルに呪縛されていると言われているが、それは死の儀式に対する作家の興味・関心の現れであり、むしろ作家は、死といった普遍的なものを志向しているのではないかという意見が表明された。この指摘を受けて、発表者は、確かに作家は、様々な国の死の儀式を描いており、死という普遍的なものをグローバルに描いているという見方も成り立つことを認めた。また発表者クバチェクからは、ヴィンクラーはローカルを描いているだけではなく、ウクライナからケルンテンへ移住させられた者を描いた *Die Verschleppung*（1983 年）という重要な作品があることも忘れてはならない、というコメントがあった。二つ目の質問は、ケルンテンにおけるマイノリティ、スロヴェニア系の文学に関するものであった。たとえオーストリアのケルンテンにおけるスロヴェニア語というマイナー言語の問題を描いているとはいえ、ドイツ語を母語とするリディア・ミッシュクルニク(Lydia Mischkulnig)と、スロヴェニア語を母語とするマヤ・ハーダーラップ(Maja Haderlap)を同列に論じるべきではないという重要な指摘があった。またスロヴェニア系のマイナー文学を現在論じる意義についての質問があった。発表者は、日本国内に目をうつした場合、大国の文学（ドイツ文学など）とは異なって、オーストリア文学自体がすでにマイノリティ文学であること、オーストリア文学自体が、周縁のシンボルとなっており、周縁から世界を見る視座を得るためにも、オーストリア文学を研究する意義があることを述べた。またスロヴェニア系住民の三世代に渡る歴史を描いたハーダーラップの小説『忘却の天使』(*Engel des Vergessens (2013)*)が、昨年、本人の演出で演劇としてウィーンで上演されたことを述べた。そのパンフレットの中でハーダーラップは、ケルンテンでは現在でも過去の清算がなされておらず、戦時中の問題は未だタブーのままであると述べている。発表者はこの発言をそのまま批判することなく受け取っていることを述べた。少数民族に注目することは同時に民族問題も主題化されるという批判的な指摘は、重要なものであると発表者は認識した。

質疑応答２：
スロヴェニア語を習い始めたという質問者から発表者徳永に対して、ハーダーラップはドイツ語とスロヴェニア語のどちらの作品が多いのか、そしてスロヴェニア語で創作している最近の作家の有無に関しての質問があった。発表者は、ハーダーラップは主にスロヴェニア語で詩作をしており、ドイツ語で書かれた作品としては現在のところ小説『忘却の天使』のみであることを答えた。また最近のスロヴェニア語の作家に関しては、質疑応答時には、神戸大学でスロヴェニアの詩人と日本の詩人たちとの朗読会が行われたことを指摘したが、詳細は失念していた。この朗読会は日本側からは福間健二、野村喜和夫、菅啓次郎、三角みづ紀、橘上、スロヴェニア側からはミラン・デクレパ、アレシュ・シュテゲル、ガシュペル・ピウシェク、カティア・ペラトが参加し、2012 年スロヴェニアのマリボルで、その後日本国内で開催されたものである。その成果は「詩の対話−スロヴェニア＋日本」というタイトルで『現代詩手帖』2014 年 3 月号に掲載されている。またスロヴェニアとオーストリアに関しては、発表者 Vogl によって、ゲルマン、スラヴ、ローマの関係、スラヴのゲルマン化など、歴史的

説明もドイツ語でなされた。なお、ハントケが翻訳しているスロヴェニア作家、フローリアン・リープス　(Florjan Lipuš)（1937 年生まれ）はオーストリアでも有名である。

質疑応答３

シンポジウムの最後の締めとして、オーストリア現代文学ゼミナールの設立の経緯とこれまでの歴史を振り返る言及がなされた。ゼミナールの開催地である野沢温泉が遠方であること、またゼミの参加料が高いということなど、デメリットはあるものの、そのデメリットを超える成果が上がっており、現在活躍するオーストリアの作家を招聘するゼミナールは他に存在せず、このゼミナールは、日本とオーストリアをつなぐ重要な役割を果たしていることが全員によって確認された。

（文責：徳永恭子）

Protokoll der Diskussion auf Deutsch

Frage: W. G. Sebald ist insofern vergleichbar mit Rosei, als auch er einen Großteil seiner Metaphorik vom Reisen bezieht. Er nimmt aber immer wieder im selben Schema - also Katastrophe, Ruinenhaftes, Untergänge - die Natur wahr. Sebalds Grundschema, die Ruine, ist auch bei Walter Benjamin ein wichtiger Topos, bedeutet die melancholische Wahrnehmung des Weltlaufs. Spielt das Bild der Ruine in den Texten von Peter Rosei eine Rolle? Oder gibt es ein anderes bestimmendes Grundschema, mit dem er auf seinen Reisen die Welt wahrnimmt?

V: Nein, die Ruine spielt bei Rosei keine Rolle, jedenfalls nicht an der Oberfläche. Die sich bei ihm wiederholenden Themen sind die unendliche Reise, die nicht abschließbare Bewegung, damit gekoppelt eine Haltung der Aussichtslosigkeit, der Verlorenheit und einer gewissen Resignation angesichts der Undurchdringlichkeit von Wirklichkeit.

K: Unheimliche Heimat war schon Sebalds Thema. Ähnlich wie Reinhard Kaiser-Mühlecker blickt er zurück in eine NS-Zeit, in der er immerhin noch geboren ist. Bei Sebald ist diese Thematik biographisch begründet, weil sein Vater hier belastet ist. Der große Schnitt besteht darin, dass das für eine jüngere Generation von AutorInnen mittlerweile die Geschichte der inzwischen verstorbenen Großväter ist; aber für uns war das die Generation der Väter, die hier alle betroffen oder involviert waren. Rosei wächst auf in dieser Generation, die vom Ruin einer Gesellschaft betroffen ist. Er ist aufgewachsen in einer Ruinenrealität, in einer zerbombten Wirklichkeit, in der Zerstörung des Vertrauens, einer verzweifelten Hoffnung auf das Humane. Die heutige Generation ist doch mit einem völlig anderen Bewusstsein in einer demokratischen, pluralistischen Gesellschaft aufgewachsen, mit zumindest im eigenen Land umfassendem sozialem Frieden und Wohlstand, ökonomischem Fortschritt, mit viel mehr Zuwendung und Aufgeschlossenheit. Darin liegt doch eine Differenz zwischen der Generation von Sebald und Rosei und dieser heute nachrückenden Generation, die mit dramatischen globalen Fragen von Klimawandel, furchtbaren regionalen Kriegen und Flucht und Migration konfrontiert ist.

F: Es wurde hier gesagt, dass 30% der österreichischen Schriftsteller nicht im Land geboren sind.

K: Das bezog sich nicht auf die Schreibenden, sondern allgemein: 50% der Wiener Bevölkerung sind laut Statistik nicht in Wien geboren, sondern zugezogen aus Bundesländern und aus dem Ausland, zum Teil leben sie nur temporär in Wien, etwa zum Studium oder als Angestellte internationaler Organisationen und Konzerne; Wien ist Sitz vieler solcher Organisationen, inklusive UNO oder OPEC (Ölproduzierende Staaten) etc. 30% der in Wien lebenden Menschen sind keine österreichischen Staatsbürger. Das heißt, sie leben zwar in Wien, öffnen und bereichern das kulturelle Leben in dieser Stadt, tragen vielfach dazu bei, haben aber kein Wahlrecht auf nationaler Ebene.

F: Wer von den zum Seminar zur Österreichischen Gegenwartsliteratur in Japan eingeladenen Schriftstellern ist eigentlich in Wien geboren?

V: Auf jeden Fall Peter Rosei und Robert Menasse.

K: Ransmayr, Scholl, Schreiner, Franzobl, Einzinger kommen aus Oberösterreich, Winkler

und Mischkulnig aus Kärnten, Roth, Glavinic, Setz aus der Steiermark, Hell, Röggla aus Salzburg, Haslinger aus dem nördlichen Waldviertel, Streeruwitz aus Baden bei Wien, Sabine Gruber ist Südtirolerin, Doron Rabinovici ist in Tel Aviv geboren, hat israelische und österreichische Staatsbürgerschaft, Karl-Markus Gauß ist in Salzburg geboren, aber seine Eltern waren Donauschwaben, Angehörige einer deutschsprachigen Bevölkerung im östlichen Teil der ehemaligen österreichisch-ungarischen Monarchie, Peter Waterhouse ist in Berlin geboren, in Malaysia aufgewachsen, hat britisch-österreichische Eltern.

F: Zum Grundthema des Seminars habe ich noch eine Frage. Glokalisierung und Globalisierung sind eigentlich *die* Themen der Weltliteratur im Moment. Wie sieht es da in der österreichischen Literatur aus, was ist das wichtigste Thema? Ich glaube, das Österreichische und die Glokalisierung sind ganz allgemeine Auffassungen der Literatur von jetzt.

T: Das stimmt. Wir haben uns eigentlich nur mit den AutorInnen beschäftigt, die in Österreich geboren sind. Die gegenwärtige österreichische Literatur so zu verengen ist für mich fragwürdig. Natürlich fühlen sich auch nicht wenige von denjenigen österreichischen AutorInnen, die nicht im Land geboren sind, im weitesten Sinn österreichisch. Aber eigentlich müsste man den Begriff der österreichischen Literatur erweitern.

V: Da muss man sich erst einmal vergegenwärtigen, um was es sich bei Österreich heute handelt, nämlich um einen sehr jungen Staat, der erst 1945 als Zweite Republik Österreich gegründet wurde. Wie Sie ja wissen, gab es auch eine so genannte Erste Republik, die 1918 gegründet wurde, gleichsam wider Willen und in einem Bürgerkrieg endete. Der deutsch-österreichische Rest der Habsburgermonarchie war ja damals eher bestrebt, sich mit Deutschland zu vereinigen, aber die Alliierten waren dagegen. Nach dem Zweiten Weltkrieg hat man einen Neuanfang versucht mit einem besser funktionierenden Staat als Willensnation bzw. Staatsnation oder wie immer man das nennen will. Weil man sich nicht so gut über die Sprache definieren konnte, hat man eine Nation gegründet, die in erster Linie von einem Bekenntnis der in ihr lebenden Bürger getragen werden sollte. Zu einer Nation gehören auch Kultur und Landessprache, doch sich als Sprachnation zu definieren war wegen der Abgrenzungsprobleme zu Deutschland schwierig. Die Herausbildung einer Kulturnation war ein Prozess, der einige Jahrzehnte gedauert hat und mit viel staatlicher Unterstützung vor sich gegangen ist. Es gab ja auch immer wieder Auseinandersetzungen bezüglich des gemeinsamen kulturellen Erbes mit Deutschland, vor allem desjenigen Erbes, das vor dem Ausscheiden der Habsburger aus dem Reich entstanden ist. Da gab es ein weites Feld von Unklarheiten. Dazu gab es noch den Überhang einer unbewältigten jüngeren Vergangenheit sowie des Erbe des Bürgerkriegs, der in den dreißiger Jahren stattgefunden hatte. All das musste im entsprechend langsamen Prozess des Werdens der Nation verarbeitet werden. Die Literatur hat man damals neben der Musik und der bildenden Kunst als eines der Medien gesehen, diesen Prozess zu befördern. Viele haben sich beispielsweise auf ein von Italien beeinflusstes katholisch-barockes Erbe berufen im Gegensatz zu dem von Protestantismus und französischem Klassizismus geprägten Preußen. Da gab es verschiedenste Ansätze. Man hat jedenfalls versucht, in der Literatur zu etwas wie einer österreichischen Identität zu finden. Das war und ist bis zum heutigen Tag vielen Leuten, die deutschnationalen Gedanken anhängen, ein Dorn im Auge. Der Historiker Taras Borodajkewycz, den Sie sicher kennen werden, war Professor an der Universität Wien, wurde aber wegen seiner zweifelhaften Ansichten zum Nationalsozialismus frühzeitig in den Ruhestand geschickt. Er hat die österreichische Nation als einen „blutleeren Literaturhomunkulus" bezeichnet. Wir haben es hier mit einem Gemisch von Anmaßung und Unkenntnis zu tun. Literatur war jedenfalls eine der Schienen, auf denen man versucht hat, so etwas wie eine österreichische Identität zu

begründen. Diese Identität ist im Laufe der Jahrzehnte, in der diese Republik an Reife gewonnen hat, zu einer Art Selbstverständlichkeit geworden. Aufgrund diverser Veränderungen - unter anderem auch des Stellenwerts von Literatur - ist dieses Literatur-Paradigma immer unwichtiger geworden. In der neuen Literatur, die Martin Kubaczek in seinem Vortrag beschrieben hat, also in Texten, die in den letzten zehn, fünfzehn Jahren entstanden sind, finden sich ganz andere Ansätze. Es geht nicht mehr darum, eine Art Österreich-Fiktion herzustellen, eine Art nationaler Basismythologie, ohne welche die Republik nicht leben könnte, denn dass diese Republik lebensfähig ist, hat sie ja nun über Jahrzehnte hinweg bewiesen.

K: Vielleicht sollten wir noch rekapitulieren, dass die Österreich-Idee erst nach 1918, also nach dem Zusammenbruch der Monarchie, wirklich thematisiert wurde. Nach 1945 wurde die Diskussion durch Publikationen vor allem von außen angestoßen, wie „The Broken Eagle" von C.E. Williams oder Claudio Magris, der seinen „Habsburgischen Mythos" (es war seine Dissertation) auf Italienisch verfasste. Oder man denke an die U.S.-amerikanischen Kultur- und Literaturwissenschafter Carl E. Schorske, Janik und Toulmin. Mir am hilfreichsten aber war William Johnstons „Österreichische Kultur- und Geistesgeschichte: Gesellschaft und Ideen im Donauraum 1848 bis 1938", die weit hinausgeht über die im Nachkriegsösterreich etwa vom Salzburger Germanisten Walter Weiss kanonisierten Übereinkünfte einer österreichischen Identität aus barockem Katholizismus, niedergeschlagener Gegenreformation und spätfeudaler Atmosphäre. Johnston entwickelt Kategorien, die weit komplexer sind, er bezieht sich auf die gesamte Monarchie, hat auch Ungarn einbezogen, die Wissenschaften, Künste, Medizin, etc. Eine neuere Publikation von William Johnston, der 2009 erschienene Band „Der österreichische Mensch" portraitiert 28 Essayisten aus der Zwischenkriegszeit mit ihren Beiträgen zur Frage einer österreichischen Eigenart in einer Zeit, als es dieses ursprüngliche Österreich nicht mehr gibt. Sie kennen vermutlich Hofmannsthals kleinen Aufsatz „Preuße und Österreicher", der sich kontrastiv definiert. Dabei geht es um Attitüden und Haltungen, um eine andere Kommunikationsform, letztlich um die Differenz im kulturellen Habitus: dieser Begriff wird von Norbert Elias in seiner „Kulturgeschichte der Menschheit" 1936 geprägt. William Johnston übernimmt ihn, vermittelt wird er ihm über die wichtigen Arbeiten des Wiener Historikers und Schriftsteller Friedrich Heer. Der Begriff des Habitus wird dann in der Soziologie bei Bourdieu zentral: Wie kann ich mit Sprach- und Kommunikationsformen Zugehörigkeit ausdrücken? Johnston hebt die Idee der Zugehörigkeit zu einem politischen und sozio-kulturellen Gefüge hervor, sieht drei verbindende Elemente der Monarchie: Katholizismus, Militär (wo die verschiedenen Einheiten jeweils mit der Volkstracht ihrer Herkunftsländer ausgestattet waren), und Beamtentum - eine Verwaltung, die in der Ausbildung an Theresianischen Akademien auf den Dienst am Kaiserhaus eingeschworen wurde. Zweisprachigkeit, Mehrsprachigkeit war normal. Neu bei Johnston ist, dass er zentrale Kriterien auch aus anderen Gebieten gewinnt, aus Naturwissenschaft und Medizin; die war damals führend im Diagnostischen – da war man Weltspitze, ebenso wie in der Chirurgie. Also Definieren und Wegschneiden. Weniger Interesse hätte es für das Heilende oder Systembildende gegeben, meint Johnston, er sieht da eine Präferenz für das Nihilistisch-Diagnostische. Das öffnet auch den Blick auf andere Kontexte, damit sehe ich auch die Sprachskepsis und Sprachkritik von Mauthner und Karl Kraus neu, oder wenn ich in Wittgensteins Tagebuch aus Cambridge den Eintrag lese:„I destroy, I destroy, I destroy." Gemeint ist das als verzweifelter Selbstvorwurf, als Selbstbezichtigung. Er hatte keine Ahnung, wie zentral seine Denkweise und sein Ansatz noch für die Sprachphilosophie und Linguistik sein würden.

V: Was die Beschreibung des österreichischen Menschen anlangt: Da lassen sich eine ganze Menge an Attributen zusammentragen. Ich glaube aber, dass es wichtig ist, nicht in eine Art

essentialistischer Haltung zu verfallen. DEN österreichischen Menschen gibt es nicht, genauso wenig wie es das Österreichische als metaphysische Kategorie gibt. Man sollte sich davon ein für alle Mal verabschieden.

T: Aber ich glaube schon, dass es nach wie vor den Habitus gibt.

V: Natürlich, das lässt sich dann ja auch deskriptiv beschreiben, vor allem, was historische Epochen anlangt.

F: Bei Kaiser-Mühlecker würde ich den Bruch doch noch einmal problematisieren, denn gerade in seinen Texten scheint ja die NS-Vergangenheit noch sehr zentral zu sein. Das durch Zuwendung genährte Weltvertrauen sehe ich in den Gestalten Kaiser-Mühleckers so noch nicht. Dadurch entstehen interessante Dinge. Es sind also nicht bloße Coming-of-Age-Geschichten, Veränderungsprozesse, die da in Gang gesetzt werden, denn man geht noch einmal zurück, man hängt so sehr an der Vergangenheit, dass man sich davon noch nicht lösen kann. Und dadurch entsteht eine Sensibilität für Prozesse, die bei anderen Autoren irgendwie runterfallen. Ob man da nicht schauen müsste, wie sich das transitorische Element in der Gegenwartsliteratur doch noch mehr auszudifferenzieren scheint?

K: Kaiser-Mühlecker ist ja insofern interessant, als er diese Richtungen in sich bündelt. Er wird in seiner Sprachsensibilität und subtilen sinnlichen Wahrnehmungsqualität immer auf Stifter bezogen. Sichtbar wird in seinen Romanen über die Landbevölkerung die Orientierungslosigkeit dieser Generation im Verlust der ursprünglichen agrarischen Lebensform. Er hat jetzt sieben teils sehr umfangreiche Romane geschrieben, die alle um diese Frage kreisen: Wie weiter? Wohin? Die Nazivergangenheit ist ebenso präsent, sie ist auf dem Land überall präsent, da kommt man nicht darum herum. Sie ist zwar nicht mehr die unmittelbare Belastungsgeschichte wie bei Sebald, aber in den Tiefen der Familiengeschichte kommt man nicht herum, da wird alles blockiert, weil auch darüber immer geschwiegen wurde. Da ist natürlich eine Identitätsproblematik gegeben, aber die eigentliche Problematik, die er immer wieder durchspielt, kreist um die Frage: Wie gestalte ich mein Leben? In dieser verlorenen agrarischen Struktur, die es nicht mehr gibt. Das Dorf war immer ein Symbol für die Gemeinschaft für das Sich-Aufeinander-Beziehen, aber das ist alles kaputt. Das zeigt sich, wenn man Kaiser-Mühlecker mit Winkler vergleicht. Da sieht man die Progression in der Wahrnehmung. Winkler bezieht sich noch auf das Dorf, das es in dieser Form heute nicht mehr gibt. In den Dörfern gibt es keine Kirchen, keine Wirtshäuser mehr. Höchstens eine Tankstelle mit Shop. Es gibt kein öffentliches Zentrum der Kommunikation mehr. Da, wo einmal der Herrgottswinkel war, stand später der Fernsehapparat. Wenn bei Kaiser-Mühlecker ein Sohn gerne die Landwirtschaft übernehmen würde, aber der Vater verspekuliert sie mit Aktiengeschäften, dann ist das schon ein anderes Zeit-Kolorit als bei Winkler, dessen Vater sich noch 95jähig einen neuen Traktor kauft und in den Wald zum Holzfällen fährt, wie man im Roman „Roppongi“ lesen kann.
(…)

Zur Frage der auf Slowenisch geschriebenen Literatur in Österreich:

V: Ich möchte mich hier ganz kurz einschalten. Es gibt sozusagen ein Hauptwerk der österreichischen Literatur nach 1945, das auf Deutsch den Titel „Der Zögling Tjaž” trägt. Das Buch wurde von Florjan Lipuš, einem Kärntner Slowenen geschrieben, und zwar auf Slowenisch. Peter Handke hat es dann in den achtziger Jahren ins Deutsche übersetzt. Das Slowenische gehört ja ebenso wie das Kroatische, das Tschechische, das Slowakische, das Ungarische und das Romani zu den Minderheitensprachen, was mit ein Grund dafür sein mag,

warum es schwierig ist, österreichische Identität ausschließlich über das Deutsche zu definieren. Die Slowenische Volksgruppe beispielsweise hatte und hat es sehr schwer, die ihr verfassungsmäßige gewährten Rechte auch durchzusetzen. Das Siedlungsgebiet der Kärntner Slowenen befindet sich in einer Region, die früher einmal Windische Mark geheißen hat und zu Zeiten des Reichs eine Grenzmark gegenüber den Slawen gebildet hat. Dort hat über die Jahrhunderte eine Verschmelzung verschiedenster Kulturen stattgefunden, wie in vielen Regionen Europas. Wir haben also zuerst mal das Keltische, dann das Römische, das Germanische, das Slawische. Zu Zeiten der Völkerwanderung haben die Germanen und die Slawen eine Art von Zweckbündnis gebildet gegen die Awaren, die im 8. Jahrhundert zu einer ganz großen Gefahr wurden. Es ist ja allgemein bekannt, dass die slawische Besiedelung Österreichs bis weit in die Alpen hinein reicht und das ist ja auch historisch belegbar, aufgrund der sprachlichen Wurzeln einer Unzahl von Ortsnamen. Und Österreich ist auch ein Gebiet, in dem über Jahrhunderte die Germanisierung der Slawen stattgefunden hat. Und das ist auch ein Teil der österreichischen Identität, auf die man sich nach 1945 wieder verstärkt besonnen hat. Das Österreichische ist so eine Art Verbindungsglied zwischen dem Germanischen, dem Slawischen und dem Romanischen und könnte in seiner Supra-Nationalität eventuell auch Hilfestellungen bei der Bewältigung nationalistischer Krisen im heutigen Europa bieten.
(…)

K: Folgendes möchte ich in Sachen Josef Winkler noch gerne ergänzen. Josef Winkler, und das wird leider oft übersehen, hat nach der wuchtigen Trilogie „Menschenkind“, „Ackermann aus Kärnten“ und „Muttersprache“ das Buch „Die Verschleppung” geschrieben, das 1983 erschienen ist. Es ist ein voluminöser Roman, der von einer jungen Ukrainerin, die in der Nazizeit nach Kärnten gebracht wurde, berichtet und das Leben dieser Frau, die dann in Kärnten geblieben ist, zum Thema hat. In Österreich und Deutschland wurden ja viele Leute aus den besetzten Gebieten Osteuropas, aber auch aus Frankreich, zur Zwangsarbeit „verpflichtet“, das heißt verschleppt und gezwungen, dort auszuhelfen, wo die Männer gefehlt haben, wie zum Beispiel in der Landwirtschaft. In Japan war das ähnlich, wenn auch nicht in dieser Zahlendimension, mit Koreanern. Dieses Buch ist für mich auch ein Anknüpfungspunkt zur heute aktuellen Emigrationsliteratur. Winkler zeigt schon 1983 ein Engagement, das heute literarisch gegenüber Migranten und Asylwerbern sichtbar wird. Was als engagierte Literatur bezeichnet und gefordert wurde in den 1970er-Jahren, das findet sich heute aus schlicht vernünftigen Gründen bei jungen AutorInnen, die als Sprachlehrer im Asylbereich arbeiten und dann Romane über diese Menschen schreiben oder aus den Erzählungen Figuren schaffen, die Geschichten von unbegleiteten minderjährigen Flüchtlingen darstellen, etc. Sie geben diesen Menschen, die keine Sprache haben, die alles verloren haben, eine Realität zurück, eine Wirklichkeit in der Sprache. Und das hat auch Winkler damals mit seinem Roman „Die Verschleppung” geleistet. Das war damals eine Pionierarbeit. Die Literatur hat thematisch etwas gefunden, das eine unmittelbare Notwendigkeit hat, ganz konkret Sinn macht, nämlich Schicksale zu beschreiben. Damit leistet sie auch einen Beitrag zur Integrationsarbeit. Was in der Gegenwart diesbezüglich entsteht, macht Sinn.

(zusammengefasst von Walter Vogl)

Studienreihe der Japanischen Gesellschaft für Germanistik
Nr.129
Alle Rechte vorbehalten
©2018 Japanische Gesellschaft für Germanistik Tokyo

日本独文会研究叢書　129 号
2018 年5月26日発行

ポスト・ハプスブルク神話
―グローバリゼーションとローカルな土着の狭間に動くオーストリア現代文学―

編集　　土屋勝彦
発行　日本独文学会
〒170-0005
東京都豊島区南大塚 3-34-6-603
電話　03-5950-1147
メールフォーム　http://www.jgg.jp/mailform/buero/

©2018　日本独文学会

SrJGG

ISBN: 978-4-908452-19-2